
我拳は銃なりて

Caster

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我拳は銃なりて

【Nコード】

N3392V

【作者名】

Caster

【あらすじ】

二次創作好きの男がテンプレ乙のごとく二次創作へ…

神いわくハッピーエンドを目指せらしいけど…そんなの当たり前だろ？

ネギま？…上等だよ。俺だけの物語っていつのを見せてやるぜ！！
自慢の拳でどんな敵も貫いてやる！！

といきこんでみたけど、これって俺のキャラじゃないからやめよ…
つてな感じで二枚目になりきれない三枚目がお送りする物語。

原作破壊・キャラ崩壊はテンプレってことでどうか一つお願いしま

す
!
!

プロローグ（前書き）

初めましてCasterといいます。

久しぶりにssを書き始めたのでうまくいくか不安ですが頑張って投稿していききたいと思います。

さて最初はプロローグ。

大体こんな感じと言うものを掴んでくれればそれでいいです。
それでは我拳は銃なりて始まります。

プロローグ

暗い

ああ…そうか電気消したっけ。

ってあれ？体が動かない。まさかこれが俗に言う金縛りって奴なのか？

うは〜なんか貴重な体験してるな。

「なんじゃ。結構落ちついとるの」

は？

誰か俺の部屋にいるのか？

俺は一人暮らしのはずなんだけど…

「ああその疑問については簡単じゃ」

へ？

「あのな…お主は死んだのじゃ」

は？……………はああああ！？

「それでじゃが…」

いやちょっとまってよ。何でそんなに軽いんだよ。ていうか死んだって何？

「ちなみにお主の死因は病死じゃ」

いやいや…そういうことを聞いてるんじゃないやなくてだな…。あーもう訳が分からん。最初から説明してくれ!!!

「ふむ。それもそうじゃな…。ごほん。まずお主はすでに死んだ。これは良いかの？」

良くないけどまあ…話が進まないからそれでいい。

「懸命な判断じゃな。…でじゃ死んだお主は今輪廻の狭間に来ておる訳じゃが…大体のものはここを素通りして三途の川に行くのじゃが、お主は少々特別での、じゃからこうしてここにとどまっておると言っわけじゃ。」

ふ〜ん。ていうか本当に三途の川なんてあるんだ…。それで…いちお死んだ俺が特別ってどういうこと？

「お主は平行世界と言っ言葉を知っておるかね？」

まあ知ってるよ。簡単に言えば俺がいた場所に良く似た別の場所のことだろ？

「まあその理解で大体あつておる。本来人とは同じ世界でしか生きられんものじゃ。どんな死に方をしても同じ。同じ世界に転生する事になるわけじゃが、数億人に一人と言っ割合で他の世界に行く資格を持ったものが現れる。それがお主と言っわけじゃな」

なんていうか…テンプレ？いや違うな良く似たものを俺はよく知っている気がする。

「まあお主の世界で言っ二次創作、いや外史といった方が分かりや

すいかの？それと同じ運命をたどる必要があるということじゃ。」
必要？

「まあここからはちょっとしたこぼれ話になるわけじゃがな。世界には刺激と言うものが必要での。同じことを同じようにやってもその世界は変わらない。ループしているのと同じそれではいかんのだよ。」

と言つと？

「変わらない世界など、死んでいるのと同じじゃ。まあ極論かもしれんがの。世界も人も一緒日々変わる事で生きている。そのためにお主のように違う世界に転生する事が出来るものを探し、そっちに送り届けるわけじゃ。」

なるほど。極論って言ったけどなんとなく分かるような気がするわ。

「そう言ってもらえて嬉しいの。さて、話を戻すが本来ならその資格があつても記憶を消してそっちに転生するようにすればいいのじゃが…。今回行く場所は少々特殊での。なのでこうして転生する前に話をしとる訳じゃ。」

特殊ねえ…。ただでさえ別の世界に行く事になつてるのにさらに特殊とは…俺運がいいのか悪いのかわかんねえ。

「まあそう言わんでくれ。で、特殊と言うはじゃな言ってみれば白い世界。つまりこれからつくられる新しい世界に飛ばされる事になつておるのじゃ。」

新しい世界…。つまり自分の思い通りに世界を創れるってことか？

「正確にはちよつと違うがの。新しい世界といつても一から創るわけじゃなく、元からある世界をベースに新しい未来を創ると言ったところかの。まああれじゃ二次創作みたく原作破壊して自分が望む未来を創れってこのじゃの。」

みたくじゃなくて…まさにそのまんまじゃないか。

「それがそうとも言えんくての。大きく違う所は、規制が厳しいという事と、こちらの言う事を聞いてもらわなければならぬということじゃな。」

めんどくさそう…

「そう言わんでくれ。まず規制についてじゃが、能力の制限じゃなく、良くある他の世界の技術や技魔術などは原則としてもって行けん。つまり他の世界に Fate の法具は持って行けんし、特殊能力とかもなしというわけじゃ。」

なんていうかすでに死亡フラグが立ってる気がするんだけど？

「まあそれなりの事はできるから大丈夫じゃる。次にこちらの言う事を聞いて欲しいということじゃが…これはいろいろある。まあどんな世界に行ってもやってほしい事の一つは決まっておる。ハッピーエンド。これだけは実行して欲しい。」

それはあたりまえだろ？誰が好んでバッドエンドなんかなるかよ。

「ま、そうじゃろつて。ではあらかた説明が終わった所で…お主が

行く世界を教えよう」

いよいよか…柄にもなく緊張してるな。

出来れば知ってる世界が嬉しいが…

「お主が行く世界はネギま。魔法と科学両方が存在する面白い世界じゃな。」

へ〜ちよつと嬉しいかもしれない。まあこれが本当のことだったらだけどね。

「なんじゃ。まだうたがつとるのか…まあそれが普通かの。でじゃそこでお主はハッピーエンドを目指すわけじゃが、それを達成するために幾つかの力を授けようと思う。さてまず最初はお主の力…つまり魔力とか気の力のことじゃな。すまんがこれはお主の意見は聞けん。ベースの強弱を壊されてしまつては意味がないので。」

まあ確かにチートって奴にあこがれはあるけど、チートすぎるのもどうかと思うから別にいいです。

「良い心がけじゃの。さてまずお主の魔力じゃが、最終的にはナギと同じくらいにはなれるが、初期は赤き翼のアルより少し下と言う程度にしておく。そして気も最終的にはラカンより少し下と言う程度にはなるが、最初はガトウより下と言うところになる。」

えーそれってすでにかなりのハイスペックじゃないですか。チートにはしないって言つてたのにどういふことですか？

「それは仕方がないんじゃ。お主が飛ばされるのは丁度世界大戦の真つ只中。それくらいないと一人では生きていけんからの。では次

はお主の能力についてじゃが…何か希望はあるかの？」

希望ねえ…じゃあまず自分でオリジナルな魔法をつくってみたいかな。後はエヴァを人間に戻してやりたいんだけど…それも出来るのか？

「オリジナルについては魔法の才能をつけておく。それで大丈夫じゃろうて。そして…エヴァを人間に戻したいと言うことじゃが…これも大丈夫じゃな。ただそれ単体の力というものはほぼ無意味になつてしまつから、呪いも結界も状態異常も治せる力を授けることにするぞ。他にはあるかの？」

他：他：あ！ちよつと聞きたいんだけど他の世界の技はもっていないってことだけど、あつちで自分で再現するっているのはありなのか？

「ありじゃな。それに技と言つたがそれは特殊な力を用いなければ出来ない技。例を挙げるならNARUTOの血継限界を用いた技のことじゃからな。普通の武術や他の力で代用可能なものならいけると思うぞ？」

なら俺、銃闘技を使つてみたいんだけど…それは大丈夫なのか？

「む！それはなかなかマニアックな…じゃが可能じゃな。グレイゾンではあるが、あれは特殊な鍛錬を用いる事によつてできるようになる技じゃ。ブラットバーン…セカンドスキルについても才と言つほどのものじゃないから別にかまわん。しかしブラックアウトとかはちゃんと起こるから注意が必要じゃけどな。気を用いれば強力な武になるじゃろうて…。まあその分鍛錬はつらいものになるじゃろうが…そこはお主次第じゃな。それじゃそのために必要な武の才

とついでに知識を授けておこう。鍛錬方法も必要じゃし、原作にも詳しくは書かれてなかったからの。…ああサービスとして他の世界の武術の知識も与えておく。どう使うかはお主しだいじゃ。」

おお！それはうれしい。あゝあと一つだけ欲しいんだけど闇の魔法と感卦法を一緒に使える技みたいなのがほしいな。これってやっぱり無理？

「む。なかなか難解なことをいうな。じゃができない事はない。ただしそれ相応のデメリットは存在する事になるがかまわんか？」

まあそれが無いともう人じゃなくなるから仕方がないと思う。

「この考え時点ですでに人の道から外れる事になっておるんじゃが…まあ良い。あくまでネギまの世界にのつとつた力じゃからあの世界でももしかしたら実現可能かもしれんからな。さてその力については了解じゃ。詳しくはあちらに着いたときにポケットに紙を入れておくのでそれを見てくれい。あと名前じゃが…然となずけるが良い。これはネギが開発した太陰道よりもっと進んだ技法じゃ。これぐらい大それた名をつけてもよいじゃろ。」

分かった。これで十分。他はいらないよ。

「言われんでももう無理じゃよ。ああこれは必要として授けるのじやが、練金の知識と才もつけておく。銃闘技についても然についてもモノにするには時間が必要じゃ。魔法球があれば効率よく出来るし、魔法媒体も自分でつくらんと手に入れるのは苦労するじゃろうからな」

それはありがたいね。…ってなんか話進めちゃったけどこれは実は

夢でしたっていうオチはやっぱり無いわけ？

「ないぞ？それじゃ送るから達者でな」

え…いやちょっと…まって…いや…まってくださ…

こうしてこの話の主人公こと伊達武はネギまの世界へと旅たつのであった。

そこに待ち受けるのはどんな物語なのか…

それでは我拳は銃なりて…その物語を始めましょう。

「いったの。ワシはもう見守るしか出来ん。お主の未来が幸あらんことを。」

「あ、最初の課題いい忘れたの。まあ…紙で指令を送ればよいか…さて次の案件は…」

プロローグ（後書き）

今日はもう一話更新予定です。

第一話：親友との出会い。原作介入まであと少し！！（前書き）

と言っことで予告どおり投稿しました。

原作まで飛ばして行くので中身がちよっと薄いかもしれませんがそこは皆様の想像力で一つ補っていただければ嬉しいです。
では物語を始めましょう！

第一話：親友との出会い。原作介入まであと少し！！

ん…ここはどこだ？
確か俺死んで……………！！！！

「あゝ……俺死んだってやっぱりマジだったのかよ！！……うかあの神、もっとこうなんかあるだろ普通。死んだから他の世界に転生しろ！？そんなんで納得できるか……！！！！」

「……………といつても今更仕方が無いんだけど。はあ……とりあえず現状確認だな。確か手紙かなんか俺のポケットに入っているって言うてたよな。……見てみるか。」

〈神の手紙〉

この手紙を見ておるといふ事は無事に転生できたという事じゃな。さてもう一度言うがそこはネギまの世界じゃ。時代的には世界大戦真っ只中。赤き翼にラカンが加入する少し前といった所になる。まずお主にはラカンと一緒に紅き翼に入り創造主を倒してもらう事になるわけじゃがそのためには自身を鍛える必要があるため2〜3ヶ月前とさせてもらった。

近くに荷物があるがその中には魔法球を作るための材料と魔法媒体を造る為の材料が入っており。それと魔法球に入っても歳をとらなくする魔導具の材料も入っておりからうまく活用してくれ。少し歩けば町へ行けるし、すぐ近くに洞窟があるからそこで己自身を鍛えるが良い。

3ヶ月たった後、近くの町にラカンと、紅き翼を倒して欲しいという依頼人が現れる。そこから原作に介入して欲しい。町に行けばそのまま自然に介入できる予定となっております。

ただし！！その時にどうしてもラカンと戦わなくてはいけなくなるため可能な限り力をつけておく事じゃ。――（実戦については心配ない。洞窟には誰も来る事は無いが、近くの森には幻獣など数多くの生物が生息しておる。そこで実戦を経験しなれることじゃ）ちなみにお主の年齢は14歳となっておる。それとあくまで不老不死ではないから、死なないよう注意するように。

二枚目にはお主が望んだ”然”の詳しい内容とデメリットが書いてある。それと言ってから思い出したのじゃがいくら魔法の才があっても知識がないと意味が無いので、魔法のことも少し記載しておいた。それ以上は誰かに教えてもらうように。手助けしようにももう送ってしまった後だったからそこら辺は納得して欲しい。

そして三枚目は地図と今この世界の情勢が書いてある。あつて損は無いはずじゃから使ってくれろと嬉しい。

最後に、この世界では魔法世界がつくられた世界というわけではなく、ちゃんと生きておる。創造主とかは原作と同じ知識しかもつておらぬのでそうとは気付いておらんはずじゃ。なので心配せんでもよろしい。

ではお主の未来が幸福でありますように……

神

〈神の手紙・終〉

「……………ん。ちよつとはいい人？じゃん。何も分からないままと言うわけでも無さそうだし、いきなり原作介入なんて無茶な事も言わないからちよつとは感謝してもいいかもしれぬ。さてと……」

俺はそう呟いてあたりを確認すると手紙の通り近くに大きなバックとそのすぐ後ろには洞窟があった。手紙に書いてあった通り俺はバックを持ってまず洞窟へと入り自分を強くするためにまず魔法球の製作に取り掛かるのであった。

……ネギまの世界に着いてから一日が経過した後。やっとの事で魔法球を作り出すことに成功した。知識とかは何が足りたかを考えればおのずとその答えがうかんで来る様で、たいした苦勞もしなかった。モノ自体はプラモデルでもつくっているような感覚でくみ上げていけるので大して時間が掛からなかったが、魔術式を込めたりするのになれてないせいか、時間が掛かってしまい一日が経過してしまった。

ちなみに飯はバックの中に多少のお金があったので近くの町へ行って買ってきた。

町に行つて今更だが本当にネギまの世界に来たんだなと実感したのは仕方がないと思う。

「さてと…魔法球は出来たし、中の時間も一時間を一日計算にしたし後はどうしようか…」

そう言つて少し考える。確かに魔法球は出来たがその中にはまっさら土地があるだけ、建物はおろか森も川も無い。そんな世界に行つたところでよい鍛錬は出来ないし第一生きていける気がしない。なので設定を少しいじり中に森とか川…更には滝まで作ることにした。森ができるまでは時間が掛かるらしくそれまでは中に入ることは出来なかった。

「こうして待っているだけつても時間の無駄だな。どうせラカンと戦つのは必然なわけだから少しでも早く鍛錬を開始するか。とりあえずは銃闘技を習得しないと…」

俺は頭の中にある銃闘技習得の鍛錬を開始し、その鍛錬のきつさに涙するのであった。

そして更に一日がたち……

「いたたた…全身…特に腕の筋肉痛がひどいな。まあ仕方が無いのかもしれないけど。とにかくこれでやっと魔法球に入れる。歳のとらない指輪も出来たし準備万端だな。さて…いっちょ気合入れていきますか。」

これから待ち受けるきつい鍛錬に心が折れないように、明るく振舞って心を奮い立たせる。

そして中に入って最初にやった事といえば……自分が住む場所。つまり建物の建設だった。

以外にもそれが良い鍛錬になり、更に言うなら気の運用の仕方も学べたため良い経験になったと思うようになったのは鍛錬を始めて少したった後だった。

ここよりは修行のダイジェストとなります。

銃闘技の修行

「120…121…ってなんで腕立てじゃなくて拳立てなんだよ。拳立ては骨に異常を起こすとかどっかの情報で耳にしたことがあるぞ!？」

「…ていうかいい加減拳立て飽きたんだよ。もっと他の鍛錬法とかねーのかー!!!!!!」

銃闘技をマスターするために拳立てをされていてあまりの地味さに発狂しかけている主人公こと武…だからと言って拳立てをやめない所は素直というか真面目と言うか……まあただやる事が他に無いだけだからがもっとも有力である。

魔法の修行

「プラクテ ビギ・ナル”火よ灯れ”！！……………って火ともんねー
ー！！！」

「ああ…いい加減灯りやがれ！！！」

ポオオオオオオオオ……

「ケホツ……………うん。まあ魔法って危険だな。いい加減にやつちやこ
つちの身が持たない。慎重にやっつていこう。……………じゃないとこれは
軽く死ねる」

初級の魔法も出来なくてイライラしていた所。魔力が暴発してしま
い漫画でよくある真っ黒になった武。これを気に慎重に魔法を使う
事になる。
ちなみにこの時初めて漫画のおなじみの展開ができてちょっと感動
してしまったのは仕方がないと思う。

初実戦

「なんだ…初めてだから大変だと思ったけどそつでもないかな。ま、
こんな感じならよーだね。」

ポタ…ポタ…

「ん？雨か？なら今日はこれくらいにして……………は？」

「いや…あのね。確かによーとかいって調子のつたのはいけない

と思うよ？でもさ…なんでここで竜がでてくるのかなあ。……しかも俺の事なんかロックオンしてない？いやいや…あれですよ。俺なんか食つても美味しくないし、第一貴方の大きさじゃ俺を食つても腹膨れないでしょ？だから…その………逃がしてくれませんか？」

グオオオオオオン

「ヤツパムリデスカー…タスケテクレー」

調子に乗って森奥に進んでしまい。竜とエンカウト必死に逃げて何とか逃げ切れたのは良かったけど、それ以降何故かエンカウトしやすくなってしまった。

ある意味主人公の宿命。ちなみにそれ以降しばらく森に入れなかったのは仕方がないと思う。

そして武がネギまの世界に来てから3ヶ月がたった……

「ふう…。いろいろあった3ヶ月とうとう原作へ介入か……思い起こせば………うん。つらかった思い出しかないな。強くなるために籠りつきりだったからなあ…あまりに人と喋らないから幻獣に話しかけてしまった時は……今考えると末期だったんだろっな。」

目を細めてそう呟く。

何故か涙がこぼれ落ちているのはこの際気にはいけない事なんだろうと思う。

「まあいいか…そのおかげで幻獣と実はお話ができる事がわかった

し、ほとんどストーカーみたいに俺を追い回した竜は恋人に振られてやけになってただけらしいし……ってあれ？俺って一歩間違えれば竜の奥さん貰ってたわけ？………考えるのはやめよう。涙がまたあふれそうだよ。」

必死になって考える事をやめ、涙を堪えていると自分のすぐ下から声がかかる。

「どうしたん？タケヤんそろそろ向かわんと今日までに町につけへんで？」

その声をかけてきたのは幻獣達が住む森で仲良くなった一匹の虎。変な関西弁と人懐っこい正確から龍牙（りょうが）と名前をつけた。愛称は龍ちゃん。

出会いは最初話しかけてしまったのがこの龍ちゃん、話している中で妙に馬が合いそれから一緒に行動を共にしている。話を聞くと幻獣の中には人に化けれるモノもいるらしいのだが、それには歳を重ねないといけないらしく龍ちゃんには無理とのこと。だけど体自体は小さくなったりするのは可能なので前に一緒に町に行った時はぬいぐるみサイズになって肩に乗っていた。

ちなみに戦闘能力はかなり高く、それなりに強そうな魔法使いや、幻獣なんかは軽々倒してしまう。ケンカの勝敗は50勝49敗と勝ち越しているが、お互いに本気でやりあうとかなりやばい事になるため最初の一回以降やってはいない。

「いやな。ちょっとこれからのことを考えてただけだよ。」

「ふん。でもタケヤん。そんなちょっとかつこい事言ってみても二枚目にはなれへんで？」

「なっ…!!おいおい龍ちゃん…俺はどうみても…」

「三枚目やで」

「ムカツ!!てめっ!!今日こそその減らず口閉じさせてやる!!」

「やれるもんならやってみいや〜!!!!」

しばらくケンカしておりますのでしばらくお待ちください

「はあ…はあ…龍ちゃん。なんかもうどうでもよくなったからそろそろ行こうか？」

「せやな。暗くなる前にいこか」

ぼろぼろの体を引きずりながら町へと向かう一人と一匹。

これからもつと大変な事が起こるといふのにこんな調子で果たして大丈夫なのだろうか？

とにかく話は進みとうとう原作介入へ…

筋肉バカ登場まで後もう少し

く我拳は銃なりてく第一話・終

第一話・親友との出会い。原作介入まであと少し!!!(後書き)

今日はこの後設定を投稿して終わります。

主人公・オリキャラ紹介

オリジナル主人公

名前：伊達 武（だてたける）

年齢：14（世界大戦時）

血液型：A B

身長：178

体重：80

見た目：G O D A G U N にでてくる大蛇龍牙そのまま。ただし頬に傷は無い。

髪の毛は短髪茶色。

服装は剛打銃の服装に良く似ている。ちなみにジャケットの後ろには”狼”の文字が入っ

ていない。戦闘時は皮の手袋を装着する。（皮の手袋にはリボルバーがついておりこ

れが魔法媒体でもある）

性格：戦争嫌い。二枚目になりきれない三枚目原作で戦争を長引かせていた「完全なる世界」が嫌い。

ただ覚悟をもって行動にあたる人は嫌いじゃなく、逆を言えば力によって起こりうることから目をそむけている人は「完全なる世界」より嫌い。（簡単に言えば一般的な”立派な魔法使い”とか原作のネギなどが特に嫌い）

普段は温和で人当たりも悪くない。後、主人公にはデフォオである鈍感な人は装備されていない。

きっかけ：二次創作を読んでいる途中で、寝てしまい。そのまま帰らぬ人になった所を、神が漫画の世界に転生する資格を得たとかいって転生させる。（確率的にかなり低いけど、どうやらそれに当たったらしい）ちなみに死因は病死。

知識：ネギまの世界のことはほとんど覚えている事といえどキャラの名前と何が起こるかぐらい（時期ははっきりしてなくて確かこんな事が起こるよな〜と言う感じ）

スペック

魔力：最終的にナギ程度になる（初期はアルより少し下ぐらい）

気：最終的にラカンにギリギリ届かないくらい（初期はガトウより少し下ぐらい）

魔力と気はほぼ同じであり、どれだけ鍛えてもこの比率は変わらない。
限界あり。

魔法で得意なのは火・水・風・闇。そのほかは普通。（使えて中級ぐらいまでだがうまく扱えないため魔力の消費量はかなり高くなってしまう。）

治癒力が高く、普通なら危険な状況でも一日たてば治ってしまう。
（真祖の再生能力に比べればたいしたことはないが、それでも普通の人から見たらありえない程）

神から貰ったモノ

闇の魔法：自分が思い描く魔法のために貰う。デメリットはなし。最初から闇の素養があり、さらに神 によって上乘せされた力によって、この魔法をつくったエヴァはもちろん。ネギよりも還元率がよく、また消費する魔力も少ない。基本的にはこつちを使う。

感卦法：ご存知の通りそのまんま。ただ闇の魔法も使えるためこつちを使う頻度は少ない。自分が思い描く魔法のために貰った。

武の才能：銃闘技を扱うためにもらった。ほかの漫画の世界の格闘技や剣術などを実際に行う事が出来る。他にも剣術 拳術など才を駆使して新たな技を作り出すことが出来る。

魔法の才能：オリジナルの魔法を作るために貰った。原則としてネギまの世界の魔法しか使用できないため、ゲームの魔法を作ろうとしてもそれに似た魔法になる。ちなみに才能と適正はまったくの別物であり、いくら才能が有っても適正に見合った魔法しか使用できない。ただし、アイディアやアドバイスは出来る。

錬金術：魔導具をつくるために貰った。実際にはもつといるんなことが出来るはずなのだが本人はあまり使う気がない。

解呪：エヴァを人に戻したいという理由から貰った能力。名前は勝手に決めた。エヴァを人に戻す事が出来るだけでなく。そのほかの状態異常、呪い、結界まで何でも解呪できる力。代償として魔力をかなり使うことになる。発動は相手に触れて意識を集中させる事。それにより頭の中に鍵みたいなのが現れそれをあけることによつ

て解呪完了となる。

戦闘方法

俗に言う魔法拳士といった所。使用する技などは漫画から引用したもののやオリジナルである。

技

銃闘技：強いあこがれと武の才能により再現した某漫画の技。これをベースに同じ他の漫画の技も改良して銃闘技に組み込もうと今考
え中。

オリジナル

”然”：名は神がなずけた。これはネギの太陰道をヒントにつくられた技法。闇の魔法と同じく体が魔法と同化し、さらに感卦法と同じく気と魔法を融合させ莫大な力を使う事が出来る。
ネギの太陰導では相手の力を自分の力に変えることが出来るが、自分の気は反発してしまい使用が難しかったため使う事ができなかった。それを改良し、自分の気のみも闇の魔法を使用している状態で使えるようにしている。

主な効果

すべての値が限界を超える：魔力はエヴァより上に、気はラカンの数倍になる。

すべての属性の上位魔法が使用可能になる。

気の力により身体能力がかなり上がる。（イメージとして、ネギが太陰道を使いラカンの力を自分の力にしたような感じ）実際はそれよりも上。

相手の力を自分の力に変える
膨大な力のおかげで自分の分身を作り出すことができる。（分身の力は自分で変えられる）
相手の魔法・気による攻撃をすべて無効化することが出来るので、この技法を使用している状態ではまず死なない。

デメリット

無制限に使用する事は出来ず、発動時間は30分。
使用後は3時間は気も魔法も一般の魔法使いレベルまで落ち込んでしまう。

次の日は必ずひどい筋肉痛になる。

オリキヤラ：1

名前：龍牙

性別：雄

種族：虎

幻獣であり武と話があつてから一緒に行動を共にする。変な関西弁を使ったまに武をからかってケンカしたりしているが、武のことを信頼し共に戦う。

体は本来一人乗れるくらいの大きさなのだが、町に出るときや知らない人間に会うときはぬいぐるみサイズに体を縮めている。

戦闘能力は高く。また幻獣の為魔法も使える。といっても詠唱とかするわけではなく炎を吐いたり体に纏う事によって直接攻撃をする。ちなみに纏う魔法の属性によって毛の色が変わる。

雷 黄色

氷 白
火 赤
風 緑
闇 黒

よく纏うのは雷と火。苦手なのは光だけらしい。（本人いわく光は自分のキャラじゃないらしい）
酒が好物で14歳なのに酒が好きな武と晩酌するのが何よりも幸福な時間らしい。

主人公・オリキャラ紹介（後書き）

今日はここまで次話も出来次第あげていきたいと思います。
それではまた逢いましょう。

第二話：仕事の依頼？ラカン登場！！（前書き）

昨日に続いて連続の投稿ができました。

そして昨日上げたばかりだということにもう評価してくださる人がいるとは…

ありがとうございます！！！！

もっと皆さんに楽しんでもらえるよう精一杯書いていきたいと思えます。

それでは第二話始まりです！！

第二話：仕事の依頼？ラカン登場！！

神が残してくれた手紙の通り3ヶ月たった後、武とその相棒である龍牙は目的の町へと着いた。

そして二人はまずラカンの情報を得るために酒場へと向かうのであった。

（武side）

酒場について適当にお酒を頼むと俺達は人から少し離れたテーブルに座りお酒を飲んでいた。

ちなみに龍ちゃんは今ぬいぐるみサイズになっているため、テーブルの上に座りお酒をなめている。それがちょっとかわいくみえてしまったのは内緒にしてほしい。

しばらくたつと周りを警戒しながら龍ちゃんが話しかけてきた。

「なあなあタケやん。ここにその…ヤカン？やっけそいつがくるんか？」

「ラカンな。…まあ予定ではそうなってるっばいんだけど…実際はわからん。」

「そうそうラカンな。…でもわからんとか。いい加減やな。大体なんでそいつにあわなあかんのや？」

「…龍ちゃん。最近帝国と連合が戦争してるのは知ってるよね？」

「まあそれぐらいはな。いくら幻獣のワイでもしつとるで。何時の時代も人間っちゅうもんは争うのが好きな種族やの。いい加減あきへんのかな？」

「耳に痛い話だけど、それは無理だと思うよ。…それでね。ちょっと事情があつてその戦争を起こしている奴を叩き潰さないといけないんだよ。んでそのラカンっていう奴と一緒に行動していけばじきにそいつにぶつかる可能性が高い。だからラカンにあわないといけないのさ」

「ふうん。正直な話いろいろ納得できへんけど…まあタケヤんがやらなあかん事やったらワイはそれを手伝うだけや。」

「すまん。龍ちゃん」

「ええて。…ただ何時でもええ、タケヤんが秘めとるもん教えてな。一人で抱えてもええことなんてたぶん無いで？」

「ありがと…でも虎に慰められるなんて…人としてどうなんだろ。」

「虎は虎でもタケヤんよりよっぽど歳をとつとる幻獣じゃ…！大体ここでそんな発言がますから二枚目やのうて三枚目やっていうんやで…！」

「んなつ…！今ここでそんな話する必要ないだろうが…！」

「なんやまたやるんか！？さっきので懲りたとおもつとつたんやけどな。」

「フフフ…人の恐ろしさその身におしえこんだるわ…！！！！！」

ただいまぬいぐるみサイズの虎と本気ケンカ中

しばらくケンカをしていると、その光景を遠巻きにみていた一人の男性がこちらに向かっていきいているのが見えた。龍ちゃんもそれに気付いているようだったが、下手に行動しても怪しまれると思い龍ちゃんと目配せをしてケンカを続けていた。

するとまるでケンカの仲裁をするかのようにその男性が話しかけてきた。

「もし…ちょっとよろしいか？」

「なんや！！ワイらは今取り込み中じゃ後にせんかい！！」

「あほか！！…すいません。このアホ虎が失礼な事を」

「いえ、かまいませんよ。それよりも貴方とその使い魔なかなかのウデとお見受けしました。」

「ほほう…。おっちゃんなかなかええ目もつとるやないか。」

「お…おちゃ…ん。まあそれでなんですが少し仕事を頼まれてもられないでしょうか？」

「仕事？いきなりですね。それも自分で言つのもなんです身元もさだかでない人ですよ？」

「それは別にかまいません。少しでも仕事成功するようにいろんな人に声をかけておりますので…もし仕事を請けてもらえるなら今日の夜中町の中央にある酒場まで来てくれませんか？仕事が成功したあかつきにはかなりの金額の謝礼を約束します。それでは」

用件だけ伝えるとその男性はこの酒場から出て行った。

その男性が言った言葉が気になり、俺たちはケンカをやめて最初と同じように座り、何事も無かったかのようにまた酒を飲み始める。ケンカしたおかげで酒場のマスターから凄く睨まれてしまい、迷惑料として少し多めにお酒を注文したのは当然の配慮だと思う。

「にしても仕事ね…。なんつうかこうフラグがピンピン感じるんだけど。」

「つまりあの男についてけばタケヤンがいつとった、ラカンっちゆう奴にあえるってことか？」

「確証はないけどね。」

「まあ…そういう感的なものは大体あつとるやろうな。」

「…というところ？」

「ワイは人より鼻が利くから分かるんやけど、血の匂いがしたわ。少なくともまともな依頼やらへん。それにタケヤンが言ってたラカンは傭兵なんやろ？なら戦いと血の匂いがする場所におるんやないか？」

「龍やん何今更頭良いみたいなキャラつくってんだよ」

「これが普通や！…まったく。たまに真面目に話したらこれかい」

「すまん、すまん。おもわず…」

「まあええわ。もうケンカする気なくなっただし、それにマスターが怖いからな」

「……それについては同感」

そう小声で話しマスターを見る。

多めに注文したおかげか、先ほどよりは視線に殺気がこもっていなかったが、それでもチラチラこちらを見て様子を伺っている。

多分もう一度ケンカをすればそれこそこの酒場からは追い出されてしまうだろう……それも修理費込みで……

そんな未来を想像してしまい二人して体を震わせると、龍やんが何かを思い出したように話す。

「ああ……それとやなああの男亜人やったで？それも血の匂いのほかにもいんな匂いがしたからな結構いい所の出やないかな。おそらくは……」

「……帝国だろ？」

「なんやタケヤんも気づいとったんかい」

「まあ亜人ってことくらいはね。それに龍ちゃんが言った匂いから考えてそう思ったただだよ。」

「ふーんそか。……それでどうするん？」

「もちろん行くよ。ラカンに逢うためにもね」

「そやるな。……じゃ、まだ時間もあるし」

「ああ…とりあえずは頼んだお酒全部飲み干そうか。」

そう言っただけで俺達は多めに頼む事になったお酒の片付けに入るのだった。

もちろんこれからの事についても相談はしていたのだが…最後の方はお酒によつてしまえばろくろくになって何を話していたか忘れてしまった。

お酒は適量にしないといけない。

この言葉が俺達の心に深く刻まれた日になった。

.....

しばらくして、約束の時間になった俺と龍ちゃんはあの男が言っていたように中央へ向かいその酒場を探した。

というよりも中央についたらすぐ目立つ所に酒場があり、しかも先ほど声をかけた男が入り口に立っていたのでたいした苦労もせず目的の場所へついた。

「おお…。お待ちしておりました。きっと貴方様方なら着てくださいると思っていました。」

「まあ俺達もお金欲しいからね。お金は大事だよ」

「それは結構。それではご案内します…他の皆様はもうこちらにいますので…」

そう言っただけで店の中に入っていくと、そこにはあきらかに普通の客じ

やない人達であふれていた。

「ふん。確かにいろいろあつまっとるなあ。でも皆なんか弱そうやで？」

「こら龍ちゃん。そんなほんとの……げふん。そんな失礼な事言ったらいかんだろうが。」

「だってやな〜タケヤン」

そんな事を小声で話していると後ろから声がかかった。

「その虎の言う通りだな。こんな足手まとい達と一緒に仕事なんてしたくねーぜ。」

『は!?!』

「兄ちゃんもそう思ってたんだろ？」

そう言っただけで会話に入ってきたのは……俺が探していた人物。

「千の刃」「死なない男」「伝説の傭兵剣士」といわれる事となるジャック・ラカンその人だった。

「それよりも兄ちゃん。俺様といっちょ戦ってみないかい？」

俺達が驚いていると、それをまるで無視するかのように話を進めるラカン。

しかもはたから見たら笑っているのに、目が笑ってない。それどころか俺達にぶつけてくるかのように闘気をだしてきた。

「いやいや。俺なんてあんたには敵わないし、弱いからやめてお
よ。」

「H A H A H A！下手な謙遜はよくねーぜ？弱い？よくそんな事が
言えるな。俺様の闘気を難なく受け止めていやがるくせによ。」

「これぐらいなら誰でもできるだろ？」

「誰でもねえ…ならお前の後ろの連中はどう説明するんだ？」

そうラカンが指摘し、俺も後ろを振り返って見るとさっきまで騒い
でいた連中全員が机に突っ伏して眠っていた。仕事を依頼してきた
男も同様だった。

するとラカンが依頼人の男に近づいて何かを確かめる

「あゝこりやダメだな。明日の昼ぐらいまではおきねーわ（笑）っ
てことは…だ。これからは暇になったってことだろ？」

そう言ってこちらに向かって笑いかけてくる。

というか、絶対にわざとだろ。そうなんだからラカン！！

「はあ…強引だな。そんなに戦いたいのか？」（まあここでなんや
かんや言っても戦うのは決まってるんだろうけどね…にしても展開
が強引しすぎるけど…）

「おほっ！やる気になってくれたのか？いいねえ。俺様は戦いが
いのある奴と戦うのが大好きなんだよ。」

「でも一つだけ聞かせてくれ。何で俺なんだ？」

「そりゃ俺様がすげーからだよ。」

「は？」

「俺様ぐらいつえー奴になるとな、そいつがいくら隠していようと
その強さが大体分かっちゃうもんなだよ。兄ちゃんの肩に乗って
いる虎もかなりつえーだろうがな、それよりも気になるのはお前だ。
まだ大して歳いってねーくせにその身からにじみ出ているのは、ま
るで何年も修行したかのような力そしてさっき威嚇のつもりで闘気
をだしたっていつのにそれをまるで何も無かったかのように受け止
める胆力。気になるなって言う方がおかしいと思うぜ？」

「なるほど」（あれ？なんかイメージと違うな。ラカンってもっと
バカっぽくなかったけ？）

「ま、それでも俺様の方がつえーけどな。 H A H A H A H A …」

「そうですか」（あ…いや、やっぱりバカだわ）

「なーなータケやんが戦わんのやったらワイがやってもええで？」

「お！？それも面白そうだな。」

「龍やんお前いつの間にそんなバトルマニアみたいなことを…」

「いやいや…そんなわけないやん。でもな？こんな正面きつて戦え
なんて言ってる奴そうはおらへん。なら正々堂々戦ってみるのも
ええんとちがうんか？」

「龍やん……一人で男振り上げてるようだけどそれは許さんぞ？」

「だ・か・ら・！なんでタケやんはこういう所でそんな発言がでるねん！ワザとか？ワザとなんやな！？それともワイにケンカうつとんのかい！！」

「いやそんなつもりはねーけどさ…なんか気になって。」

「だからタケやんは三枚目やいうんや。ほんまこのバカは…」

「なんだって！？バカとかいうな！！そっちこそケンカうつてんだろ！？？」

「なんや、このにーちゃんとやる前にのしたつてもええんやで？」

「上等だコラ！やってやんよ。」

おたがいにガンを飛ばしあつてるとつけていると、ラカン笑い声がまた響く。

「H A H A H A！本当にお前らおもしろいな。ただケンカするなら俺様もまぜろや。」

「じゃ町の外に出ようか。そこで決着つけてやる。」

「望む所や！！土下座してごめんなさいっていわしたる！」

「どこでもいいぜ？どうせ俺様が勝つんだからよ」

そうお互い言い合って町の外へと向かっていくのであった。

ちなみに酒場で突っ伏していた人達は、俺達のケンカが終わるまでずっとそのまんまだったらしい。
後から聞いてちよっと申し訳なくなってしまうた。
まあ龍ちゃんとラカンは笑ってたけど…

く我拳は

銃なりてく第二話・終

第二話：仕事の依頼？ラカン登場！！（後書き）

今日はもしかしたら後もう一話更新できるかもです。

感想なんかございましたらもらえるとうれしいです。

ラカンのキャラこんな感じで多分あってると思うけど…どうなんだろう？

第三話：男達の語らい（前書き）

はい。と言うことで何とか今日中にUPできました。

今回は戦闘シーンもあってか長めとなっております。

自分が思っ限り精一杯戦闘シーン書いてみたのでうまく皆さんが想像できれば嬉しいです。

それでは第三話どうぞー！！

第三話：男達の語らい

（ラカン side）

俺様の名前はジャック・ラカン無敵の傭兵だ。

最近俺様が強くなりすぎちゃまったせいか戦えるやつがいなくて暇してた頃に、男から声が掛かった。昔っからいろんな仕事をしてきたせいかこの仕事のやばさがすぐ分かった。

だけど、それこそ俺様が求めていたことじゃねーか。

つえー奴と戦える。そしていっぱい謝礼がもらえる。

まさに良いこと尽くめだぜ。だからこうして言われた場所に足を運んでみたんだが：正直落胆した。仕事のやばさから言っただけでも確率を上げるために人を集めるのは分かる。だがこいつらじゃいみがねえ：多分俺様の邪魔までしてくるだろう。

そう思うとこの仕事を受ける気がなくなっていた。

「…帰るか」

そう思い席を立った所で俺様は思わず立ち止まってしまった。

依頼人の人につれられてやってきたのはガキと小さい虎。

だが実際はそうじゃねえ：俺様だから分かるんだろうが、なんて力もってやがる。

一目みただけで分かる。あの存在感。しかも肩に乗ってる虎まで強そうじゃねえか：。

クククツ：さすが俺様ついてるな。こんな大物引けるなんてよ。

あーもう我慢できねえ。戦いてえ：

そう思っていたらいつの間にか体が動いてそいつに喋りかけていた。

さて、どうやって俺様と戦うように仕向けようか…。
久しぶりにマジケンカできるかもしれねーな。
とにかく楽しみだぜ

〔ラカン side 終〕

〔武 side〕

予定通りにラカンと出会い、なんかいつの間にかケンカすることになった俺達は町の外に出ていた。
そして町からずいぶん離れた所につくと、龍ちゃんが俺の肩から降りる。

そして元の姿に戻っていた。

「お？お前さん幻獣だったのか？通りで…小さい虎のくせに存在感がハンパじゃねーわけだぜ。」

「まあな。普通ならワイのこの姿を見せるんは人ではタケヤンだけで、それ以外見せる気なかつたんやけど、にーちゃんならええかとおもつてな。」

「ははは！そう言ってくれるのはうれしいぜ。俺様の名前はジャック・ラカンって言うんだ。ジャックでもラカンでも好きに呼んでくれ。」

「わかったでラカン。ワイの名前は龍牙やそっちも好きによんでええで？」（なるほどコイツがタケヤンが言ってたラカンか…たしかにコイツと行動してけば目的を果たせるかもしれへんな。）

「さて。ケンカするんだろ？どうすんだ？俺様は二人がやりあった

後でもかまわねーよ？」

「いや、それにはおよばねーさ。さっきは龍ちゃんとケンカごしになっちまったけど俺達はいつでもできる。それに……せっかくの客をもてなさない訳にはいかねーだろ？」

「そやな。……タケヤン今さらキャラ変えてもしよせんは三枚目やあきらめ」

「おまつ……いいかげんにしろよ？少しは俺にも決めさせろって。」

「H A H A H A……本当にお前ら仲いいな。」

「まあな。」

「たぶんほめられてへんで？」

「……まあいいやともかくケンカしようか？」

そう言うと俺は気持ちを戦闘状態に持っていく。

殺し合いとかは正直好きになれないけどケンカなら別。

俺も龍ちゃんとケンカしてるうちにいつの間にかバトルマニア見たくなっちまったな。

「お！なるほどそれがお前の本性か。いいねえ……さすが俺様だ。目に狂いはねえな。だけどいいのか？二人してかかってきてもいいんだぜ？」

「はっ！それはねえよ。相手が一人っていうならこっちも一人でやるのが普通だろうが。ケンカっていうのは対等な立場にあって始め

て同じ土俵にたてるんだからな。それに……ケンカはタイマンが一番おもしろい!!」

「ま、そういうことや。心配せんでもワイも後で戦うで。」

「いつてくれるじゃねえか。俺様ほどじゃなくても兄ちゃんかっこいいぜ?もう一度言っぜ俺の名前はジャック・ラカン兄ちゃん名前おしえてくれねえか?」

「ふっ俺の名前は伊達武。こっちの言い方ならタケル・ダテって所か」

「ハッ!タケルか…じゃそろそろ始めるかタケル!!」

「おう。戦闘開始だ!!」
オブンコンバット

〈武side終〉

〈全体視点〉

最初に仕掛けたのは武だった。

まるで狙撃するかのような姿勢をしてラカンに標準をあわせ、拳を打ち出して行く

「うお!何だこれ。拳が飛んできやがった。気弾ってやつか?」

「似てるけど違うよ。」

これは銃闘技の遠距離姿勢、そこから撃ち出されるのは通称ガンブレットという技である。

血液を用いた技で簡単に言うなら気を使っていない気弾である。

「だけどこんな攻撃へでもねえぜ!!!」

そう言ってラカンは武から打ち出させるガンブレットと次々と討ち落としていく。

「そんなもん。最初から分かってるよ。」

そう言ってまた姿勢を変えると今度は前傾姿勢となりラカンに向かって飛び込んでいく。

銃闘技『アサルトポジション突撃戦闘型』そこから繰り出されるのは、ガン・ダイブア

！。
強く踏み切り相手に向かって突進を仕掛け、そのまま攻撃する技である。

この技はこのまま攻撃してもいいし、相手の距離を詰めたり接近戦に持ち込んだり、追撃をしかけたり、といろいろ用途があり攻撃をつなげる大切な技でもある。

「お！いいねえこっちに突っ込んでくるか。いいぜ派手な肉弾戦といこうじゃねえか」

武がこっちに突っ込んでくるのを見るとラカンも同じように突っ込む。そしてお互いに拳を振り上げて相手の顔面に殴りかかる。

ドカアッ!!!

「いってーラカンわざわざ顔狙うなよ。あとで飯食う時困るんだからよ。」

「へっタケルも同じだろうが！おらどんどん行くぜえええ」

そう言つてラカンは武に向かつて連打を浴びせてくる。

「オラオラオラオラ！！！！どうしたまさかインファイトできないわけじゃないんだろ？」

「なめんな！！」

少し被弾しながらも、かわしタケルは姿勢を変える。

その姿はまるで西部劇に出てきそうなガンマンの構え。

それこそが銃闘技の接近姿勢…通称”迎撃防御射撃”そこから打ち出されるのはまるでマシンガンのような拳の嵐だった。

「はははっ！！まさか俺とインファイトでやりあえるなんてな。何時振りだよ。」

「何言つてやがるまだまだこれからだぜ！！」

武はそう言つと連打のスピードを更に上げる

「ちよ。まて！！へブブブブツ…」

想像以上の連打にさすがのラカンもたえきれず連打をもろに受けつけてしまう。

しかもそれでも止まない拳の嵐に、かなりの巨体であるラカンの体がしだいに宙に浮かんでいく。

そのチャンスを逃す武ではなく、その隙に右腕をまるで撃鉄をおこすかのような感じで振り上げる。

すると振り上げた右腕の色がどんどん変わっていき鉛色になってい

く。

「げ！それはちょっとやばくね？」

その右腕の脅威を感じたのか、すこしあせった感じでそう呟くラカンをよそに武はその拳をラカンに向かって放った。

「くらえ！44マグナム！！」

ドコオオオン

その拳を受けたラカンは遠くへ弾き飛ばされた。

そして放った武の右腕は白煙が立ち上りまるで拳銃を撃った後をイメージさせるのであった。

これこそが銃闘技の奥義であり、代表的な技『絶対破壊44マグナム』である。
アブシヨリユートブレイク

腕を振り上げ（ハンマーコック）、血液を止めて力をためる。するとその腕は鉛色に変色し、筋肉がスプリングのように収縮する。そしてそれを解放した時、心臓から送られる爆発的な血液によって筋組織を一瞬にして活性化させる。その時に起こる爆発『血液爆発』
ブラットバースのエネルギーを使い攻撃する。

これが『44マグナム』のメカニズムなのだ。ちなみに先ほど使ったガンブレットやガン・ダイヴァーもその副産物である。

すなわち銃闘技とは、血液の力をかりた圧倒的なスピードと攻撃力を持つ武術なのである。

これは余談だが、武はこの『44マグナム』が好きで神に銃闘技を

覚えたいといったのである。

「あれ？綺麗に決まっちゃった。あゝこれで終りか？」

右腕から立ち上る白煙を腕を振りながらけしてそう喋る武。

武の言葉に龍牙が答える。

「タケやんのマグナムまともに食らったらワイでも沈むで？人やつたらあたりまえちゃうんか？」

「いや…そんなはずねえだろ。龍ちゃんだって分かってるだろ？ラカンは俺達よりも強い。そんな奴が何もせずまともに食らったんだ。なんかあるだろ」

二人がそう喋っていると、いきなり体中に今まで感じた事の無い殺気がぶつけられる。

すぐさま殺気が発せられている方をみるとそこには倒れたラカンがいた。

「クククツ…アーハツハハハ…」

狂ったように笑い出すラカン。そしてゆっくりと体を起こしてこちらを睨みつけてくる。

その目は先ほどまでの楽しそうな目ではなく、まるで獲物を見つけたような猛獣の目をしていた。

「いいぜ。武…まさかこの俺様が本当に本気でやれるなんて…誇つていいぞ。」

「……………うわゝやべーなんか変なもんおこしちゃまったかも…。」

「ていうかマグナムまともにくらうて立つなんてホントに人か？」

ラカンから感じる先ほどとは比べ物にならない威圧感に思わず冷や汗が出る武。

そしてマグナムをまともにくらうて立ち上がった事に驚いている龍牙。

確かに自分達より実力が上なのは知っていた。しかしそれでもこうしてまともに攻撃をくらうて何事も無く立ち上がるラカンに二人は恐怖すら感じていた。

「いやー確かにタケルの最後の一撃…マグナムだっけか。かなり効いたぜ。珍しいよな衝撃が突き抜けるなんて。こんな風に体に突き抜けた後まで残る。…なるほどこれは初体験だぜ。」

そう言っつて自分の体から煙が出ているのを見て嬉しそうに笑う。

「だがな俺様も無敵と言われている男だ。これぐらいじゃ倒れねえよ。それに…喜びの方が勝つて倒れる気なんてまるでおきねえよ。」

「喜び？」

「ああ。俺様がマジで本気出しちまうと、すぐ相手をつぶしちまうからな。それじゃ面白くねえんだよ。だけど…タケルここからはマジだぜ？気も全開でやってやる。だからオメーも全力だぜ。それこそ俺を殺す気でな！！」

そう言っつて力を込めるラカン。そこから感じられる威圧感、そして気の強さはさすがバクキャラと呼ばれる男。そこにいるだけで心が折れそうだった。

「……………気付いていたのか？」

「つたりめーだ。さっき気弾っぽいのだったって気弾じゃないって言うてただろ？なら純粹な体術で戦ってたって言う事だ。だがタケルから感じた力はそんなもんじゃねえ！！オラだせよ。じゃないとすぐおわっちまうぜ？」

「分かったよ。」

そう言うと、さっきよりも鋭い目でラカンを睨みつける武。

それを見ていた龍牙は巻き込まれるのを恐れその場から更に外れる。

「プライムファイヤード
闘火薬点火」

「プライムファイヤード？なんだそれは？」

「…俺の心の火薬に火がついたって事さ。後はもう爆発するしかねーんだよ。」

そう武が言うと、先ほどまで感じられなかった魔力が武から漏れ出し突風を巻き起こす。

それを見てラカンは更に獰猛な笑みを浮かべる。

「はーはっははは…。なるほどそれは言いえて妙だな。俺様も火つちまってるからな。同じように爆発するしかねえ…いいぜ見せてみるよ。タケルの本気ってやつをよ！！！！」

そう叫ぶとタケルに向かって突進してくるラカン。

それを見てタケルも本気を出すために呪文を唱える。

「オン・フィスト・ガン・ペンスリット
” 契約に従い我に従え炎の霸王” 来れ浄化の炎” 燃え盛る大剣”
” ほとばしれよ” ソドムを焼きし火と硫黄” 罪ありし物を死の塵に”
” 燃える天空” ！！” 固定” ” 掌握” ” 術式兵装” …… ” 炎帝”
！！」

呪文を唱え終わると武の周りを炎が包みこむ。
それを見てラカンが距離をとるためにバックステップをした。

「おいおい…。闇の魔法かよ。まさかそんなもん使えるなんて、さすがの俺様でも夢にも思わなかったぜ。しかもこの威圧感さつきとダンチじゃねえか。ククク…面白くなってきたぜ。」

炎に包まれている武をみて思わずそう呟くラカン。
声とは裏腹に視線はずっと武からそらさない。
一度逸らしてしまえばこちらが負ける。そんな雰囲気か漂ってきたからだ。

しばらくすると、いきなり炎が割れて中から武が出てくる。
その姿はさつきとは別人だった。

茶色だった髪の毛は燃えるような赤。

目の色も赤
体のあちらこちらから炎が上がっており、武の周りは陽炎が出来ていた。

それだけでもかなりの熱量をもっていることが分かる。
まさにその姿は炎の霸王…” 炎帝” の名に相応しかった。

「ラカンこれが俺の本気だ。さあ燃やされる覚悟はできたか？」

「はっ言ってくれるじゃねえか。そっちこそ吹き飛ばされる覚悟は出来てんだろうな!？」

そう言い合つと二人はお互いに飛び出し…そして激突した。

そこからはもう誰も立ち入る事を許さない。まさに二人だけの世界であつた。

ラカンが気を込めた拳を繰り出せば、地面が大きくへこみ

武が拳を撃ち出せば地面が真っ黒に染まる。

二人が同時に拳を繰り出せばその衝撃波で地面が割れた。

そんな光景がずっと続く。

その光景の中心にいるのが武とラカン。

二人とも獰猛な笑みをうかべているのだが、それは何処か楽しそう
で、子供が新しいおもちゃを貰った時のように無邪気な笑みに何処
か似ていた。

もしかしたら二人はこの時間が何時までも続いて欲しいと思ってい
るのかもしれない。

だがその願いは叶うことは無いだろう。
なぜなら始まりが有れば終りがある。

そしてとうとうこのケンカにも終りが訪れるのであつた。

「はあはあはあ…ぺっ…へへまったくたのしいぜ。」

口に溜まった血を吐き笑みを浮かべるラカン。

「ゴホ…ゴホ…俺はいい加減疲れたんだけど」

咳き込んで血を吐きながら答える武

「けっ。そう言う割には楽しそうな顔してんじゃねーか。もっと素直に生きよっぜ?」

「素直だから嫌だっっていつてんだよ!!」

「つねえな」

「いっつけ」

そう言っつて二人で笑い合う。

お互い軽口を言い合っつてはいるが、すでに限界を超えており立っつているのもやっつとの状況。

それでもこっつとして軽口を言い合えるのは負けたくないという強い意志が、それともただの強がりか…

そしてその時は訪れる。

「なあラカン」

「なんだよ」

「お互い限界も近いことだし、最後の大勝負をしないか?」

「いいなそれ…おもしれえ…もちろん乗るぜ。」

「決まりだな」

そう言うと二人は少し距離をとり、お互い右腕に残っている力を集める。

さっきまであれだけ騒がしかったのに、いつの間にか音は無くなり、静かな時間が訪れる。

二人ともじつとして動かず、その時を待っていた。

ズサツ

それはきつと龍牙が動いた音だろう。普段なら気にならないその音が二人にはとても大きく聞こえた。

そしてそれはこのケンカを終わらせる合図であった。

二人とも図ったように同じタイミングで動き出す。そして先ほどまでためていた力を拳に乗せて自身が出来る最高の攻撃を繰り出した。

「オラア！！ラカンインパクト！！！！」

「いけえええ！！ナパームキャノン！！」

ドゴオオオオオオン！！！！！！！！

二人が放った拳によって辺りにすさまじい熱風と、爆煙が広がる。

その音を聞いて勝負がついたと思い、龍牙は二人がいるであろう場所へと走る。

そしてその場に着いたとき龍牙が見たものは……………

倒れている武と何とか踏ん張りながら立っているラカンであった。

「えらい派手にやったなあ。二人とも生きとるか？」

「H A H A H A …あたりまえ…グハアアア…」

多分大笑いして余裕ぶりをアピールしようとしたんだろうが、下手に大声を出したせいで盛大に血を吐いて倒れこむラカン。息はあるので生きているだろう。

倒れている武の方といえ、体が動かないのだろう倒れたまま視線だけこちらを向けて答えた。

「はははっ…なんとかね。……………龍ちゃん」

「なんや？」

「……………やっぱり負けたよ。」

「そか」

そつ。そつけなく返す龍牙。だが心の中はまったく別であった。

力の差はあった。

しかも相手は傭兵。

戦闘経験ではどうあっても敵うわけがない。
つまり最初から負けることは分かっていた。
だけど…それでも……

タケヤんはきつと勝ちたかったのだろう。

そして負けたことがいつとくに悔しいのだろう。

ワイだって”よくやったやん”の一言ぐらいかけてやりたい。

でもそんな言葉かけた所で余計悲しくなるだけや。

だからこそ今ワイができる事はそばにいてやる事。

そしていじけてしもうたらケツひっぱたいて前に進まず事ぐらいや。

でも…

そんなもなあ…

これだけは心の中で言わせてくれんか？

”ほんまええ勝負やった。……お疲れさん”

こうしてラカンと武の勝負はラカンが勝者となり幕を下ろした。

武がネギまの世界に来て3ヶ月…

初めて本気で勝ちたいと思い

そして初めて負けて悔しいと思った日であった。

なりてゝ第三話・終

）我拳は銃

第三話：男達の語り（後書き）

オリジナル技解説

始動キー『オン・フイスト・ガン・ペンスリット』

銃闘技と関係ありそうなものを探してくっつけてつくりました。

”ペンスリット”とは火薬の一種で、プラスチック爆弾の材料です。

”オン”についてはなんとなく音の響きが良かったからつけました。なんとなくそれっぽく聞こえると思います。

『炎帝』

”燃える天空”を闇の魔法で取り込んでみたら名前はやっぱりこれだと思えます。

いちお炎系最強呪文らしいので武が今できる最強の呪文ではないでしょうか？

ちなみに攻撃力特化設定です。

やっぱ火といえば攻撃力でしょう！！

『ナパームキャノン』

”炎帝”状態で”44マグナム”を撃つ時の技名となります。

敵に当たった場合、衝撃が貫通するのはもちろん、炎をまとっての攻撃なので相手を火達磨にする技です。ラカンはこれに打ち勝つ事が出来ましたが、普通の人ではまず打ち勝てないと思っていいだけばいいです。

ただし、ある人物だけにはこれを通つ向から斬る事が出来ます。名前の由来はそのまんまナパーム弾からとっています。

またある程度まとまったら設定に書いていきたいと思えます。それではまた次の話でお会いしましょう。

第四話：帰ってきた依頼人（前書き）

お疲れ様です。

今回は依頼人が再登場します。…っていつか登場しないと話が進み
ませんので…

では第四話どうぞ！

第四話：帰ってきた依頼人

（武side）

ラカンとの勝負から一夜明けて、俺と龍ちゃんはとりあえずおなか
がすいたので近くの定食屋へ行き、少し遅めの朝ご飯を食べていた。
……なぜか昨日殺し合いまで発展したラカンと一緒に。

「……なんでラカンと一緒に飯食べてんだろ。」

「ワイもそう思うわ。しかもさも当然のようにいるから今の今まで
気付かんかったけどな。」

そう言つて二人でため息をつく

「がっははは。気にするなよ。」

「いや…俺たちじゃなくてお前が少しは気にしろよ。」

ラカンの言葉に更に深いため息をつくのであった。

「いや実際な話だな。俺様はタケルたちのことかなり気に入ってん
だよ。それに…勝負はまだついてねえからな。」

「は？勝負は俺の負けでついたらだろ？」

「負け…負けねえ…。ありゃーどっちかつつと引き分けだ。」

「引き分け？」

「ああ。確かにあの時最後までたっていたのは俺様だがな。それはタケルの技のおかげでもあるんだよ。あの時は地面に叩きつけるように殴ったが、逆にタケルは掬い上げるように拳を放った。しかもタケルの拳は衝撃が貫通するからな。だから立ってたというよりも立たされていた。の方が正確なんだよ。…ま、これでも納得できねーなら。勝ちを貰っておいでやるよ。」

そう話していたラカンの顔はとても真剣で、俺が知識として知っていたラカンとはまるで別人のような感じがした。いつもこんな感じだったらバカとか言われないうららうな…

「そうしておいてくれ。負けるのは悔しいが、おかげで自分の未熟さが分かったしな。」

「俺様ももつと強くなるために新必殺技を開発しないと。H A H A H A ! ! !」

「なんやワイだけ取り残された感じじゃ…。さみしい…さみしいで…ほんま。」

「……龍ちゃん」

「……タケちゃん」

「龍ちゃんは幻獣なんだから取り残される以前の問題だよ？」

「（ブチッ）…お…己は…ええ加減にせいよほんま！…ちよと感動しかけたワイの気持ち返せ！！この三枚目のポケナスがあ！！！！」

「なっ！！…だれが三枚目のポケナスの空気読めないだー！！」

「そこまで言うてへんけど、間違つてへんやろーがー！！」

「表出る！！ナパームくらわしたる」

「昨日の怪我まだ完全には回復できておらんやろ？…安心しいや。もう一度ワイが寝たきりにさしたるわ！！」

「おっ！ケンカまたすんの？俺様も混ぜろ。って言うか昨日龍牙と戦つてねーからまず、龍牙！俺様と戦え！！」

「ええ度胸や。筋肉戦闘バカ！！後悔しなや！！」

そう言うて三人とも定食屋を出てケンカを始めようとする。するとそこへ昨日俺たちに仕事を依頼してきた。男が額に大粒の汗をつけながらやってきた。

「はあはあ…さ…探しましたよ。」

「ん？…あぁ昨日の…」

「そうです。あなた方に仕事の依頼をしたものです。…すいません。昨日はいきなり寝てしまつて。たぶん疲れが溜まっていたんでしょ。うが…今日はちゃんとお話させてもらいますので、一緒に来てもらえますか？」

（なあなあ…もしかして昨日のこと気付いていないのかな？）

（たぶんそうやろ。…なんかちよつと気の毒や）

(いやーこれはチャンスだ。下手に気を悪くさせるのはよくねーぜ)

《やったのはお前だけどな(やけどな)》

「あの…何か？」

「…！…いえ。分かりました。」

「ほ…ほないこか？」

「H A H A H A。ほらいこーぜ」

そう言つて男の人をせかす。

小声で喋っている事を聞かれなくて本当によかったと胸を下ろすのであった。

.....

男につれられて来たのは昨日と同じ酒場であった。

ただ昨日と違うのは俺達以外の人がない事だった。

「あれ？俺達だけですか？」

「ええ。昨日いた人達は気付いたらもういなくなってますって…探そうにも時間が足りないので、こうして最初に見つけた貴方に頼みたいのです。」

「おう。任せときな。俺様たちにかかりゃどんな依頼も成功したも

同然だぜ。」

「おお！！それは心強い。それでは依頼の説明をさせていただきます。」

「そう言うと姿勢を正してあたりを警戒しながら喋り始めた。」

「私は今回の依頼ですが、この人物達を倒して欲しいのです。」

「そうやって内ポケットの中から四枚の写真を取り出し、俺たちに見せた。」

「何だ。ガキ二人にひょろい兄ちゃんが二人だけじゃねえか」

「見た目は確かにそうですが、甘く見ないほうがいいと思います。こやつ等は先の戦い…オスティア回復作戦の帝国側の敗因すべてです。帝国側も精鋭で組織された討伐隊を送ったらしいのだが悉く返り討ちにあつたそうです。そこで私の方に依頼がありこうして仲介させてもらっているのです。」

「…ねえ依頼人さん。下手な芝居はやめなよ。俺達にはもうばれてるぜ?」

「!?!?!…いったいどういうことでしょうか?」

「あんまワイらをなめんといてほしいな。…あんた帝国の人間やる?」

「ま!そういうことだな。…さあ腹を割って話そうぜ?」

俺たちがそう依頼人を追及すると、ビクツと体を震わせながら視線をそらす。

まあ目をそらす気持ちはわからんでもない。自分よりはるかに強い人…それも三人から睨まれているのだから…俺だったらこの場から逃げ出すと思う……多分だけど。

でもこの依頼人は逃げることをせず、目をそらせ小刻みに震えながらも硬く口を閉ざしていた。

そこは素直に感心するが、実際は帝国側も切羽詰ってこうして俺達みたいなやつらに依頼しに来ているんだから引くに引けないのだろう。

まあ…でもこのまま時間がたっても無駄なのでそろそろ助け舟でも出してやるかな。

「ま、たとえ帝国側の人間だとしても関係ないな。」

「確かにそやな。」

「もらえるもん。ちゃんとももらえるなら別にいいぜ？」

そう俺達が答えるとあからさまにほっとしたような顔をしてこちらを見てくる。

「それはもちろん。ちゃんと謝礼は払わせていただきます。…ではお引き受けしてくださいさと思っていいんですね。」

「オウ。俺達に任せときな」

そうラカンがしめてこの場は解散となった。

依頼人がこの場から立ち去った後これからどうするか話し合っていた。

「さてと…依頼を引き受けたはいいいけど、これからどうすればいいんだ？」

「そつやな。ワイとタケヤンは依頼受けたのこれがはじめてや。何をどうすればいいかわからへん。」

「ああん？そうなのか？あんだけつえーんだから依頼の一つや二つやっているもんだと思ってたぜ。まあ、それならしかたがねえ…俺様が一から教えてやるぜ。」

『よろしくたのむ(わ)』

「10万」

「……龍ちゃん多分俺達だけでも何とかなると思うからいいか」

「せやな。いこか」

「まてまてまて！冗談だって。…そつだなまずこいつらのこと調べることから始めようや。」

「へえ…ラカンのことだから今すぐ倒しにいこうとか言つと思つた。」

「あくまで依頼だからな。それなりに準備つていふのは必要だぜ？」

「なつとくやな。まあ情報ならすぐに集まるんやないか？さっきの話聞いたる限りじゃかなり有名なやつらみたいやし。」

「だな。じゃまずは情報集めてやつか。」

「そういうことだ。…じゃやるか。」

『おっ』

こうして俺達は依頼された自分の情報を集めるために動き出した。ぶっちゃけて言えば、俺は大方の所はわかっているのだが、それでも用心に越したことはないと思う。

なんていったって相手は”紅き翼”

どうせ俺の想像を超えてくるのだから…

とりあえず今は情報を集めながら力をつけないと。

最低限ラカンと同じところまで鍛えないとあの創造主には勝てないだろうからな。

とりあえず今は…”目指せラカン！！”そして”打倒紅き翼”
がんばりますか！

第四話：帰ってきた依頼人（後書き）

結構すいすいってかけると思ってたんだけど、ここ原作じゃあらっ
としか書いてないもんだから苦労しました。

今手元に原作ないからな…漫喫でも行って読んでこないと。

それではまた次回！！

第五話・邂逅（前書き）

さてさてとうとう”紅き翼”とご対面です。
少々どころか、いろいろ変わっています。これがこの作品の話な
らなうと思っていただけたら幸いです。
それでは第五話どうぞ！

第五話：邂逅

依頼を受けてから数日が経過した。依頼人も出来るだけ早く実行して欲しいとは言ったが、明確には期限を決められていなかった。慎重に情報を選んでいたので……さすが英雄と呼ばれるであろう人達。最初から俺達の度肝を抜いてくれた。

「……なあタケヤン、ラカン。こいつら調べる必要あるんか？」

「……それは思っても言わないでよ龍ちゃん。」

「コイツは驚いたぜ。俺も傭兵を始めて結構立つが、こんな奴らは初めてだ。」

ラカンがそういうのだから本当にありえないことなんだろうと思う。

曰く、奴らにはどんな攻撃も効かない……無敵なんだよ。

曰く、あいつらには誰もかなわねえ……無敵さ。

曰く、あ、あ、あ、あいつらの話はしないでくれ。今こうして生きていられるだけでも幸運なんだよ。帝国にとっちゃあいつらは不死身の悪魔なんだ……！

などなど、ほとんど同じ様なことしか聞けなかったのだ。唯一有力な情報と言えば刀を使う詠春が女に弱いと言っことぐらいである。

「……で、どうしようか。これ以上はめんどく……調べても何にも出てこないような気がするんだけど？」

「今めんどくさいとかいったやる?…でもまあ同感や。意味ないきがすわ」

「だな。まあ今どのあたりにいるかは聞けたし、そろそろヤツラの面でも拝みに行くか！」

『賛成』

そう言うと俺達はラカンが持ってきた情報を元に”紅き翼”がいるであろう場所へと向かうのであった。

.....

依頼を果たすために町を出てから数日がたった。

その間、ラカンや龍ちゃんと手合わせを何度もし、お互いに力をつけていった。

ちなみに先送りになっていた龍ちゃんとラカンのケンカだが、まあ結果を言うならラカンの勝ちだがどうしても納得できない事があった。

それは、龍ちゃんが口から氷のレーザーみたいなものを出した時、ラカンはそれをまともに受けて氷漬けになったのだが、なぜか何事も無かったかのように中から氷を割り戦っていた。

普通なら悪くて死に、良くても体のどこからしら異常をきたして動きが鈍くなると思うのだが…なんか氷漬けされた前よりも動きが良くなっていた。

まあ…存在がバグとか言われてる人だからなあ…と言う言葉で何とか自分をごまかしていた。

ともかくそんな時間をすごしながら目的の場所へと移動していった。そしてついに”紅き翼”の姿を確認したのであった。

「やっと見つけたぜ。んー今は飯中か」

「……なんやむっちゃうまそうな匂いがするんやけど。ええなあ」

「あーあれなら俺も作れると思うぞ？鍋って言う料理だけど……まさには日本が生み出した最高傑作のひとつだね。」

「日本？どこやそこ」

「えっ！ーいや…あはは。気にすんな。」

「なんや、なんではぐらかすん？」

「だから気にすなって！…気にしすぎるとはげるぞ？」

「なんやて！？ハゲるってなんや！どこがハゲるいうんや！ー」

「H A H A H A。相変わらず緊張感ねえな。…疑問なんだが、幻獣もハゲるのか？」

「ハゲるわけあるかい！…たぶん。」

「たぶんって…。それに緊張感ないなんてラカンには言われたくねーな」

「ちげーねーな。」

そう言つて三人で笑い合う。
さて、いよいよ”紅き翼”と対決。自分が英雄相手にどこまで出来るのか。ためさせてもらう!!

（紅の翼・ナギside）

オスティア防衛戦のあと何故か俺達は戦争の前線ではなく辺境の地へと送られた。

理由は分からないが、別にいい。俺達は気に入らないやつらをぶっ飛ばせばいい。それならどこに行こうとかんけーねーからな。

そんな訳で、俺達は今辺境の地で詠春が作っている料理、鍋？ができるのをまっていた。

「お！？これが旧世界の『鍋料理』ってやつか！それじゃ早速肉を投入」

「トカゲの肉でもうまいのかのう？」

「ちよ、ナギ！おまつ！！何いきなり肉を入れようとしている！！」

「いいだろ？詠春。うまいんだからさ」

「バ、バカ！火の通る時間差というものがあったな。まずは野菜を入れてから」

詠春がなんかごちゃごちゃ言ってるけどかんけねーとりあえず肉が食いたいんだよ。

「フフフ…知ってますよ詠春。日本では貴方のような人を『鍋將軍』と呼ぶのじゃう？」

『な…鍋將軍!』

なんだそれは…最強だと思っている俺様でも敵いそうにねえ名前は。

「つ…強そうじゃな」

「まいったよ。まさか詠春がそこまで偉いなんて知らなかったぜ…」

「うむ…。料理はすべてお主に任せる。好きにするがよい…」

「ん?なんかいろいろ疑問を感じるんだが…まあいいか」

なんか詠春が首を捻って考えてるけど、気にする必要はねえな。

とりあえず今は詠春が作ってくれる鍋を楽しみにするか。

「……よし!そろそろ食べてもいい頃かな?」

「マジか!…よっしゃーいただきます!」

「うまそうじゃのう」

「私もいただきます」

鍋將軍?詠春のお墨付きを貰ったからようやく食べられた。

んで口に入れた瞬間。今まで食べた事の無いそのうまさに思わず叫び出したくなった。

「んめ—————!」

「このしょうゆ？とか言ったかこれがなかなかええのう」

「それにこの大根おろしもですね。」

「ハハハッそう言ってもらえると嬉しいよ！！」

詠春は俺たちが旨そうに食べているのが嬉しいのか笑っている。

こんな時間がすごせるならわざわざ辺境の地に來たのも悪くなかったと思っぜ。

そう思っていると突然空から大きな剣が降ってきやがった。

それも丁度鍋の近くに…あ、もったいねえから肉の確保、確保っと。

そしたら次に來たのはさっきの剣を投げた奴だろう。

大男がやってきた。

「食事中にしつれい。俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ！！」

…コイツはかなりつええ…俺がやるか？

そう思っていると、その大男はいきなり横にぶっ飛び、さっきまで大男がいた場所には肩に虎を乗せた男だった。そして大男に向かって叫んでいた。

「このバカンが！！！せつかくの鍋を…もとい、食べ物を粗末にするなんて何考えてやがるんだー！！！！」

何いきなり来て言ってるんだ…？

く紅の翼・ナギside終く

（武side）

「さてと…さすがに食事中は戦うのは気が引けるな…終わるまで待つか」

チヨイチヨイ

「ん？どうしたんだ龍ちゃん？」

「……ラカンが飛び出していったんやけど」

「え…！！」

龍ちゃんに言われて、そっちの方に視線を移してみるとさっきまで鍋があつた所にラカンの大剣が刺さっていて、大剣を投げたラカンと言えばそのままその場所へ降りていつていた。

「あの…バカンが！！飯を無駄にするなんて！！！！！！」

「は？いやいや突つ込む所そこなんか？」

「あ…ああん？」

「い…いやなんでもないで」

「とにかく俺たちも行くぞ？あのバカンと少しOHANASSIをしないといけないみたいだからなあ！！」

「さーいえつさー」

そう言つて俺達もその場所へ向かう。

なんか龍ちゃんがプルプル震えていつもと違っていたけど今はそんな事気にしている場合じゃない!!

あのやるう!! ご飯は大切にしないとイケないって親に教えてもらわなかったのか!?

しかも鍋!!!

まだまだいろいろ出来たのに…終わったあとの雑炊が格別なんだぞ!?

それを…それを…あのバカン!!!

コノウラミハラサデオクベキカ…

「あれ? タケヤんってこんなに食べ物にうるさかったっけ? なんやワイでも見たことが無いくらいいかつとるんやけど…ワイはご飯を粗末にあつこうた事無いから大丈夫やと思うけど、気をつけなあかんな。…まあラカンはご愁傷様やな。」

とりあえずぶっ飛ばす!

マグナムでぶっ飛ばす!!

ターゲットロック!!

くらえバカン!!!

ドコオオオン!!!

「このバカンが!!! せつかくの鍋を…もとい、食べ物を粗末にするなんて何考えてやがるんだ!!!」

「グハア…タケル何しやがるんだ!!!」

「それはこつちの台詞だ馬鹿野郎!!! 食べ物は粗末にしたらいけないうって小さい頃に教わらなかったのか!!!」

「いや…それは…」

「聞く耳もたん!!」

「聞いたんだからいわせろや!!」

「とにかくだな。お前がやった事でこの鍋はもう食べなくなったんだ!!謝れ!この人達に…そして鍋に!!」

「はあ?なんで…」

「あ、ああん?テメーマグナム全弾急所にくらいてーか?」

「すみませんでしたー!!!」

さすがにマグナム全弾は食らいたくないのか、土下座して謝ってる。皆呆けた顔しているけど関係ない。

こういうのは謝る事がまず大切だからな。

一人鍋かぶっている人もいるけど…それも気にしない。

「あ、ああ。別にいいぜ?」

「そ、そうじゃの誰にだって間違いはあるしの?」

「フッフ…直接被害を受けたのは詠春だけですしね。」

やっと再起動をしたのか”紅き翼”の人達が返事を返す。

鍋をかぶった人も最初プルプル震えていたけど、ラカンが素直に謝ったら少しは怒りが収まったみたいで、顔を拭いていた。まだラカンは睨んでいるみたいだけど。

「それでじゃが…お主等は一体何しにきたのじゃ？」

しばらくすると、爺言葉を喋る少年が俺達に聞いてきた。

「ん？ああ実はさっきラカンが言ったかも知れないけど、俺達は傭兵でね。”紅き翼”を潰してほしいって依頼があったからこうしてきたんだよ。」

「へーそうなのか。」

「バカ！！何普通に返してんだナギ！こいつらは俺達を倒しに来たって言ってるんだぞ？」

「何！？」

(なんか思っていた以上にナギがバカだな。)

「ま、そんなわけですつきも言ったがいっちょやるーぜ？」

「へっ！おもしれえ。やってやるぜ！！」

そう言つてラカンとナギはこの場を離れていった。

そしてそのすぐ後大きな爆発音が聞こえてきたから、かなり派手にやっっているらしい。

「バカはバカの相手をすればよかろう。…それでお主等もやるのか？」

「ん？ああまあ依頼だし？それに巷で有名なあんた達に俺がどこま

で出来るか試してみたいって言うのもある。」

「そういうこつちな。なんやお互いバトルマニアぽくなくなってもうたな。」

「多分バカンのせいだろ？龍ちゃん」

「あーそうやるなタケちゃん」

そう言いながら二人で笑い合っていると、何故か他の人がビツクリしていた。

「ん？どうしたんだ？」

「ど…どうしたって虎が喋ったんだぞ？」

「む…もしかや幻獣か？」

「なかなか興味深いですね。幻獣が人と一緒に行動しているなんて。」

あーなるほど。確かに珍しいかもしれない。あまりにラカンが普通にしてたから大丈夫だと思っていたけど、これが一般的な反応か。

「まあ、龍ちゃんとは気があってね。そっからは一緒に行動しているんだよ。」

「気があったからって…」

「気にしないでよ。えーと…」

「詠春だ。近衛詠春」

「ワシはゼクトじゃ」

「アルビレオ・イマといいます。アルと呼んで下さい」

「俺の名前はタケル・ダテ。んでこっちが…」

「龍牙や。よろしゅうな」

『よろしく』

そう言つて自己紹介を済ませる。

自己紹介を済ませてなんか和やかな空気になつてしまつたけど、依頼は依頼。そろそろ実行しますか。

「つて訳で、俺達も手合わせお願いします。」

「ふむ。仕方が無いの」

「それでなんですが、俺と相手は詠春さんお願いできますか？」

「え？私かい？」

少々ビックリした感じでそう返す詠春。

「ええ。理由としては、私は武術家です。無論魔法とかも使えますが、今回は一武術家として戦いたいと思つています。それに私の武術は銃火器を模してつくられた武術。銃と剣どちらが上か確かめる

のも一興と思いませんか？」

「素手と剣で戦うのかい？それはちょっと…」

「心配しなくても結構です。私の拳は剣よりも強いですから…それとも私に負けるのが怖いですか？」

「!!!いいだろう。その勝負受けよう」

「ありがとうございます。では少し離れた場所へ移動しましょう。」

「分かった。」

そう言つて俺たちも移動をした。

銃闘技の天敵は原作では剣術だった。実際は剣を模した拳術だったけど、それでも戦つてみたい。サムライ・マスター近衛詠春。俺の拳で打ち砕いてやる!!!

〈武side終〉

「なんや。いつもの違うな〜タケヤン。なんかあつたんか？」

「いつもはあんな感じじゃないのか？」

「ちゃうな。いつもは好戦的じゃないし、それにあんな挑発せーへんもん。」

「なるほど。何か事情があるのかもしれませんね。」

「かもな…。まあええ。それよりワイの相手なんやけど…ゼクトは

ん頼めまっか？」

「ワシか？かまわんが理由を知りたいのう」

「ワイの真骨頂は攻撃や、ならあんたらの中で一番防御に優れとるゼクトはんと戦ってみたいと思うねん。それにアルはんはなんや相性が悪い気がする。主に性格的な意味でな」

「それは少しひどくありませんか？」

「ふむ。わからんでもないのう」

「ゼクトまで…」

「あーなんや。別にあんたの事は嫌いやらへんよ？まあ好きでもないけどな…」

「それはとどめをさしてますよね。」

「あ！？そんなつもりやらへんねん。…とにかくや。やるやゼクトはん」

「そうじゃな。じゃワシらも場所を移すとするかの」

「りよーかいや」

こうして龍牙達も移動していった。そしてのっこったのはアル一人。

「ふう…私って嫌われているんですかね」

その眩くアルの背中はとても寂しそうだった。

く我拳は銃なりて・終く

第五話：邂逅（後書き）

次回ですが、話は進まず、詠春VS武を書きたいと思います。

その後は、ゼクトVS龍牙です。

ナギVSラカンについては今の所書く気はありません。

と言うのも、原作で13時間も戦っていたとか…それだけの内容を詰められないのではありません。

と言うことでバトルシーン二回目頑張つて書きますので、楽しみにしててください。

それでは

第六話：銃と剣（前書き）

今回は本当に悩みました。

戦闘シーンを多く入れて行きたいと思っている手前、いろいろ試行錯誤しながら書いているのですが、やっぱり難しい！！

今回も悩みに悩んで書きました。

うまく伝わってくれれば嬉しいです。

それではどうぞ！

第六話：銃と剣

詠春さんと俺は皆がいた場所から十分に離れた場所で足を止めた。遠くからは爆発音などが聞こえてくるが、これだけ離れていればこちらに影響は来ないだろう。

そして詠春さんから少し離れて、すぐにでも戦闘を開始できるようにグローブを装着する。

詠春さんもさつきとはまるで別人のような顔つきになり、静かにそこでたたずんでいた。

「詠春さん。先ほどは申し訳ありませんでした。」

「何のことだい？」

「いえ先ほどの挑発で怒らせてしまったかと思ひまして……」

「ああ、その事が気にしなくていいよ。むしろこちらこそ武君の決意を不意にしそうになって申し訳なかったね。」

「いえ……」

「しかしなんだな……。君は見た所ずいぶん若いようだが、落ち着いているね。」

「そんな事無いですよ？さっきの挑発にしても心臓がバクバク言うてましたから」

「ハハハッそんな緊張しなくてもいいのに。」

「緊張もしますよ。先ほどは剣と銃のどちらが上か確かめたいとか
言いましたけど、いつもはそんな事言うキャラじゃないですし、そ
れにこうして剣の達人と戦うのは初めてですから…」

「そう言ってもらえるのはうれしいね。でもだったら何故戦うとい
つたんだい？」

「…そうですね。しいてあげるなら”憧れ”でしょうか？」

「憧れ？」

「はい。小さな頃からの憧れです。話で聞いていた”侍”それに強
い憧れを持っているんです。正義でもなく悪でもなく…ただ自分が
正しいと思うことを”刀”に乗せて戦う。そんな生き様に俺は憧れ
たんです。」

「…君は日本人なのか？」

「ええ。どういう訳かこうして魔法の世界で生きてますけど、生粋
の日本人です。だからこそ貴方と戦いたい。今こうして憧れの侍が
目の前にいる。俺も刀は使いませんが志は同じ、ならそれが本物
かどうか貴方と戦う事で確かめてみたいと思っています」

実際は理由も知ってるし、もう今更なんだけど、それでもこの気持
ちは本当だ。

TVや小説、演劇で見ていた侍。俺はそれに強い憧れを持っている。
もちろん刀に憧れた事もあったけど、歳を重ねるにつれて刀よりも
その生き方に強い憧れを持っていた。

元いた世界ではそんな生き方できていなかったけど、この世界では
その生き方を貫いていきたい。この鍛えた拳と共に…

そんな事を考えていると、詠春さんは目を大きく見開いてこちらを見た後、急に真剣な顔つきをして頭を下げてきた。

「……………失礼した。」

「えっ？いきなりなんですか？」

「武…いや武殿がそこまでの思いをもっていたとは正直見抜けなかった。だからこそもう一度あの言葉を放った事謝罪したいと思う。」

「そ、そんな…。頭を上げてください。下げられてもこちらが困りますよ。」

「ハハハツ君は本当に面白い子だな。…だがその気持ちは本物だ。そしてその実力も…。改めてなのらさせてもらおう。神鳴流免許皆伝近衛詠春。貴殿の思いに答えるためにも全力で相手しよう！！」

そう名乗りを上げた瞬間、そこには小さい頃から憧れた侍がそこにいた。

気付くと体が震えていた。

恐怖…？いや違う。これはきつと武者震いなんだろう。

日本人特有とは聞いていたが…まさか自分がこうしてなるなんて思いもしなかった。

やっぱり俺は生粋の日本人なんだな。

「銃闘技タケル・ダテ…いや伊達武。お願いします。」

一歩間違えば死んでしまうかもしれないというのに…嬉しさが止まらない。

さあいこうか拳《相棒》

〈全体視点〉

お互いに名乗りを上げたあと少し距離をとったまま二人は動かない。詠春は刀を抜いてだらんと下げ、武の方も肩幅に足を開いて拳を下に下げている。お互い構えもしない…いや。これがきつと構えなんだろう。自然体。

つまりこれからどんな風にも動けるし、攻撃できるというわけだ。

「詠春さん。峰を返しているのは俺相手では本気になる必要はないということでしょうか？」

「いや違うよ。これはあくまで仕合い。殺し合いじゃない。だから刃を向ける必要が無いだけさ…。それに神鳴流は獲物を選ばず…。峰を返していても斬ろうと思えば人は切れるし、気を込めればそんじょそこらの真剣よりも切れるよ。それよりも君は何もしなくていいのかい？まさか気を纏わないで刀と戦うなんて思っていないよね。」

「…そうですね。では失礼して…」右手に気、左手に魔力…合成」

そう呟いて胸の所で手を合わせると武の体の気が爆発的に上がる。

「…気の増加？いや…それにしても感覚が違うな。」

「感卦法ってやつです。今の俺じゃ詠春さんの気の量、質には敵いませんから」

「なるほど…。これは面白くなりそうだね。」

「…それでは行きます!!」

そう言い放つと自然体からスナイパーポジション射撃姿勢に変え、ガンブレットと撃つ。

「む!!」

いきなりのガンブレットに少々驚いたような顔をするが、すぐさま刀をふりガンブレットを斬る。

「なるほど銃を模した武術…その名に偽りなしか。しかし神鳴流には飛び道具など無意味だ!!」

「そうかも知れませんが…一発ではなく複数ならどうでしょうか？」

そう言うとガンブレットを乱れ撃つ。

感卦法のように自分自身を強化しないと使う事が出来ない技。それがこのガンブレットの乱れ撃ち。名を”クレイジー・ホース”という狙撃のような射程の長さで連射力を突き詰めた武オリジナルである。

「クツ…確かにこれは骨が折れるが、そんなものでは私に当てる事などできん」

量の多さにさすがに顔をしかめるが、さも当然と言った感じでガンブレットを切り落としていく。

その光景に武は驚いたが、休む事無くどんどん打ち込んでいく。

「うわぁ…これはさすがにショックを隠せないんですけど。せめて一発ぐらい当たってもいいじゃないですか」

「フツ…。確かにこれの速度と量はたいした者だが、速度については私が追いつける範囲だし、量で言えばナギなどが撃ってくる”魔法の矢”に比べればたいしたことは無い。…まあ威力はまったく別物だがな。」

律儀に武の呟きに答える詠春。その顔はまったく疲れを見せていなかった。

武自身も口ではそう言っていたが、実際は当たると思っただけはなかった。しかし、少しでもいいから体力などを削れるだろう…とは思っていたためこの結果は予想外だった。

「さて、なかなか面白いものを見せてくれたんだ。こちらこそそれ相應の技をお見せしよう。行くぞ?」

詠春はそう言うのと拳の弾幕から抜け出し武へと迫る。そして自分の射程範囲に入ったところで剣を振り上げた。

「斬岩剣!」

新鳴流の基本的な奥義にして、もっとも使う頻度が多いとされる”斬岩剣”。

その名の通り岩をも切り裂く剛剣。

それを見た武は、最初迎え撃とうと考えたが、その技の威力を感じ取り受け止めようとせず、その場から引く。

ドコオオン!!

大きな音と共に武がいた場所は土煙に覆われる。

土煙が消えるとそこには、大きなクレーターが出来ており、更にはクレーターの中心から真っ直ぐ大地に切れ込みができていた。

それを見た武は背筋に嫌な汗をかく。

「いい判断だね。もし受け止めようとしていたらその体は今頃真っ二つだと思っよ?」

「…みたいです。良かったです。勘が働いて…」

「でも何時までよけられるかな?」

「…いいえ。もう避けませんよ?」

武がそう言うと、詠春の顔に少々落胆の色が見える。だが、次の言葉を武が発すると楽しそうに笑みを浮かべる。

「詠春さんがその技を出せる暇を与えないほど圧倒的に撃ちぬかせてもらいます。」

「……おもしろい。出来るものならやって見せてもらおうか!!!」

そう二人は叫び激突する。

武は前と同じようにガンマン・ポジションを取り連撃を浴びせる。詠春も武の連撃を受け流しながら刀を振るっていく。

ガガガガガガガガガ!!!

「クッ…さすがにつらくなってきたな。なるほどこちらが本来の速さか…」

「甘いですよ詠春さん。」

「なんだと？」

「ここからが俺の本気のスピードです。さあ…耐えられますか？すべてを飲み込む拳の弾幕に…」ダブルガトリングショット！！！」

武がそう叫ぶと先ほどの2倍、3倍に膨れ上がった拳の弾幕が詠春に向かって放たれる。

抗う事を許さない。移動する事も許さない。まさに拳の大津波であった。

”ダブルガトリングショット”

これは武自身が望み作り上げた。オリジナルである。

”ガトリングガン”それがこの技の元である。圧倒的な連射速度と量。

そののみを突き詰めた技。

無論普段ならここまでの量は放つ事など出来ないが、今は感卦法によって強化をしている。だからここまでの量が出るのである。ちなみに一発一発はそこまでの威力はもっていない。だが、塵も積もれば…ということわざがあるように、数を当てればいくらタフな相手でも倒れるしか…いやこの連打では倒れる事も許しはしないので、相手が動かなくなることだろう。

ラカンにもこれはもう二度と食らいたくないと言わしめた技でもある。

「クッ……」

さすがの詠春でもこの量は捌ききれないのか次々と被弾していき、顔が苦痛にゆがむ。

そしてある一発の拳が詠春に当たる。

いい所に当たったのか、その一発で詠春の体が浮き上がり一瞬だけ無防備になる。

その瞬間、先ほどまでの拳の大津波は止む。

詠春がどうしたのか？と思った瞬間、詠春の体に一斉に鳥肌が立つ。

「コイツで止めだ！！44マグナム！！」

「なっ、間に合え！！真・雷鳴剣！！」

ズカアアアン！！！！

武の44マグナムと詠春の真・雷鳴剣。

互いの技の中でも最高の威力を持つであろう技が激突した瞬間あたりは真つ白に包まれ、その後爆発音ととってもいい音が響き渡る。

あまりにもすさまじい威力によって、地面に生えていた草花は一瞬にして消え去り荒野のようになってしまっていた。

そしてその荒野に佇む二人の姿。

もちろん、武と詠春であるが、二人は互いに位置が変わり背中合わせで立っている。

すると一人が膝を付く。

それは詠春だった。

だが、詠春が膝を付くのとほぼ同じぐらいに武の体から血が噴出す。

ブシューウウウ

「ぐっ…完全に撃ち勝ったと思ったんだけどな」

そう言つて、右肩を左手で抑える。そこには詠春の刀によって斬られた傷があつた。

「くっ…何とか急所からは外せたが、それでもこの威力か。」

無論詠春の方も無傷と言うわけではなく、体の中心から少し外れた所に、打ち抜いた後が出来ておりそこを手で押さえていた。

「詠春さん。さすがですね。まさか俺のマグナムを逸らし、さらに斬り付けるなんて普通できませんよ。」

「そういう武君だつて、急所から外れているはずなのにこの威力なんて…まさに銃弾の拳だな。」

二人とも傷口を手で押さえながら、互いの強さを褒め合う。

その顔は苦痛でゆがんでいながらも真剣で、どこか楽しそうだった。もし、龍牙がこの場に居たらこう言つただろう…ラカンとのケンカをもう一度見ているかのようやと…

「さっきの技、ガトリングだったか？あれはかなり効いたよ。…だが弱点も分かつてしまったがね。」

(ピクッ)

「銃と一緒に玉数制限があると言つた所か。…実際は拳を撃っているだけだから、拳を繰り出すための体力だろう。まあ普通ならあの速度と量を打ち出すこと自体無理な事なのだが、それを武君は修練によつて可能にした。それだけでも尊敬に値する。しかし、そのためには膨大な体力を必要とし、感卦法によつて強化されてもそれは変わらない。違うかな？」

詠春の問いかけに黙ってしまおう武。

なぜなら詠春が言った事は事実であり、弱点のすべてを見透かされたわけではないが、見事看破しているからである。

ダブルガトリングショット

その弱点とは、体力消費、酸欠、筋肉の酷使、そして心臓の負担が大ききことである。

体力についてはそのままの意味であの連射をおこなうために膨大な体力が消費される。

そして酸欠については、速度が問題となってくる。速度を極めるにあたり、行き着いたのが無呼吸運動である。実際は持たないため呼吸をしているが、ほぼ無呼吸運動なため、撃ち続ければ酸欠になってしまう。

筋肉の酷使についても同様で、あの連射と速度を保ち続けるために相当筋肉を酷使している。

そのため、技を限界まで続ければその後はしばらく腕が上がらなくなってしまう。

そして最後の弱点。心臓の負担である。

銃闘技のキモである血液の流れ、それをコントロールしているのが心臓であるが、激しい運動に加え酸素不足によってマグナムよりも数倍の不可がかり、最悪心臓が止まってしまう場合もあるのだ。無論その事は武も重々承知でこの技を使っており、ギリギリの所を見極めている。

「どこで気がつきましたか？」

「強烈な一撃を放とうとした所からかな？あのまま続けていれば私は何も出来ないまま負けていただろう。だけど君はこのまま行けば勝てるのに、それをやめるとどめをさそうとした。そこで気がつい

たのさ」

「さすがですね。まさかこうも簡単に気付かれるとは思いませんでした。」

「簡単じゃないさ。おかげでかなりギリギリの所まで追い詰められているからね。でも武君もその傷じゃ同じ事は出来ないだろうし、やれる事も限られてくるだろう。」

「お見通しですか…。やりにくいなあもつ。」

「ハハハッ君よりは長く生きてるからね。それぐらいは見抜けないと。」

「それでどうします？このままじゃお互いに収まりつかないと思いますけど？」

「そうだね…。武君も分かってるだろうけどもうお互いできることは限られているからね。ここはやっぱりお互いすべてを込めた一撃を放つって言うのが常道だろう。」

詠春がそう言うと、武は思わず笑ってしまった。

「どうしたんだい？何かおかしいことでも言ったかな？」

「クククツ…いえ。実はラカン…あの今ナギさんと戦っている男とマジケンカしたことがあるんですが、その時もお互いギリギリの勝負になって最後は同じ展開になったものですから…こうも同じだと何故か笑えてきてしまっ…」

武がそう言つてまだ笑つていると、納得がいったのか詠春も同じように笑い出す。

「あつはつはつは。なるほど。武君が笑つてしまつ気持ち分かる気がするよ。えてして強者との戦いというものは、こつなるようになっていられるかもしれないね。私も覚えがあるからね。」

そう言つて笑い合う。

そしてお互いにある程度笑い合ったところで、二人は真剣な顔つきになり、構える。

詠春は刀を正眼に構え、武は右肩が斬られて右腕が使えないので、左腕を構えハンマーコックする。

「利き腕じゃなくてもさつきのような強烈な一撃を撃てるのかな？」

「ご心配なく。確かにマグナムは撃てませんが、それに変わる必殺の技が左には備わっていますから。」

「そうか…それは安心した。」

「詠春さん。貴方と戦えて本当に良かった。貴方はやっぱり俺が憧れた侍そのものでした。」

「武君。君と戦えて本当に良かったよ。久しぶりにいい勝負が出来た。それだけでも嬉しいよ。」

「でも」「だが」

「撃ち抜き勝つのは俺だ!!」「この仕合いに勝つのは私だ!!」

お互い照らし合わせたように喋り、それが喋り終わると同時にお互い地面を蹴って飛び出す。

詠春の刀に気が集まり光出せば、武のハンマーコックした左腕が、鉛色から青銅色ガンブルーに変わる。

そして今できる最高の一撃の技を叫ぶ

「これが俺のラストショット！インビジブル・デリンジャー」

「神鳴流最終奥義！神鳴！！」

その瞬間、大きな雷が轟音を響かせてあたりを包み、銃声と聞き間違えるほどの低く鈍い音が突き抜ける。

そして辺りが静けさを取り戻したと思ったら、そこには寝そべっている二人の姿があった。

「ハハハツ…まいったよ。初めてあんな事をされたよ。私も修行が足りないな。」

そう言った詠春の心臓とみぞおちの辺りに撃ちぬかれた証の銃痕が残っており、そのおかげで体が動けずにいた。

「かなりの賭けでしたよ。でも詠春さんの技の威力がでかすぎて俺もまったく動けないんですけどね。」

そついうのは武。体のあちこちから黒い煙が漂っていて、少し焦げたにおいがする。

ただどこも斬られていない所を見ると、刀に纏わせた気によってダメージを受けただけだった。

あの瞬間、武は詠春から放たれた刀の側面に動かない右拳を撃ちつけ斬撃を逸らし、そのまま懐にもぐりこんだ後左腕を解放、急所に向かつて超高速の二連撃を食らわせたのだ。

ただ、逸らしたと言ってもほんの少しだけであり斬られてはいないと云っても気によって攻撃範囲が増えていたため、気の攻撃はまとも食らっていた。

「この勝負私の負けかな？」

「いえ、引き分けでしょう。俺も動けませんから」

「そうか。にしても私は剣をそれなりに極めたつもりだったんだが、まだまだだなあ…ありがとう。己の未熟さを思い知ったよ」

「まさかお礼を言われるとは思わなかったです。」

「ハハハッ。そうだ！またしばらくたったら仕合いしてくれるかな？」

「えーと……出来れば拒否したいかなって」

「それは出来ない相談だね。私を武術で引き分ける相手なんてまずいないからね。互いによきライバルでいようじゃないか。」

「いや、それは嬉しいんですけど基本的に戦うのは好きじゃないので…」

「それはうそじゃないかな。戦っている時はあんなに楽しそうだったじゃないか。大丈夫、無理にでも戦ってもらうからね」

「何が大丈夫か分かりません！！だから俺は…」

「鍋料理を食べさせてあげるとしても？」

「……………考えさせてください。」

「ふむ。日本料理でつればいいのか。良く分かったよ」

「……………そんな簡単に籠絡できると思わないでくださいね。…でも鍋は食べさせてください。」

「わかったよ。でも今は……………」

「そうですね。どうやってあつちに帰りましょうか？」

そう言って考え込む二人であった。

剣と銃どちらが強いのか？

その答えはこの戦いで出ることは無かった。

もしかしたらその答えは永久に出ないのかもしれない。

なぜなら互いに高めあつて限界を無くしていくのだから。

武がこの世界に来て約4ヶ月。

ようやく英雄の力に追いついた瞬間であった。

く我拳は銃なりて・終く

第六話：銃と剣（後書き）

オリジナル技紹介

”ダブルガトリングショット”

欠点が多い技となりましたが、作者一番のお気に入り技です。ドリルもいいですが、ガトリングも男のロマンだと思います!!

”インビジブル・デリンジャー”

左腕の必殺技です。射程、威力はマグナムには敵いませんが、初速と貫通力はマグナムより上となります。これを使用する場合、ボクシングでいうフックが当たるぐらいまで接近しないとダメです。攻撃方法としてはフックのように攻撃を当てた後更に拳を伸ばし押し込むことでマグナム以上の貫通力を生み出します。しかし威力はマグナムより低いので相手を倒すには急所を必ず狙い打つ必要があります。

攻撃回数は二回。

”神鳴流最終奥義神鳴”

詠春がつくった神鳴流の奥義です。いろいろ考えていたんですが、詠春ほどの剣の腕があるならオリジナルの技の一つや二つつくっていてもおかしくないかな？と思って書いて見ました。

真・雷鳴剣と同じく剣に雷を纏わせてる技ですが、違う所は突きの攻撃と言う所。速さ、威力を含めまさに雷の如し。詠春が使う技の中で最強・最速の技となります。

んー今回は詠春のキャラがいろいろ違うかも知れませんが、そこはラカンの時と同じくこの話の設定と置いていただければうれしいで

す。

今回は龍牙VSゼクトとなります。

今どつやって戦わせるか考え中なので、楽しみにしてくださいませる方々はもう少し待っていてください。これが書き終わればトントンと進んでいけると思いますので、ではまた次回お会いしましょう。

第七話：矛と盾（前書き）

お疲れ様です。

えーと気がつくとユニークが5000を超えていると言っビックリな展開。

まさかこんなに早くそうなるとは思ってもみませんでした。

ありがとうございます!!!

皆様にもっと楽しんでもらえるようにがんばります。

今回は前回言っていたようにゼクトVS龍牙となります。

うまく戦闘シーンがかけられているかいつも不安ですが、頑張って書きました。

それではどつぞー!!

第七話：矛と盾

詠春と武が戦いを始めた頃、ゼクトと龍牙もまた先ほどいた場所から離れ少し距離をとってにらみ合う。

「のう…龍牙。お主そのまままで戦うつもりか？」

「なんやゼクトはんきづいとったんかい。」

「まあ伊達に歳はとっておらんのでな。それに幻獣中でそんな体の小さいものなどフェアリー族以外見たことが無かったの。」

「へー見た目そんなんやけど、結構…いやかなり歳とつとるみたいやな。ほんま人間か？」

「そうじゃの限りなく人から離れた人間と言う所じゃの。魔法の研究のせいで不老になつてもうただけじゃ。」

「だけって済ますには大きすぎると思っんやけど…まあええか。それじゃお言葉に甘えて…」

そう龍牙が言うと”よっ”と声を上げて飛び上がると、先ほどまでぬいぐるみぐらいのサイズだったのが、一瞬にして大人の身長よりも大きな虎の姿となる。

「ほう…本来の姿はそんなんじゃったか。思ったより大きい訳じゃないんじやな。」

「何と比べとるんか分からんけど、これぐらいが普通やで？まあワ

イは種族の中でも若い方やからまだ小さい方かもしれんけど、それでももうそう大きくなりませえへん。せいぜいこの体が二倍になるくらいやな。」

「それはかなり大きくなるというんじゃないかの？…ワシも成長薬でも作ってみるかの」

「なんやゼクトはんもいろいろ大変なんやな。」

「まあの。…さておしゃべりもこれくらいにしてそろそろ始めるとするかの？」

「せやな。時間がたらへんというわけでもないやろうけど、せつかくの戦いや変な邪魔入って欲しくないしな。」

そう喋り終わると二人はお互いの目を見て気をうかがう。ジリツジリツ…と間合いを詰めながら近づいていく龍牙。

反対にその場からあまり動かず、じつと龍牙を見つめるゼクト。そこには真剣勝負特有の緊張感と重たい空気が流れていた。

「ワイからいかせてもらおうでえ！！」

その重たい空気を吹っ飛ばしたのは龍牙からだった。

考えてみれば当然だろう。龍牙は攻める事を主としており、逆にゼクトはもちろん攻める事も出来るがどちらかといえば、冷静に相手を見定め、攻撃する迎撃タイプの人間だからだ。

だからこそこの行動は当然といえよう。

「くらいや！空牙！！」

そう言つて爪を出した前足をふる龍牙。
するとその腕から空気の刃が出てゼクトに襲い掛かる。
ちなみになぜ親は武で、やっぱり技名つけたほうがかっこよくな
い？と言われてつけてもらっている。

「ほつと。危ないのう。空気の刃といった所か幻獣はもつと肉弾戦
を好むと思つていたのだが。ほれお返しじゃ。光の矢100本」

軽く空牙をよけたゼクトは返す刀で光の矢を放つ。

その数100本。普通の魔法使いならまず簡単に出せる量じゃ無い。

「うはーけっこう量多いな。やけどこんなもんよける必要あらへ
んわ。それとゼクトはん。その考えはまちごうてないで？普通の幻
獣はだいたいそうや。でもな、ワイの相棒はタケヤンやで？武術家
の相棒やつたらこんな芸の一つや二つ使えんな。」

そう軽口をたたきながら迫り来る魔法の矢を前足で払いのけていく。

「そうか。それはすまんかったの。にしても大体分かつてはおつた
のじゃが龍牙やるのう」

「あんまなめんといてや。でもゼクトはんもさすがやと思うで？今
まで見てきたどの魔法使いよりも強いやん。」

「あたりまえじゃ。年季がちがう」

「そやな」

そう和やかに話しているが、お互いに攻撃をしあいすであたりは
ひどい事になっていた。

地面は空牙によって裂け、魔法の矢によって大小の穴が開く。その中を二人はなんてことの無いように動き回り攻撃していく。しばらくそんな状況が続いた後二人はお互いに距離をとって止まりまた最初のように見つめあう。

「さて準備運動はこれくらいにしてそろそろ本気でいこか？」

「じゃの。」

今までは本気じゃなかったのか？と言いたい所だが二人が言うなら本当の事なのだろう。

それを証拠に龍牙とゼクトの周りにはあふれ出した魔力によって突風がまきをこり、ゼクトと龍牙の中心ではお互いにあふれだした魔力の風がせめぎあっていた。

「いくでえ……」我名において助けを請わん。その友の名は火の精霊クウ。我魔力を糧に我に力をしめせ”」

そう龍牙が唱えると、龍牙の体を炎が包み、そしてその中から紅く色を変えた龍牙が出てくる。その姿を見てゼクトは驚く。

「なんと龍牙は”闇の魔法”を使えるのか？」

「”闇の魔法”……ああタケヤンが使う魔法の事か？ちやうちやう。これは幻獣特有の魔法って奴や。」

「そうなのか？初めて聞くのう」

「そやるな。これはワイら虎型の幻獣特有って言ってもええとおも

うで？そもそも幻獣に人間が使うような魔法は存在せんのか。つこ
うとするのは人に良く似た奴らだけやろ？他は使わん。やけど、幻獣
は精霊の力を人よりも強く感じれるからこうして魔力を糧にして力
を貸してもらえろわけや。竜とかはそれをブレスとかに活用して
ようやけど、虎型のワイらはこの身に宿して戦う。それがこの”赤
王”や」

「なるほどの。長く生きてきたがそんな話初めて聞いたわ。にして
も…」赤王”とはなかなかカッコイイ名前じゃの」

「そう言ってもらえろうれしいわ。名前付けたのはタケヤンやけ
どな、ワイ自身結構気に入ってるんや」

ゼクトに名前をほめられて嬉しそうな顔をする龍牙。それをみたゼ
クトは”こつも人間らしい虎がいるとは…おもしろいのう”と心の
中で思ったとか。

「さて、勝負を中断して悪かった。続きを始めるのか？」

「望む所や！！！」

そう言つて龍牙はゼクトに向かつて駆け出す。

その姿を見たゼクトは詠唱を始める。

「ヴシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト”…”母なる水よ
り生まれし小さな子供達よ”我に集い形成せ”その小さき姿は
互いに寄り添い”列なる事で荘厳なる姿となし”すべてを呑み
込む海となれ”大海嘯”」

ゼクトの詠唱によって大きな津波が龍牙に襲い掛かる。

「甘いでえ…そんな水なんかでワイの炎消せるとおもつか？オラア！！かき消えんかい！！炎爆波！！」

ゼクトの魔法に対し、龍牙は右前足に火の魔力を集中させアップ！気味に振り上げ、前方の水に対して一気に爆炎を放出した。すると前の水は一気に蒸発してぽっかり穴があく。その穴に龍牙は飛び込み一気にゼクトに迫る。それをみたゼクトは驚いた顔をしながら、気を取り直し次の魔法を撃つ。

「あの水の量を蒸発させるじゃと…これは驚きじゃ。じゃがおかげででてる場所が丸見えじゃの。ほれ、”雷の暴風”」

龍牙はその魔法を確認するが、ときすでに遅しもろに食らってしまった。う。

…が、次の瞬間龍牙の体は煙のように消える。

「むっ…上か？」

ゼクトはそれに気付くと上空に気配を感じ上を見上げる。すると上には大きな火の玉がゼクトに向かって落ちてくる。

「くっ！！」

それを何とかよけてその場を離れると、地面に落ちた火の玉は周囲を燃やしつくし、一瞬にして炎が広範囲に舞い上がる。その中心にはもちろん龍牙がいた。

「あれ？今のは決まったと思うたんやけどな…」

「正直危ない所じゃったわ。あの身代わりに気付かんかったらあつとたの。」

「うわー！！」陽炎” 見破ったん？そらあかんわ。」

「ほう。” 陽炎” と言うのか先ほどの技は、いい技じゃの。」

「ま、あそこまで出来たんは半分ゼクトはんのおかげや。ゼクトはんが水だしてくれたもんで、ええ感じにつくれたんや。ありがとはん」

「そのお礼は嬉しくないのう。しかしこれではらちが明かん。どうするかの」

「その意見には賛成や。お互いにまだ手の内はすべて曝してないとは言え、同じ事の繰り返しやろ」

「まあやりようはあるか…」 ヴシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト” …” 母なる水より生まれし小さな子供達よ” 我に集い形成せ” その小さき姿は互いに寄り添い” 列なる事で荘厳なる姿となし” すべてを呑み込む海となれ” 大海嘯”」

ゼクトは何かを考え付いたのか、先ほどと同じ魔法をまた唱える。

「なんや？また消されたいんか？爆炎波！！」

龍牙も先ほどと同じように自分の近くだけ水を消すとゼクトを睨みつける。だがそこにはもうゼクトはおらず、龍牙は気配をたどる。すると後ろの方から詠唱の音が聞こえる。

「ヴシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト」…「契約により
我に従え」” 大空を統べる王”” 来れ”” 天上を貫く荒ぶる槍よ”
” 天へと誘う道となれ”” 深緑の柱””

その瞬間、龍牙を中心に風が巻き起こり竜巻となって中心にいる龍
牙を押しつぶそうとする。

しかもまわりには先ほど放った水があり、竜巻によって舞い上がり
重みの無い風に重量を与える。

「しもうた！！」

竜巻の中心に閉じ込められてしまった龍牙は中心で火の刃を放つが
まるで効果が無くそのまま飲み込まれてしまう。しかし、ゼクトの
魔法はまだ終わらない。

「ヴシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト」…「契約に従い
我に従え」” 氷の女王”” 来れ”” とこしえのやみ”” えいえんひ
ようが”” (さすがにきつい…。じゃがここで決めねばワシは勝
てん！！)

すると、水を伴った竜巻は一瞬にして氷漬けになり、大きな氷の柱
が出来る。もちろんその中には龍牙の姿があり、ゼクトはそれを確
認するととどめの一撃を放つ。

「ヴシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト」…「契約により
我に従え」” 炎の霸王”” 来れ”” 浄化の炎燃え盛る大剣”” ほと
ばしれよソドムを焼きし火と硫黄”” 罪ありし者を死の塵に”” 燃
える天空””！！」

残り少ない魔力をかき集めて最後の―撃とばかりに炎系最強呪文を放つゼクト。”勝った！！”そう思ったゼクトだったが、すぐさまその顔は驚愕の顔となる。なぜなら氷の中にいた龍牙が赤く光り、ゼクトが作り上げた氷の柱に輝が入っていたからだ。

「ワイをなめるんやないでえええ！！！！」

そう言つて氷の柱を突き破る龍牙。その体は炎に包まれ、あまりの熱量に龍牙の周りの景色は歪んで見える。そしてそのまま”燃える天空”へと突っ込んでいく。

そこでゼクトは自分の失敗に気付く。それは最後の呪文を炎系にしてしまった事だった。しかし、攻撃力と残りの魔力を考えれば、それしか撃てるものが無かったのも事実であり呪文を連発しなければ追い詰める事など出来なかつたので、仕方がないといえば仕方がないのである…。

そしてゼクトの予感は当たる。

”燃える天空”に突っ込んだ龍牙はその炎を自分に取り込み更に突っ込んでくる。

取り込んだおかげか、龍牙の体はすべて炎に包まれ、包んでいる炎が虎の形を形成する。その大きさは自身の体の二倍はあり、その威風堂々とした姿は、”赤王”…炎を統べる虎王に相応しい姿であった。

「これがワイの最高の技じゃ！！！！火迦具槌！！」

「間に合え！！障壁最大！！」

そう叫ぶと虎の形をした炎が大きく口を開けてゼクトを飲み込もう

としてきた。

対するゼクトもほとんど残っていない魔力を搾り出し自身が出来る最大の防御魔法を唱えて堪えようとする。

ゴガオオオオン

ぶつかりあった瞬間、鈍い音と燃え盛る炎の音が混じって大きな音が響き渡る。まるでそれは虎が雄叫びを上げているようにも聞こえた。音の中心では爆炎に包まれ、まるで炎の棺のように見える。

しばらくすると、炎の棺は姿を消し、二人の姿が見えてくる。いつの間にか二人は地面に降りており二人とも倒れている事は無かった。

「ハア：ハア：最後の最後でワシは失敗してもうたの」

そう言うのはゼクト、おなかを押さえ肩で息をしていた。体中に焦げた後や、火傷があり、しかも口からは血を流していた。

「その失敗のおかげでワイはたすかったんやで？…ほんま怖いわ」

そう軽口を叩いている龍牙であったが、いつの間にか紅から白へ戻っており、体中は傷だらけで血を流していた。息も荒くよくみると足が震えていた。

二人はそう言った後ほぼ同時に倒れこむ。

聞こえるのは遠くから大きな爆発音と、近くにいる人の息遣いだけ…しばらく何も喋らずそのままでした。

しばらくたった後、龍牙が独り言のように呟く。

「今日はワイが負けといたる。…やけど次はギリギリやない。誰が

見ても分かるように勝つたるわ」

「ワシの負けじゃないのかの？…じゃがそついうならそついうこと
にしておこつ。…もう二度と戦いたくないわい」

こうして龍牙とゼクトの戦いは終りを告げた。

この勝負には勝者はきつと存在しない。

二人とも負けたと認め敗者となつてしまったからだ。

だが、それでいいのかもしれない。

敗者だからこそ強くなるうという強力な”意志”が生まれるのだから。

きつと二人の明日は今日よりも強くなつてゐる事だろう…

なぜなら…

目指す頂が出来たのだから。

く我拳

は銃なりて・終く

第七話：矛と盾（後書き）

オリジナル技・魔法

空牙

特にこれと言って説明が無いんですが、まあ真空の刃を飛ばすと思っただければ…名前はふっと思いついたものを使いました。同じような技でこんな名前あった気がするけど…そこは勘弁してください。

大海嘯

この世界での水の最大魔法

イメージとしてはFFのダイダルウェブとかがイメージしやすいかと。

詠唱についてはそれっぽく、そしていい感じにを目標に書きました。どうでしょう？違和感とかないとうれしいです。

爆炎波

元ネタ…というかGODAGUNの聖さんの技そのままです。所々違う所はありますが、まあ魔法が使えるのでこんな感じになるのではないかと…。

感想でGODAGUNの他の技は出てこないのか？と言う質問を受けてそれで思いつきました。正直龍牙の技迷っていたのでありがたかったです。

不知火

ゼクトに空から突っ込んで炎を撒き散らした技の名前です。

話の中では奇襲っぽくしたかったので、技名を言わせませんでした。

陽炎

分身の術 or 変わり身の術です。炎を使い自分を作り出します。主に陽動に使用する予定です。作中で水を利用したとありましたが、あれは水を蒸発させて視界を悪くしたおかげで、相手から普通よりも本物っぽく見えるようになったという事です。

深緑の柱

サイクロン・竜巻そんな感じの魔法です。風系の最大魔法として登場させました。普通なら中心は安全なのですが、この魔法では中心に向かってどんどん風の壁が迫ってくるようにしました。名前を最後まで悩んでいた魔法です。

火迦具槌ひのかぐんち

これも結構技名で出てくる名前だと思います。龍牙最大の技で、火を全体に纏い炎の虎の形になって相手に突撃します。まず火の虎が相手を丸呑みにして逃げ場を失わせ炎による攻撃をし、本隊である龍牙はその相手に対して体当たりをする。といった技です。この技の特徴として、食らった相手爆炎に包まれるということです。今回は障壁最大がかかっていたため、ぶっ飛ぶ事はありませんでしたが、通常はぶっとびます。

いかがだったでしょうか？

今回はかなりの量のオリジナルが入っていましたが、なるべくネギまの世界を壊さずつくったつもりです。あと幻獣の魔法については作者の想像となります。

これを書き終わって思ったことは、”オリジナル魔法はつくるのがかなりめんどい”です。…まあたぶんこれからもつくっていくと思うんですが、何時心が折れるか今から不安でいっぱいです。

それでは次回またあいましょう

第八話：グレートブリッジ奪還作戦（前書き）

お疲れさまです。最近暑くて溶けそうです。暑いのが苦手なのに節電
って…出来るかー！！！！！！

ふう…。さて今回は本来なら一話で終わる予定だったんですがいろいろ詰め込んだら長くなったので二つに分けました。他の人ここはさらっと終わってるけど、自分だけ長く書いてつまらないとかいわれないか心配ですが、楽しんでもらえたら嬉しいです。
それではどうぞ！

第八話：グレートブリッジ奪還作戦

詠春との仕合いが終わったあと、その場で少し休み、何とか動けるようになったら俺達はアルがいるであろう場所に戻ってきた。その時にアルがとても嬉しそうにこちらに向かってきたのだが：何でこうなったのか分からない。…というか正直アルのキャラでそれをやられるといういろいろダメな感じがした。

ともかく、アルからすこし距離をとりながら話をしていると、龍ちゃん達も勝負が終わったのかこっちに向かって来た。勝敗については尋ねる事はしなかったが、龍ちゃんの顔を見る限り何かとてもいいことがあったんだと思う。それぐらいいい目をしていた。

もちろん龍ちゃんもこっちの勝敗を聞くことは無く、しばらく俺の目を見て納得したように”うんうん”と頷いていた。

そうしてラカン達以外が集まった後、しばらく雑談をしていたのだが一向に勝負の決着がつかないので、詠春さんに頼んで日本食をつくって貰いそれを食べながら待つことになった。

それから半日以上が過ぎた所で、爆発音も無くなり様子を見に全員でその場所へ行くと、二人して寝転がって口ゲンカをしていた。見ている見苦しかったので、引き離して連れて帰ろうとするとなんというか、子供のような捨て台詞を二人して言っていた。

「今日は調子が悪かったただけだ。今度会うときは覚えとけよ！！」

「へっ俺様だっておなかがいっばいでうまく動けなかったんだよ！
！次あったらボコボコにしてやるぜ！！」

うん。

もう好きにすればいいと思う。

きつとここにいた全員同じ事を考えていたんじゃないかと俺は思う。それから約2ヶ月俺達は”紅き翼”とケンカをしていた。実際はラカンとナギだけがケンカをしているのであって、他は思い思いに過ごしていた。

俺は詠春さんと一緒に修行したり、ゼクトやアルに魔法を教えるもらったりしていた。

龍ちゃんもほぼ一緒に詠春さんと戦ってみたいといつて仕合いました。興味があるのか俺と一緒に魔法の授業を受けていた。

そんな日が続いたある日、いつものようにラカン達がケンカから戻ってくる。と何故か肩を組んで仲よさそうに帰ってきた。皆して打ち所が悪かったのか？と心配したが、どうやら互いに強さを認め合っていて仲良くなったらしい。そして気がついたら俺達は”紅の翼”に入っていた。

ちなみにナギからの勧誘の言葉はこうだった。

「ラカンから聞いたけど、オメエ達もかなりつえーんだって？だったら俺達と一緒にこねえか？一緒に大暴れしようぜ！！それと後で戦ってみねえか？どれくらいつえーかためしてみてえ……」

なんていうか言葉は微妙なのにどうしてか着いて行きたくなくなるのは、主人公体質なのかそれともカリスマをもっているのか分からないが、これで当初の目的通りに話が進めそうだった。他のメンバーも快く受け入れてくれたのでこれから騒がしくなるとは思うけど楽しくやっついていけそうだと思うた。

.....

それから何日かたった後俺達”紅き翼”はある戦場へと向かった。

…そう原作で”紅き翼”が有名となるグレート＝ブリッジへと

「なあワイの記憶が正しければグレート＝ブリッジって連合のもんやなかつたんか？」

「いえ、龍牙の言う通りですよ。でも帝国側が大規模転移魔法を使って奇襲をし、難攻不落とまでいわれたグレート＝ブリッジを陥落させたんです。」

「それからは連合は後手後手に回ってしもつての、今形勢は帝国側有利になってしまったんじゃ。」

「それでその状況を打開するために私達が呼ばれ、今回の作戦が決まったということだな。」

「今回の作戦…グレート＝ブリッジ奪還作戦か。けどこれは作戦っていいのか？周りで陽動をかけてその隙に俺達が奪還するだけだろ？」

作戦を伝えられたが正直納得できなかった。ただでさえ難攻不落といわれている要塞の防御力もあるのに、それに加え兵力は相手のほうがかなり上ということらしい。いくら陽動をかけるといってもそれだけでだけの兵力がそちらにいくか分かったもんじゃない。これでは俺達に死ねといっているもんだ。

「そうですね。私達のことを信頼していると言われれば聞こえはいいですが、私としてもどうかと思っています。戦況が見えていないのか、それとも…」

「あーそんな難しく考える必要なんてねーよ。ようは俺達が敵を

ぶつ飛ばせばいいことだろ？簡単じゃねーか。俺達は無敵の”紅き翼”だぜ？負けるわけがねー」

「H A H A H A！その通りだぜ。むしろ他のヤツラがいない方が余計な気を使わなくてすむってもんだ。むしろやりやすいぜ。」

二人はそう言っただけで大笑いしている。

これだからバカと言われるんだけど…まあいい所でもあるのか。それにナギ達が言っていることも間違っていない。

どんな作戦だろうと、ようは俺達が成功させればそれでいい事なんだし、難しく考えて体が動かなくなってしまうのもバカらしい。

そう思っていると、他の皆も同じ気持ちなのか仕方が無いなあと思った感じで笑う。

でもその目は真剣味を帯びており、これからやる事の覚悟が出来た目をしていた。

「はあ…バカは気楽でいいな。」

「誰がバカだ！！コイツと一緒にするな！！」

俺がそう呟くと二人してこっちに叫んでくる。まるで息を合わせたように同じ事を言うので思わず吹き出しそうだった。すると、さっきの言葉に引つかかったのかまた二人が言い争いを始める。

「おい。ラカン俺様が何だって？お前と違ってバカじゃねーんだよ。この筋肉バカ」

「はあ？何言っただけなんだ？てめーこそ未だに魔法ほとんど使えないくせに。このバカガキが！！」

『……ぶつとばす!!』

そう言ってお互いに胸倉をつかみ合う。また始まったみたいだ。

「はぁ…だから二人はバカなんだって…」

「そういつたかて、いまさらやん。それに……タケやんもあんま変わらんで？」

「オイオイ…。それを言うなら龍ちゃんだろ？俺はいつも冷静だ。」

「冷静って言葉の意味しつとるか？…それとワイのどこがあいつ等といつしよや!!…」

「ほう…龍ちゃんケンカ売ってんの？」

「そつちこそワイにケンカ売つとるやろ？」

『……表に出やがれ!!』

「戦争する前に龍ちゃんを亡くすなんて、残念だよ。」

「そのキャラは無理やといつとるやんけ。いい加減あきらめや！それとそつくりそのままの言葉返したるわ。…覚悟せいよ。ワイの半分も生きてないクソ餓鬼が!!」

「やめんか!!! 状況を考えてケンカしろ!!」

詠春さんがケンカを止めようと叫ぶが、そんな事関係無い!! 今日こそは俺が二枚目になれることを証明しなくちゃいけないんだ! だから…

『『黙れ！！邪魔すんな！老け顔詠春！！』』

「老け……！！フフフツ………斬る！！」

「ふう…あやつらは。これから戦争しにいって本当にわかつてるのかのう」

「忘れていると思いますよ？ですが…フフフツ」

「なんじゃ？」

「いえ。この方が私達らしいと思ひましてね。」

「わっはっはっは。なるほど。その通りじゃ」

そうして指定された場所へ行くまで俺達はずっとケンカをしていた。皆この後戦争すると分かっていたのか、ただのじゃれあい程度だったが、それでも場所についた時にそこにいた兵達に怪我の心配をされてしまった。

俺達にとってはこんなもの日常茶飯事だったのだが、どうやらそれは普通から見たらありえない域だったらしい。どうやら俺もかなり毒されてしまったようだ。

「もともとやないんか？」

龍ちゃん心を読まないで欲しいな。

.....

.....

「ナギ！そろそろ作戦開始時刻ですよ。」

アルがそう言うのと一瞬にして皆真剣な顔つきになる。

正直俺は戦争をするのが始めてだから怖い気持ちが無いわけじゃない。

するとそんな気持ちを感じ取ったのかそばにいる龍ちゃんが声をかけてくれる。

「タケやん。怖いのは全員いつしよやで？大丈夫やてうち等は強い。んでうちらは誰も死なへん。安心しいや」

どうやら龍ちゃんは俺の心が分かるらしい。

確かに殺し合いをするのは怖い。

だけどそれ以上に怖いのは心を許しあっている仲間が死ぬのが怖い。だから戦争は嫌いだ。

「そういうことじゃ。安心せい。」

「ですね。」

「私の背中を任せられるのは武しかない。お互い助け合えば大丈夫だ。」

「らしくねーなタケル。いつもみたいなクソ度胸どこいったんだ？オメーが負ける？ハッ！こんな奴らにやられるわけがねーだろ？俺様達は最強なんだよ。やられるわけがねー」

「ラカンの言う通りだぜ！俺様達は無敵の”紅き翼”様だ！この世

界で俺達に敵うやつらないんかいやしねーぜ。この”サウザンド・マスター”のナギ様が保証してやる。タケルは負けねえし、俺達も死なねえよ!」

やば!不覚にも泣きそうになった。

ホントこいつ等とダチになってよかった。

こいつ等とこれからもバカやっていく為にもこんな所で負けちゃいられない。

「んー?なんだあ?タケルオメー泣いてやがんのか?おい見るよタケルの奴泣いてるぜ?」

「……ラカン後で急所にマグナム全弾な。しかも下の方の」

「H A H A H A。やっといつものタケルに戻りやがったな。……マグナムは嘘だろ?」

「ふう。わりいな。おかげでようやく負けねえ”覚悟”って奴ができたよ。」

「気にする必要なねーよ。」

「なあタケル嘘だといってくれ!!頼む謝るから!!」

「……ラカン。」

「おお!!龍牙。俺様を助けてくれるのか?」

「よく言うじゃん。諦めが肝心やって」

「ノオオオオオオオオ……！！！」

なんかラカンが叫んでいるけど気にしない。

自業自得だし、まあ無事に生きていたら全弾じゃなくて一発ですましてやるさ。

「んじゃま。そろそろ行くか…オメーラ準備はいいか？」

おっ？ナギまでラカンが無視か？こりゃー敵さんがちょっとかわいそうになつてきた。

『『オウ！！！！』』……オウ」

「よっしや！じゃ行くぞお前ら！！！」

ナギの掛け声と共に俺達は戦場へと突っ込んでいくのだった。

「最初は俺様からいかせてもらっぜ！オラア『千の雷』！！！」

ナギ得意の広域殲滅魔法によって前方にいた戦艦や兵達がいなくなる。

その光景に帝国、連合両方の兵達が驚き一瞬動きを止める。

「どうせ後が無いんだ……派手に暴れさせてもらっぜえええ！！！！
”アデアット”『千の顔を持つ英雄』オラオラオラ！！H A H A H
A！！！！どんどんきやがれええ！！！！」

続いてラカンがナギとのパクティオーによってでてきたアーティファクトを使って剣を次々だし相手に向かって投げる。そしてそのまま出した剣を手に持って敵陣に突っ込んでいく。

ラカンの奴飛ばしてるな。あれが鬼気迫るって言っただろうな…。

「こっちも忘れてもらっては困るのうホレ『雷の暴風』」

「そうですね。」

ラカンの反対側ではゼクトとアルが魔法を放ち次々と相手を倒して行く。

こう見ると魔法ってやっぱりひどいチートだと思う。

「武！余所見をしていると危ないぞ？『真・雷鳴剣』！！」

俺の横では詠春さんが技を放っていた。

ナギの”千の雷”よりは範囲は狭いけど、これも大概だよな。

神鳴流はダテじゃないって所か…。

俺も負けてられないな。

「おっしや。龍ちゃんオブンコンバット戦闘開始だ！」

「任せとき！」

「オン・フィスト・ガン・ペンスリット

”契約に従い我に従え炎の霸王””来れ浄化の炎””燃え盛る大剣”

”ほとばしれよ””ソドムを焼きし火と硫黄””罪ありし物を死の塵に”

”燃える天空””！！””固定””掌握””術式兵装”……………”炎帝”

！！」

「”我名において助けを請わん””その友の名は火の精霊クウ””
我魔力を糧に我に力を示せ”…………”赤王”」

俺達がそう詠唱すると、皆さっきナギが魔法をぶつ放した時と同じように啞然としていた。

まあ仕方が無いか。

俺と龍ちゃんは炎を纏ってそこに佇んでるし、ラカン達曰く威圧感がハンパないらしいからね。

「行くぜ！」クレイジー・ホース” モデル・サラマンダー” ！！
！」

俺はそう言っただけで敵に向かって炎を纏ったガン・ブレットを乱れ撃つ。ガン・ブレットが敵か地面に当たった瞬間大きな爆発がした。

これは”炎帝”時に起こる付加価値だった。直接殴りつければ相手は炎に包まれ、ガン・ブレットなど間接攻撃に当たると爆発するようになっていた。

詠春さん達と修行し、ゼクト達に魔法を見てもらったせいとか、威力が前よりも上がったし何より効率が良くなった。

ゼクト達が言うには、魔力とかを気にせず打ち続けるのはラカンとナギぐらいな物で、普通は自分の限界を知ってから、効率化をはかるそうだ。

俺の場合は特に”感卦法”や”闇の魔法”を使用し、銃闘技を使うと常時消費しているだけではなく、攻撃する際魔法をぶつ放しているのと同じ事らしいのでとても燃費が悪かった。

更に問題なのが、銃闘技の強みである圧倒的な手数のおかげで消費が激しくまた体に負担もかかりやすいそうだ。

なので効率化することで、負担を軽くしようとした結果……何故かすべて一段階力をあげる事に成功した。

まあそれを見た詠春さん達は”理解ができる分バクでは無いが、それでも武装した武はすでに人のレベルではない”と人外の称号をもらった。

”そうは言うけど詠春さん達も大して変わらない”と言ったら自覚

しているようだった。
…とても嫌そうだったけど。

「タケやんとばすなあ。ワイも行くでえ！！爆炎波！！」

隣では龍ちゃんが同じように炎を飛ばして攻撃をしている。

こっちもこっちでかなり強くなったみたいだ。

もともと幻獣は魔法の効率化なんて考えた事も無かったらしく、俺と同じく効率化を試みたら格段に動きが良くなり、そして技の威力も上がった。

なんでもうまく魔力を込めれるようになったそうだ。

そうやって俺達はほぼ無双状態でどんどん敵陣に突っ込みとうとう難攻不落の要塞の前まで来ていた。

「ふむ。……やっかいじゃなコレは」

「……そうですね。」

要塞の真正面についたとたんゼクトとアルが難しい顔をして悩む。

「どうしたんだお師匠。何がやっかいなんだ？」

「ふむ。簡単に言えば魔法障壁がこれでもかって言うくらい張り巡らされておる。」

「なら詠春に斬ってもらえばいいじゃねーか。」

「それが出来ればいいんですが…ここまで巨大な障壁を斬ったことがないでしょう？これ一枚で多分私達が使う障壁最大の二倍は硬い

と思いますよ。それが幾重にも張り巡らされているとすると…詠春はどう思いますか？」

「そうだな…。斬れないことはないと思う。だがそれにはかなり時間がかかるな。もちろん全力でやるがそれでも…大して変わらないと思う。だがそれじゃ駄目なんだろう？」

「その通りじゃ。コレに手間取っている時間は無い。時間を掛け過ぎると敵の増援が来てしまう。そうなたらワシらは良くても他がもたん。まだコレは城門じゃ、その後には制圧作業が待っており。そうなるともうほとんど時間が無いと言ってもいいじゃろ」

「つまりほぼ一発でこれを撃ち破る必要があるわけか。俺達が一斉に攻撃して、攻撃を集中させるのは？」

「それでもたぶん威力がたりないですね。まったく厄介なものです。」

いつものようにかるい感じでアルがそうため息を吐くが、その顔はとても真剣でそれだけで今自分達がやばい状況に陥っている事が分かる。

すると後ろの方で敵と戦っていたラカンが戻ってくる。

「オイ！いよいよやべーぜ？連合が押され始めやがった。このままだともたねえ。」

ラカンがそう状況を皆に伝える。それでもまだ皆の顔は暗いままだった。

どうにかしたいが力が足りないのだ。

必死に頭を回転させて打開策を考えるが一向に思いつかない。

どうしたら…そう皆が思っていた時に武がボソリと呟く。

「……アル？後どれくらいの威力が必要なんだ？」

「え！？…そうですね。ナギー人分の威力でしょうか。それだけあれば大丈夫かと。…でもそれがどうしたんですか？」

「…方法が一つだけある」

『何だつて！？』

そう言う武の目は何かを覚悟した目をしており、そして相棒である龍牙はその目に何処か不安を感じ始めるのであった。

〈我拳は銃なりて・終〉

第八話：グレートブリッジ奪還作戦（後書き）

んーもつともつぽい所で引いてみましたけどどうでしょうか？

あとグレートブリッジを難攻不落にしてみました。

原作見てもそこはかなり重要な場所みただからコレくらいはやらないとって思ったらこんな事に……なぜ俺は途中で自重をしなかったんだ。

紅き翼無双の予定だったのに……んーコレは批判が怖いです。

ただ英雄を名乗るのならコレくらいは苦労して欲しいかなってというのがほんとの気持ちです。

英雄は一日にしてならず！ですね。

さて次回……と言うかこの話の後半はただいま執筆中で明日には出来るかな？って所です。

それでは次回また会いましょう。

第九話・その拳はすべてを貫く(前書き)

お疲れ様です。

遅くなりましてもうしわけありません。次の日に投稿できるとかいつて今日になってしまいました。

まあ言い訳はあとがきで…

それではどうぞー!!

第九話・その拳はすべてを貫く

帝国の兵達の攻撃をかわし、反撃をしながら皆武の方を見る。

この追い詰められる状況で、それを打開する方法があるというのだ。当然の反応だろう。

皆が期待を込めた表情で武を見ている中、一人だけ冷静に武を見つめる者がいた。

龍牙。

武の相棒にして、誰よりも長く武のそばにいた虎。

だからこそ気付いた。…いや気付いてしまったのだ。

武が何かとてつもない事をやろうとしているのを…

そしてそれには自分を投げ出すぐらいの覚悟が必要だということを…

龍牙は必死になって武が何をしようとしているのか考える。

……そしてある結論に達すると、一瞬にして血の気が引き武へと詰め寄った。

「まさか…あかんで。タケヤンそれだけはやったらあかん。アレはまだ完成しとらんやんけ。前つこうた時どうなったか覚えとるやろ！？」

龍牙が今まで見たこともないくらいに取り乱しているのを見て他の面々は驚く。

いつも飄々としているあの龍牙がここまで必死になって止めるのだ。それはつまり…常道な方法ではない。

”紅き翼”の間にえもいえぬ緊張感が漂い始めた。

「でも龍ちゃんもう時間もなし、アレを使うしか方法が無いじゃないか。」

「せやけど…」

「龍ちゃん大丈夫。俺は不可能を可能にする男だぜ？」

「……こんな時までアホいうよるんやから。わった。でもタケヤン死ぬんや無いで？」

武の意思が固いのを知って止められないと分かった龍牙は、そう言
って武のそばから離れる。

それを見ながら笑い、真剣な顔になって皆の方へ顔を向ける。

「皆聞いて欲しい。これから俺はある魔法を使う。それがうまくい
けばナギ一人分の威力は確保できると思う。だけど…」

「だけどなんだよ」

「コレはまだ完成もしてないし、もちろん使いこなせるわけでもな
い。実際に前使おうとしたら扱いきれず結果ひどい重症をおった。」

『！！！！！！』

「しかもコレを使った後は俺はしばらく戦闘不能になる。だけどこ
の状況を打開するためにはもうコレしか手が無いと思う。だから俺
を信じてみてくれないか？」

そう武が言って頭を下げる。

すると皆近くに寄ってきて肩に手を置いた。

「何いってやがる。オメーが信じろって言うなら俺様は信じるぜ？
そんなもん頭下げて言われる必要なかねーよ。」

「私もだ。今から何をやるか想像はつかんが、それでも武ならでき
る！そう信じている！だから思いっきりやれ」

「お主とおると本当に退屈せんのう。分かった。その代わり絶対に
成功させるんじゃぞ？その後のことは任せておけ」

「そうですね。私も信じますよ。後のことは任せてください。貴方
は成功させる事だけを考えてくれればいいですよ。」

「何言つてやがる。ダチの言う事しんじねーで何を信じるってんだ。
それにうまくいかなくても俺様がケツを拭いてやるぜ。…それが嫌
ならせつかくの見せ場だ！絶対に成功させるよ！！」

「お前ら……よっしゃ。いつちよやってやるぜ！！」

皆からの信頼に答えるためにも武は不安でいっぱい心を吹き飛ば
すかのように大声を上げて気合を入れる。そして気合を入れ直した
所で皆の目を見てこれからのことを説明する。

「それでなんだけど…まずこの魔法はちよつと時間が掛かるんだ。
それまで俺を守って欲しい。それから俺が合図したら一斉に要塞に
向かって攻撃して欲しい。」

『まかせろ！！』

「たのむな。…さあ俺の一世一代の見せ場だ！派手にいくぜえ！！
ブライムファイアード
！！闘火火薬点火！！」

そう武が言つと、武の周りに今まで感じた事の無いような力が充満

し始めた。

（龍牙 side）

タケヤンがあ魔法を使う。

タケヤンが考えて、そしてきつとタケヤンしか使えない究極の魔法を…

「龍牙？貴方はタケルが今から使うアレの事を知っているんですか？」

「……しつとる。アレはな、ワイらがまだラカンとあってない頃、タケヤンが試してみたい魔法がある言うたのが始まりやった。その時はワイもどんな魔法やるってワクワクしながら見とったんやけどな？すぐさまそのワクワク感はなくのーて、次に感じたのはとてつもない恐怖やった。」

「何をしようとしたんじゃ？」

「……”感卦法”と”闇の魔法”の融合や」

『……………』

驚いとるな。

そらそうやる。普通そんな事考えへん。二つともそれぞれ最上位にある魔法や。それをあわせるなんて出来ると思うほうがおかしいねん。でもタケヤンにはそれが出来るんや。

「あ…ありません。そんな事できるわけが無い…！」

「そうじゃ。そもそも”感卦法”自体が”気”と”魔力”の融合じや。それに更に”闇の魔法”を融合させるじやと…そんな事…出来るのは神…いや神でも無理じゃ…!!」

いつも冷静なアルはんやゼクトはんが取り乱すのも当然や。でも今からそれをやる。だからワイはタケやんを止めたんや。

「ワイもそう思った。けどな…タケやんはそれを形にする事が出来た。やけど…」

「なんと…」

「バグ…と言う言葉ではすまんぞ」

「やけど…その力は大きすぎた。タケやんが言うにはうまく行き過ぎてまったとか言ってたけどな。だからその力が暴走して何時もなら怪我しても次の日にはピンピンしとるタケやんでも一週間寝たきりになってもうた。」

「……………」

ああ、皆黙ってもうた。

「しゃあないけどな。でも皆忘れとらんか？タケやんはなんて言った？そしてうち等はなんて答えたんや？」

「やけどワイはタケやんなら制御できると信じとる！あのアホは確かに変な所で決めきれへんアホンダラやけど、ワイらの信用を裏切る真似は絶対せいへんからな…!!」

「…そ、そうだな。タケルはぜってー成功させる」

「俺様は最初から疑ってねーぜ。」

「…そうだな。武はやる男だ」

「フフフツ…楽しみになってきましたよ。そんな魔法が拝めるなんてね。」

「長く生きたワシでも考えた事なかったわ。…ワシもまだまだじや
の」

皆ええやつや。

さて…ワイの相棒が命かけてがんばっとる。

ならワイは？……もちろんやる事はきまっとる。

「おおお前ら！誰に断ってこっちに攻撃しようとしとんねん。タケ
やんの邪魔はさせへんで？どうしても邪魔したいんやったらな…
ワイを倒してからにせんかい！！」

信じとるでタケヤン

「ワイは”炎帝”を守る”赤王”じゃ！！命捨てる覚悟が出来たや
つらからかかってこんかい！！！！」

〈龍牙side終〉

〈武side〉

ふつ…さて始めるか。

” オン・フィスト・ガン・ペンスリット ”

” 我詠うは精霊の詩 ” 我奏でるは命の炎 ”

俺の足元に大きな魔方陣が浮かび上がる。

よし、前までならすでにここできつかったけどゼクト達のおかげでスムーズにいった。

本当に感謝しないとな。

” 二つは交わりすべてを照らす光となる ” ” 固定 ”

これで感卦法の準備は出来た。次は…

” 我願うは終焉の炎 ” 我掴むは精霊の理 ”

ぐぐぐぐ… きっつー魔力の効率化はかってもこの重さかよ。体の

中で魔力が暴れてやがる。

ちよっとはおとなしくしてくれよ。

” 二つは重なりすべてを飲み込む闇となる ” ” 固定 ”

ハア… ハア… よし。さて最後の仕上げだ。

前回はここで俺駄目だった。

今なら分かる。

あの時は” 感卦法 ” と同じように自分を無にすればいいと勝手に思っていた。

でもそれは間違いなんだ。

” 受け入れる ” じゃなくて ” 受け止める ”

その為には自分の意思を強く持たないといけない。

自分が空っぽだったら、受け止める事なんて出来るわけが無いよな。

でも今は違つ。

俺を心配してくれる相棒がいる。

俺を信じてくれる仲間がいる。

そんないいやつらのためにも俺は”力”が欲しい

すべてを守り、すべてを撃ち貫く”力”が…

だから”力”を怖がるな！

すべてを受け止める！！

俺ならできる！！

”光と闇すべてはわが身に宿り” すべてを撃ち貫く力となれ！！”

俺の気持ちを最後に詠い右手と左手を合わせて合掌の形をとる。

コレですべての詠唱は終わった。

前やった時はこの後力が暴れて制御できなかったのだが、今はまるで何も感じない。

失敗したのか…？

そう思った瞬間、丹田の辺りからすごい力が巻き起こり俺を優しく包み込んでくれる。

その力を感じて俺は成功したことを確認し、そして納得した。

なるほど…。神が”然”と名づけた理由がわかったきがする。

”然”とは”自然”…自然はすべての源であり、すべてを表す言葉。つまりはそういう”力”なんだと…

自分で考えといてなんだけど…俺やばい魔法考えちゃったわけだ。

……まあとにかく今は目の前のことに集中！

時間も限られてるし、行動しないとね！

〈武side終〉

武が”然”を成功させた瞬間”紅き翼”のメンバーは思わず手を止めてしまった。

”紅き翼”でコレなのだから他の人達は動けるはずも無い。

武の姿は先ほどとあまり変わっていない、ただ炎の色が違っていた。先ほどまであんなに真っ赤に燃え上がっていた炎はオレンジ色の澄んだ色をしてた。

それは何処か頼りないように見えるのに、何故かとても心強く感じる。

そして何より違ったのはその圧倒的な存在感と武から発せられる力

”炎帝”：それはだれが呟いた言葉だっただろうか。

その呟きは全員に響き渡る。

今までも”炎帝”の名に相応しかったが、この姿こそ本当の”炎帝”火を制し、火を従え、火とともに存在する。

炎の支配者に相応しい姿だった。

「皆！頼む！！」

そう武が叫んだ瞬間、”紅き翼”はすぐさま詠唱を始めたり気を溜めたりした。

その顔は皆笑顔で笑っていた。

「クククツ…あーおもしれえおもしれえ！！こんなの魅せられたらいやでも力が入っちまうぜ！！なんだよそれ！俺様と戦う前からあっただあ？なら今度はその状態で戦おうぜ！なあタケルよお！！」

「あーはっはっはっは！！タケル何で今までそんなおもしれえもん

隠してたんだよ！今オメーと凄くケンカがしてえ！！だからもうこんな戦いは止めだ！一気に終わらしてやるぜ！！」

「はははっやってくれる。私は今すばらしいものを見てるよ。そのお礼といっではなんだけど最高の技を魅せてあげるよ」

「フフフツ…私も柄にも無く興奮してますよ。さて早くこんな障壁なんか壊してその魔法についていろいろ教えてもらいましょう！」

「あー笑みがとまらない。もうこんな戦場なんか興味が失せたわ。早く終わらしてしまおう。時間は有限じゃ。効率よく使わねばの」

「あははは！やった！やったやん！さすがワイの相棒や！！それにしても注目浴びすぎやん。…あかんな。タケやんのボロがでる前にさっさと決めな。ってことですまんけど覚悟してや？」

敵側がやっとの事で意識を取り戻し、阻止しようと動こうとしたがもう遅い。

「ぶつとべ！！」ラカンインパクト！！」

「くらええ！！」千の雷！！」

「神鳴流究極奥義！滅殺斬空斬魔閃！！」

「潰れなさい！！」

「『千の雷』！！」

「いくでえ！！」火迦具槌！！」

ナギとアル、ゼクトの魔法で大爆発を起こし障壁を何枚か破る。
その後にはラカン、詠春、龍牙が突っ込み更に追い討ちを掛けると更に障壁が破れた。

だが、さすが難攻不落といわれた要塞。

それでもまだまだ数枚の障壁が張られていた。

しかしそれは”紅き翼”も分かっていた事。

でも誰一人悲観してなかった。

なぜならまだオオトリがいる。

銃弾の拳を持ち、真に”炎帝”名に相応しい姿となった男：伊達武
彼が力を溜めて待っていたのだから。

「さあ仕上げだ!!」

そう言つて武は右腕をハンマーコックする。

するといつものように腕は鉛色に変色していくが、その腕の周りには炎がまるで吸い寄せられるかのように集まり螺旋を描いていく。

更に鉛色から青銅色に色が変わってくる頃には炎も同じようにオレンジ色から青色へと変化をしていき、右腕の周りを高速に回転していく。

「いくぜ!!!」

そう言つてその場から飛び出しナギ達が壊した障壁の所へ突っ込んでいく。

その間に皆はその場から離れ様子をつかがい、これから来るであろう衝撃に準備をする。

「撃ち破れ！！」メガフレア・バレット！！」

武と障壁がぶつかった瞬間辺りにはすさまじい衝撃波と熱風がまきをこり、近くにいた敵、見方問わず巻き込んでいく。

ナギ達は衝撃に備えていたため飛ばされずにすんでいたが、そのあまりにもすさまじい威力に目を見開いていた。

「すっげーな。アレがタケルの本気ってやつか…。」

「ええ…。しかも見てくださいアレを」

アルがそう言つて空を指差すと、そこには二本の火の線が武の突っ込んでいった所まで伸びており、空に火の道が出来ているようになっていた。

「アレを見ただけでもすさまじい力だったという事が分かるの。」

「そっやな…。ってそんな事よりタケヤんは？」

ゼクトに同意しながらも龍牙は武の事が心配になり、爆炎の中に居るのであるう武を目を凝らして探す。しばらくすると爆炎が晴れてきて人影が見えた。

それを見て”紅き翼”の面々は成功した喜びと、武が無事な事にはっと胸をなげ下ろす。

すると武が急にぐらつき方膝を付いた。

それを見た”紅き翼”は一斉に武の下へと移動する。

そして心配しながら武の顔を覗き込むと、武は笑っていた。

「ははは…。皆何とかやったよ。でも…さすがに頑張りすぎたわ。」

「あほ…。当たり前や。それより大丈夫なんか？」

「龍ちゃん…。なんとか大丈夫みただけど。さすがに今日はもう動けない…。かな？」

「お疲れ武。後は私達にまかせておけ」

「そうだけ。あとはパツパツと俺達が片付けてやるよ。」

「そうじゃ。」

その言葉を聞いて武はフツッと笑いそのまま目をつぶる。

「タケヤン!？」

「……心配しなくていいですよ龍牙。疲れて眠ってるだけです。」

「そ…そっか…。このアホは人に心配ばかりかけよってからに…」

「そうじゃな。じゃがそのおかげでワシらの勝ちが決まったようなものじゃ。…本当にたいした男じゃよ。」

「……よし。師匠、アル、それから龍牙はここにいて武の様子を見ていてくれ。詠春、ラカン、俺達はさっさと制圧しちまおうぜ?」

「おう。」

「わかった。」

こうしてグレート＝ブリッジ奪還作戦は、“紅き翼”の活躍により

連合の勝利で幕を閉じた。

この戦いのおかげで、“紅き翼”の名は大陸中に知れ渡り、一躍有名になる。

そしてそのあまりにもでたらめな強さに、畏怖と親愛を込めて二つ名をつけられる事となった。

もちろん武も同様で、それ以降こう呼ばれる事となる

『銃神』・『炎帝』・『空を紅く染め上げる者』と

この事実を武が知り、頭を抱える事になるのは、戦いからしばらくたった後だった。

く我拳は銃なりて・終く

第九話・その拳はすべてを貫く（後書き）

オリジナル技

『メガフレア・バレット』

今回遅くなった最大の原因です。イメージは『ギャリックマグナム』ですね。

ただ、この名前のせいで凄く悩みました。”ギャリック”って人名なんで使えないんですね。しかもマグナムっていうのもなんか違った感じがして…

そこで散々悩んだあげく、この名前になりました。炎の最高峰と考えた時に”バハムート”さんを思い浮かべまして、そこから後は”バレットM82”通称対戦車ライフルのバレットを組み合わせた。直接殴りつけるのですが、射程が長いのと威力がありえないほど強い設定なのでコレを使わせていただきました。

あと、作者はこのバレットは形が大好きです。

えーこれにてグレートブリッジは終りとなります。

この後ですが、ちょっと小話的なものを入れたいなーと思っっています。

内容はガトウ・タカミチ介入とガトウと武の語り合い？です。

お互い拳を使うので絡ませていきたいのですが、対戦させたほうがいいんですかね？そこは今迷い中です。

あとちょっと皆様に意見を聞きたい事がありました…

タカミチ君なんですが、どうしましょう？

実は今二つアイデアがうかんでおります…

- 1．原作通りガトウがタカミチを鍛える（ガトウのみ師匠となる）
- 2．ガトウと一緒に武もタカミチを鍛える（銃闘技のノウハウをタカミチに伝授。タカミチ強化フラグ）

以上です。

詠春も才り技だしたので、タカミチも出したいなと思ってたらこんな事思いつきました。

皆様の意見をお待ちしております。

感想もいただけるとうれしいです

それではまた次回お会いしましょう。

小話1：音速の拳とその弟子。（前書き）

お疲れ様です。

遅くなつてすみませんでした。実家に帰ってたんですが、そこでは執筆活動できない上に、データも無いので…

やっと自宅に帰って何とか書き上げて見ました。

今回は前予告したように小話です。

それではどうぞ

小話1：音速の拳とその弟子。

「……ん。……ここは……」

このフカフカした感触は多分ベットだと思っけど、ここはどこだ？
確か”然”を成功させて要塞の障壁をぶっこわした事までは覚えて
いるんだけど……。

……まあ考えても分からないか。
とりあえずは……

「…知らないてんじ」

「いわせるかい！……！」

ドスン……！

「んげっ！……！」

「いってー……。何するんだよ龍ちゃん」

「何するやあらへんわ！お前今危険な事言おうとしたやろ！」

「いやでも、これは言わないと……」

「ダメや！」

「…龍ちゃんめ……。大体俺が何言おうとしたか知ってるのかよ？」

「知らん」

「だったらなんで!？」

「知らんけど、なんやどうしてもそれは言わしたらあかんって変な使命感を感じてな」

「どうやら、コレはこの世界の規則に反するらしい。」

「皆絶対言ってたから俺も言いたかったのに……」

「まあ仕方が無い……と今は割り切って、機会があったら今度は絶対に言い切ろう。」

「なんや変なこと考えてへんか？」

「!!キ…キノセイダヨ」

「……まあええ。それよりも今自分の状況わかつとるか？」

「いや。説明してくれるとありがたい。」

「わった。んじゃな……」

龍ちゃんの話によると、あの戦いから一週間はたっているらしい。

その間俺はずっと眠り続けていて、おこそうとしてもまるで無反応だったそうさ。

ゼクトやアルが言うには、【”然”を成功させるために神経にかなりの負担がかかり、なおかつあの状況下の中でのプレッシャーが一気に俺に襲い、それに加えて体を酷使した疲労が重なり一種の冬眠状態になっているのさろう】のこと。

「なんかかつこわるなあ……」

「それは贅沢やと思うで？前は体中傷だらけになって死ぬ一步前やったんやから。それに比べれば全然ましやる？」

「まあそうだね。」

神様がくれた手紙にはひどい筋肉痛ぐらいと書いてあったんだけど…それは多分まだ俺がうまく扱えてないせいなんだろうな。

それから龍ちゃんが今俺がいる場所の事についてを教えてくださいました。龍ちゃんの話によるとここは連合の本拠地がある町の宿屋らしい。

俺が倒れた後、無事に作戦は成功して戦いは終わったらしいのだが、その後連合のお偉いさんが来て俺達を本拠地に呼んだらしい。

皆も疲弊してて、早く休みたかったらしく二つ返事で了承してここに来たそうだ。

もちろん宿代はタダ。

俺達は連合では英雄扱いになっており、メシとかも頼めば用意してくれるらしい。

まさに居たせりつくせり状況なのだそうだ。

「…なるほど。大体今俺達が置かれている状況は把握した。それで？他のやつらはどうしたんだ？」

「ナギとアル、詠春はお偉いさんの所にいっとる。ラカンは酒飲みに出かけてゼクトはんは町をぶらぶらしとるんや無いかな？」

「なるほど。じゃあ俺も…」

「アホか！！！」

バシーン！！

「いてえ！！お前さっきまで寝込んでた奴になんて仕打ちを…」

「さっきまで寝込んでたんやから皆が返って来るまでおとなしゅせい！！」

「えー」

「えーやない。タダでさえ寝たきりで体力落ちとるんや。無理すなや」

「分かったよ。」

龍ちゃんに言われて素直にベッドに寝転がる。

さすがに今回はかなり心配をかけたからこんな状況の時くらいは言う事を聞いておこう。

それから皆が帰ってくるまで龍ちゃんと一緒にゴロゴロしながらこれからどうするかを考えていた。

.....

「お！？やつと起きたか」

「体の方はもう大丈夫なのかい？」

「……どこも異常はなさそうですね。」

「まったく。年寄りに心配をかけさすんじゃないぞ。」

「H A H A H A。起きたなら一緒に酒のみにいこうぜ？さっき良い店見つけたんだよ」

皆が帰ってきて俺が起きているのを見ると皆一斉に声を掛けてくれる。

その顔はどこかほっとしているような表情をしていて、それだけでも申し訳なく思う。

「なんか心配かけたみたいでごめん。でももう大丈夫だから」

そう俺が言っていると皆笑顔になって、【気にすんな】って返事を返してくれた。

そのせいでちょっとウルツツときて、必死になってそれをごまかしていた。

たぶん皆にはばれてるとは思っけどね。

「あ、そういえばさっきから気になってただけど、ナギ達の後ろにいる人達は誰？」

「あ、そやさやワイもそれ思ってたんや。誰や？」

俺と龍ちゃんがそう疑問を投げかけると、ナギはその二人を俺達の前に出して紹介する。

「ああこいつらか。こいつらは…」

「まで。自己紹介ぐらいは俺から言おう。俺の名前はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ。訳あって今日から”紅き翼”に入ることになった。よろしく頼む」

「その弟子の高畑・T・タカミチです。タカミチって呼んで下さい」
これがあのガトウか。そういえばこの時期から一緒に行動するようになるんだっけ。それにしても…んーナイスダンディ。俺も歳とつたらこんなふうになりたい。
それとタカミチか…。この時はまだ子供なんだよな。それにしても…こんな純情そうな子が原作開始時にはあれだけ老け顔になるんだから…。よし。タカミチにも魔法球で歳をとらない指輪作ってやるう。なんかすごいかわいそうになってきた。

「ふーん。そうなんか。…それで訳ってなんや？」

「それについては私から説明しましょう。簡単に言うなら私達と連合を結ぶパイプ役ですね。先の戦いで私達の力の大きさにやっと気付いて直接連絡が取れるようにしたいそうです。まあこちらとしてもいろいろ情報を流してもらおう予定なので損は無いですよ。」

なるほど…と俺と龍ちゃんは頷く。
まあ他にも監視とかいろいろ理由はあるんだろうけど、まあそれはそれ。

とりあえず今は新しい仲間を歓迎しよう。

「タケル・ダテだ。よろしく」

そう言って右手を差し出すと、あっちも同じように手を出して握手をする。

「よろしくたのむ。」

「タカミチもな」

「は…はい！よ…よろしくお願いします。」

なぜか声が震えてたんだけど、大丈夫なのか？

「ああ。タカミチはお前さんを尊敬しててな。緊張してしまっているのさ」

「し…師匠！！」

「はっはっは。そんな緊張しなくても。俺は別にすごい人なんかじゃないぞ？」

「そんな事ありません！あ…いや。大きい声を上げてすみません」

「別にいいさ。ま、慕ってくれるのはうれしい。これからよろしくな？」

「はい！」

そう言っただけでタカミチに笑いかけるとタカミチも嬉しそうに笑っていた。

「んじゃ。タケルが目覚めた祝いと、”紅き翼”に新しい仲間が入った祝いもかねてパーっとさわごうぜー！」

そうナギがしめて俺達はさっきラカンが言った酒場へ移動するのだった。

.....

酒場に移動して、早速乾杯をする。ラカンオススメの酒場だけあってお酒も美味しく皆それぞれ思い思いに飲んでいく。そんな中俺は適当にラカン達から逃れると、アルとゼクトが飲んでいる場所へと移動する。理由は簡単。これからのことについてだ。

「ゼクト。アル。」

「ん？なんじゃラカン達はいいのか？」

「ええ…。貴方もお酒好きでしょうに。」

「まあそうなんだけど、本格的に酔っちまう前にちょっと相談ごとがあつてな。」

「ふむ。では聞こう」

そう言つて飲もうとしていた酒をテーブルに置くと聞く体勢をとつてくれた。

「それで相談とは一体なんですか？」

「うん。二人に相談つて言うかお願いごとなんだが、今度”然”の修行付き合つてくれないかな。」

「ほう。」

「これはこれは、なんとも面白そうな話ですね。」

俺がそう言うと、二人は興味津々といった感じで俺の顔を見てくる。

「じゃが”然”はワシらも初めて見る魔法じゃ。うまくアドバイスなんかできんぞ？」

「それなんだけど、”然”を成功させてからいろいろわかった事があるんだ。アレは確かに俺しか出来ない魔法だと思うけど、でも魔法は魔法なんだよ。根本的なことは何一つ変わってない」

「ふむ。つまりは私達に魔法を教えて欲しいと？」

「そうだね。まあ今までもちよくちよく教えてもらったけど今度は詠唱とかじゃなくてもっと根本的で基本的な事を教えて欲しいんだ。」

「根本的で基本的となると…魔法とは何かとかそういう話になるのかの？」

「んー哲学的なものじゃないんだよな。なんていうかどうやって魔法を発動させているのかとか的確なイメージの仕方とかかな。そこから辺俺曖昧なんだよね。」

「ああ。言いたいことは大体分かりましたよ。タケルは今まで感覚的にやっていた魔法に明確な芯みたいなのがほしいという事ですね？」

「そうなんだよね。今のままだと”然”をうまく扱えない。感覚的にやっているとどうしても曖昧な部分が出来て制御しきれないんだ。」

「なるほどのう。それならワシらでもアドバイスできるの。分かった明日からでも修行に付き合おう」

「ええ。ただ対価と言ってはなんなんですけど”然”についている話が聞きたいですね。」

「別にかまわないけど話せる事なんて少ないぞ？」

「別にいいですよ。」

「分かった。それじゃよろしくたのむ」

こうして俺はゼクトとアルに魔法を覚えてもらえる事になった。

使ってみてわかった事だけど、”然”はかなりインテリな魔法だと思ふ。すべての割合を均等にしないと発動できないし、発動できても効率よく使わないと戦闘では危なっかしくて使う事なんか出来ない。更にはその反動が大きすぎるからそれも何とかしないといけない。

こう考えるとこの魔法はデメリットが多すぎるな。まあそれを超えるくらいのメリットがあるのも事実。早く使いこなせるようにならないとな。

「お？タケルなにそっちで難しそうな話をしてんだよ。ちょっとこっちに来てくれ。」

いつの間にか近くにナギが来ており無理やりラカン達がいる所に連れて行くこうとする。

「ちよっ！まだ俺アル達と話してんだけど？」

そう言つては見たけど、ナギはそれをまるで聞いていないかのよう
に無視をして腕を掴んでラカン達の方へ引きずっていった。

ナギに引きずられてラカン達の所に言つてみるとそこには酒を飲んで
テンションが高かったはずなのに静かになつていて皆こっちを見
てくる。

「…で？一体なんのようなの？」

「すまないな武。実は今日から入ることになつたガトウの力試しを
しようつて話しになつたんだよ。」

「はっ？一体どうやったらそんな話に…いやいやまあそれはいいと
しても、何でそれで俺が呼ばれるわけ？」

「いやな。どうせなら俺様が戦いたかつただけだよ。なんかタカ
ミチの奴がタケルが戦っている所を生で見たいとか言い出してな。
それならタケルにやつてもらおうつて話になつたわけだ。」

タカミチ…なんて事を言つてくれたんだ。俺を慕ってくれるのはう
れしいんだが、そんな事言つてくれるなよ。おかげで”然”の修行
に集中できねーじゃねーか。しかもまだ俺完全に直つたわけじゃな
いんだけど？

「いやーそれは無理じゃないかな？第一まだ俺はまだ完全に治つ
てないし、それに時間ないだろ？これからもつと俺達コキ使われる
事決定しているだろうし。俺も修行したいし」

こう言つとけば大丈夫だろ。ただでさえ修行に集中しないとイケな
いし、何より戦いたくない。ガトウが使う技は知ってる。アレは正
直相性が悪いんだよ。銃闘技は全距離対応型だけど、それでもやっ

ぱり得意な距離は決まってる。近・中距離だ。だけどガトウが使う”居合い拳”は中・遠距離を得意としてて、しかも呼び動作無し、気配も感じにくい。おまけに連射が出来る。こんな相手とどう戦えと？どう考えても俺が被弾覚悟で突っ込むしか方法の無い未来しか見えない。

だから嫌だ。

そんな事を考えていると、今度はナギが会話に入ってくる。

「そう言うなよ。さっき龍牙から聞いたけど、お前魔法球持ってるんだって？だつたらそこに入ってやればいいじゃねーか。」

龍牙キサマなんてことを！！

俺は龍牙を睨みつけると、器用に前足を重ねて俺に謝ってくる。

はあ…つまり俺に逃げ場はなくなつたって事なのかな？

「う…確かにもってるけど。………わかつたよ。ガトウと戦うそれでいいんだろ？はあ…」

「そこまで嫌がられると俺としてもあまりいい気分じゃないんだがな。」

「いや…。ガトウは悪くないし、別に本気で嫌がつてる訳でもないんだよ。ただちよつと集中したい事があつてね。正直魔法球で修行するのは反則だと思ってるし、なにより…」

そう言つてラカンとナギの方をチラッと見る。

「しっかし、まさかタケルが魔法球持ってたなんてな。でもこれですべてもお前たちと本気でケンカができるぜ！」

「ホントだよな。俺様達がマジでケンカするとなると場所が限られるし、今の状況じゃ怪我なんてできねーからな。タケルの魔法球があれば場所も時間も確保できたも当然だぜ。」

ああ、やっぱりそのつもりなのね。

そうなるだろうと分かってたけど、それでも泣きそうだ。誰がその後を修復すると思ってたんだ。

そう思ってたため息を吐くと、ガトウが何かを察してくれたようで、凄く申し訳無さそうな目をして肩を叩いてくれる。

「…悪かった。修復の手伝いは出来ないが、いつでも相談や愚痴に付き合っつてやる。…タバコ吸うか？」

更に詠春さんまでこっちに来てガトウと同じく肩に手を置いて同情するような目で見ってくる。

「私も付き合っつよ。あのバカ達が無茶しないように私が見張っつておく。だから…その……すまない。」

ガトウと詠春さんの優しさが今は痛いです。

こうして俺はガトウと戦っつ事になり、しかもナギとラカンに魔法球のことが知られてしまい、疲れているのに後処理することが決定した。

ああ…これが背中がすすけている感じなのか。それとも真っ白に燃え尽きた状況か？

とにかくそんな気持ちを始めて味わっつたけど……これ絶望っつて奴なんじゃね？

「あ…あの？龍牙さん。僕何か悪い事していましたか？」

「そうやな…悪いっちゃ悪いこと言ったかも知れんけど、多分一番はワイやるつな。」

「そうですか…。」

「まあそんな気にせんでええで？なんだかんだ言ってもタケやんは優しいから許してくれるわ。だけど…。」

「だけど？」

「タケやんの機嫌取りしよか？タケやんの未来を労わる意味も込めて」

「そんなんでいいんですか？」

「わからん。でもしんよりましやろ？」

「そうですね…。」

く我拳は銃なりて・終く

小話1：音速の拳とその弟子。（後書き）

今回はいかがだったでしょうか？

書くことが多くてうまくまとめられていたか心配です。

あと一話小話が続くと思います。

次回はガトウVSタケルとなります。

居合い拳との差別化。大変ですが頑張ります。

それと以前皆様にアンケートをとりましたが、それももう少しだけ延長します。

期限は明後日までです。

それではまた次回お会いしましょう。

小話2：戦い…そして決意（前書き）

遅くなりました。

やっと自分の花粉症の季節が終り体調が戻ってきました。
ともかく小話2。楽しんでもらえればうれしいです。

小話2：戦い…そして決意

あの飲み会より一日がたち、俺は影にしまっておいた魔法球を取り出し皆を招待した。

俺が影魔法を使えることを知らなかったらしく驚いてはいたが、ゼクトやアルなんかは何処か納得していた。

「闇の魔法を扱える。つまりは闇の素養を持っているということじゃ。ならばコレくらいは出来て不思議ではない、むしろ当然じゃろ」

「ええ。それにこの魔法は便利ですからね。もっと修練すれば影を自由に行き来できますし、そうじゃなくてもモノを保管するには最適。せつかく素養があるのですから覚ええない方が損というものですよ。」

「だそうだ。」

実際荷物の保管場所にいろいろ考えなくてすむのでこの魔法は重宝している。

他にも錬金の素材とかも入れてあり一度整理しないとイケないだろう。

さてそんな感じで皆魔法球の中に入ったのだが、まず誰よりもはしやいだのが意外な事に詠春さんだった。

「これはいいなあ。すごい癒されるよ。日本の風景そのままだ。別に魔法世界が嫌いなわけじゃないけど、やっぱり生まれ育った景色が一番落ち着く。ここにはちよくちよく邪魔させてもらいたいね。」

そう言ってそこら辺を散策し始めた。

俺の魔法球の中は純和風の世界となっており、少し大きな武家屋敷に竹林。近くには滝と川が流れている。遠くには山や海があるのだが、かなりの距離があるため家の近くに作った魔方陣を利用して移動できる。

魔方陣は全部で3つ。

一つ目は険しい山と崖がある場所。

二つ目は海の砂浜。

三つ目は年中雪が積もっている山の中腹。

どれも修行と癒しを目的として俺の想像で作ったものだ。

時間が出来たらもう一つぐらい増やそうかなとも考えてる。

あくまで時間が出来たらの話なのだが…。

それはともかくまず皆を武家屋敷に呼んでお茶をだす。

そしてこれからのことについて話した。

「さて招待したけどまずこれからどうしようか？」

「そんなの決まってるじゃねーかタケルとガトウが戦うんだろ？」

「はあ…ナギよ。タケルはまだ完全に調子はもどっておらん。そんな状態で戦わせるのか？」

「う…じゃあどうすればいいんだよ。」

「そうですね…。ここは魔法球の中ですからそこまで時間を気にする必要は無いでしょう。まずは全員日ごろの疲れをとったり各々好きな事をして潰してタケルの体調が完全に戻ったら勝負をしたらどうですか？」

「俺はそれでかまわんよ。正直最近働きづめでまともに休んでも無かったし、それにタカミチの修行を見てやりたいしな」

「師匠…ありがとうございます。」

「私もそれが良いと思う。これからどんどん戦争が激しくなってくるだろうし、まともに休めるのも今のうちだけだ。」

「そりゃそうかもしれないな。だが詠春よ。休みたければタケルに魔法球出してもらえればいいんじゃないか？」

「それは難しいだろ。今は外にある魔法球の周りに強力な結界や障壁。更には認識障害の魔法をかけて隠している状態だ。今は比較的安全な場所でもコレだけ警戒してるんだ。他の場所だとコレだけではすまないだろう。戦争中には使えないよ。」

「そうやでラカン。コレは無いものとして考えた方がええ。それにこの中は外の世界より時間が早く進む。つまりや…外の世界より何倍も歳をとることになるんじゃないか？ワイはかまわんけど、嫌やる？」

「さすがに歳はとりたくねーな。」

まあ歳については魔法具をつくれれば心配は無いんだけど、それは言わないでおこう。今の状態で魔法具なんか渡したら絶対にここに入り浸るだろうから。

「じゃさっきアルが言ったようにしよう。それでタケルは何時ごろ全快するんだ？」

「んー正直俺にもわかんないけど、そこまで時間掛からないと思うよ？」

「ふむ。ワシもその意見に同感じゃ。もう肉体的には問題ない。後は魔力と気が戻ればいいだけじゃ。そうじゃのう……あと2〜3日といった所か」

「うし！じゃ3日後ガトウとタケルが戦ってその時に出来た傷次第で外に帰る時期を決めることにするか。」

「ええ。ちなみに時間差はどれくらいなのですか？」

「今はあつちの1時間がこっちの2日だね。コレは設定をいろいろ変えることができるよ」

「わかりました。やっぱり便利なものですね。魔法球とは……」

「じゃ。皆解散！！」

最後にナギがそうしめて解散する事になった。

早速ナギとラカンは探検してくるとか言って別の場所へ行き、ガトウとタカミチは竹林の中で修行をするらしい。

詠春はしばらくはここでボーっとして、その後滝に打たれてくるらしい。

そして俺はと言うと、アルとゼクトに早速魔法について教えてもらうことにした。

龍ちゃんもどうやら一緒に聞けらしい。

さすがに魔法は使わないけど座学だって立派な修行。

久しぶりに学生時代に戻った感じがして何処か懐かしい感じがした。

.....
.....
.....

・
・
そして約束の日がやってきた。

武家屋敷から少し歩いて、滝がある所で武とガトウは対峙していた。ここは少し場が開けていて仕合したり、鍛錬するのには丁度よく、武もよくここを利用していた。

そして武達から少し離れた所ではおなじみのメンバーがそろっており試合が始まるのを今か、今かと心待ちにしていた。

「待たせてごめん。」

「いやいや。こっちこそ無理をいってすまない。それに疲れた体も休めたし、タカミチの修行も見れたからとても有意義な時間だったよ。」

「それならよかった。……じゃはじめようか」

「ああ」

そう言つて二人はお互いに構えあう。

くしくもその構えは似ており、唯一違う所といえばポケットに手を入れているかいないかぐらいである。

「なあ詠春。ガトウの構え……っていうかポケットに手を入れてて大丈夫なのか？」

「私に聞かれても困るぞナギ。だが……ふむ。わざわざポケットに手を入れているのだからそれなりに理由があるのだろうが……ちよつと予想がつかないな。」

ガトウの独特の構えに皆困惑しているが、弟子であるタカミチは当

然その理由をしっており内心ほくそえむ。皆がどんな反応をするのか楽しみで仕方が無いといった感じだった。

「……こないんですか？」

「君こそ向かってこないのかい？」

「まあ…攻めても良いんだけど。ここはガトウさんの為の戦いだろ？だから先手は譲りますよ」

「俺より歳は低いくせにいうねえ…。でもお言葉に甘えさせてもらうか。」

ガトウがそう言った瞬間、武とガトウの間の空間から”パンッ”という音が聞こえ空気が弾ける。

「……これはすげえぜ。…タケルに譲るんじゃないかな。」

「ラカンは見えたんか！？ワイにはガトウの手がブレたようにしか見えなかったんやけど？」

「ワシもじゃ。」

「魔力を感じなかったので魔法じゃないと思いますが…なんででしょうか？」

「ガトウはポケットから高速で手を出したただけだ。まあ多分気かなんかで強化してるんだろうが、俺様でもかなり神経を使ってないと視覚できない速度とは驚いたぜ。」

「なるほど。居合いか…」

「へっ…なるほどあの構えはダテじゃねーって事か。」

そう言つて”紅き翼”は口々にガトウをほめる。そんな中タカミチ一人が今の出来事に啞然としており、そして我に返ると慌てて叫ぶ。

「いや…いやいやいや。確かに師匠はすごいのは知ってますけど。

何で皆タケルさんには驚かないんですか！？あの師匠の居合い拳をを初見で防いだんですよ？」

それを聞いて皆タカミチに”何言ってるんだ？”って顔をしながら顔を向ける。

「へえ…居合い拳つて言うのか。まあ確かに驚いた事は驚いたけどよ。タケルが防いだ事については別に驚くほどでもないぜ？」

「ええそうですね。なにせ彼もまたやり方は違いますが同じ様な事ができますから。なら防げるのも納得できますよ。」

そう言つて再び戦っている二人に顔を向ける。

それを聞いてタカミチは自分の常識が崩れる音が聞こえるような気がした。

そしてとにかく二人の戦いを見ようと必死になって目を凝らし始める。

高速の戦いを少しでもこの目で追える様に。

「…これは驚いたな。まさか初めてで反応できるなんてね。」

「まあ俺も同じ様なことが出来ますし。でもまだ本気じゃないんで

「しょ？」

「…なるほど。やはりあの噂は嘘じゃないってことか。…これは俺も様子見とは言ってるられないな。」

そうガトウが言うと気を引き締めなおす。

一方タケルの方といえば、口ではあんな軽口を言っただけ見たものの内心では心臓をドキドキ鳴らしまくっていた。

（は〜なんとか反応できてよかったよ。にしてもなんて速さなんだよ。クイック・ドロウできなかったら絶対あたってたよ。しかもやつぱり分かりづらい。今は様子見で速さ抑えてたんだろっし、今度はもつと隙なんてなくなるんだろっし。となると…やっぱりアレしかないか。）

「フツ！！」

ガトウが息を短く吐くと、今度は様子見なんかじゃなく本気の居合い拳が武に向かって放たれる。しかも複数。

それに対しタケルがとった行動は両方でクイック・ドロウをし弾幕をはる事だった。

”下手な鉄砲数うちやあたる”

ということわざもある通り、見えないのなら自分の前に弾幕を張ることで防げばいい。

しかしコレは銃闘技を使える武だからこそ出来る防ぎ方であり、しかも重大な欠点があった。

「攻撃ができない……ですか？」

「ああ。タケやんのあの攻撃はあくまで迎撃専用。言ってみれば近距離でしか攻撃できへんのや、でもガトウの居合い拳は中・遠距離の攻撃や。このままやったらジリ貧になるやろうな。」

「たしかにな。…だがタケルもそれ分かってるだろうし、なによりこんなんで終わるわけがねーだろうがな。」

ラカンがそうやって話をしめると、またジツとタケル達を見る。

タカミチもそれに習ってジツと見つめる。タカミチにはもう殆ど攻撃など見えていないのだが、それでも一生懸命に見続ける。どうすればあそこまで強くなれるのかを考えながら…

パパパパパッン！

乾いた音が響きわたる。

お互いに大して移動しておらず、はたから見ればそこに立っただけに見えるだろう。

しかし熟練者から見ればその光景は息をもつかせぬ攻防戦である。そんな中タケルはこれからどうするか考えていた。

（このままじゃダメだな。何かきっかけがほしい所だけど…相手のミスをまってもたぶん無理だしな。ここはやっぱり突っ込むしかないのか。…でもなあ、痛そうだよな。はあ…仕方が無い。）

「ガトウさんそろそろ疲れてきたんじゃない？」

「フツまだまだ大丈夫さ。それよりもタケルこそどうなんだ？ いい加減腕が上がらなくなってきただろ？」

「まさか。まだいけますよ。」

「そうかい。ならそろそろ噂の実力をみせてほしいな？こんなもんじゃないんだろ？」

「あらら。同じ事言われたか…。ならしょうがない。ビックリしないでください…。ね！！」

そう言った瞬間タケルの姿がぶれてそしてその場からいなくなる。ナギ達はそれを見てニヤリとわらいタケルの行方を追う。

タカミチはすでに見失ってしまった。

タケルの目の前のガトウといえば、一瞬目を見開いたがすぐさま姿勢を整え何もない空間に居合い拳を放つ。

二三発放ったところで、ガトウはハツとした顔になったかと思うと、急いでその場から下がる。

するとその場に大きなクレーターが出来、その中心にはタケルの姿があった。

「アレ？結構うまくいったと思ったんだけど…はずしたか。」

そう言っつて首を捻る。

「その歳でたいしたものだ。まさかここまで完成度の高い瞬動を見れるなんて思わなかった。」

「よく言うよ。すぐに俺の姿見つけられたくせに。しかも攻撃まで当ててくるしね…」

「まあそれくらいはやらないとな。だが…それ以上に驚いたのはその拳の威力さ。まさか当てに来た拳がここまですごいなんて…。自信が無くなる。」

「それなら奥の手見せればいいじゃないですか。まだあるんじゃない？」

「観察眼まで一流か……。分かったそうさせてもらおう」

ガトウは武の言葉を聞いて顔をニヤリとするとその場から少し下が
りフウと短く息を吐く。

「右手に魔力」、左手に氣”……合成!!”

「感卦法か……。(原作知っているから分かってたけど……すごいな。
俺が使う感卦法なんかよりずっとうまく使えている。年季ってやつ
なんだろうな。)ならば、こっちも……”右手に魔力”、左手に氣
”……合成!!”

ガトウが感卦法を使うと、武もそれに習うかのように感卦法を発動
させる。それを見たガトウは驚くがすぐに気を取り直してタケルを
睨みつける。

「まさか感卦法まで出来るとはな。……コレでも究極闘法とか呼ばれ
ていて身につけるのはかなり難しいはずなんだが……」

「ガトウさんの感卦法に比べるとまだまだ粗が目立ちますけどね。
じゃ行きますよ……!!”

そう言ってガトウに向かって突進する武。ガトウはそれを見て適度
に距離を取ろうとバックステップをして迎撃できる態勢をとる。

「”豪殺居合い拳”……!!”

ガトウからまるでレーザーのような一発が飛んでくると武はそれをよけずに真正面から撃ち砕く。

「リボルバーマグナム」！！」

体を回転させながら三発当てて、やっと相殺するとその勢いのままガトウの懐に飛び込む。ガトウもそう簡単に入れさせないと居合い拳を放ってくるが、体を回転させながら懐に入ってくるためなかなか良い所に当てる事が出来ず、そのまま懐に入れてしまう。

「くっ！！」

「残り三発！まとめてくらえええ！！」

ガアン！ガアン！ガアン！

金属音のような音が響き渡ると、二人はさっきまでいた場所から少しはなれて対峙しており方膝を付いていた。

「えっ！いったい何がどうなったんですか！？」

何があつたかまったく見えなかったタカミチが近くにいたほかの人に聞く。

「二人ともさすがだな…。いいかいタカミチ？さきほどの大きな居合い拳をタケルが相殺し、その勢いのままガトウの懐に飛び込んだ。…ここまでではいいかい？」

詠春がそう言っているとタカミチは黙って頷く。

「その後タケルはガトウに対して攻撃を仕掛けようとしたんだが、ガトウは更にタケルに接近してその攻撃を潰そうとしたんだ。しかも気を込めた拳のおまけつきでね。タケルもガトウの考えが読めたんだろう、すぐさま拳ではなく肘の攻撃に変えてそれを迎え撃つた。結果急所には当たらなかつたけどタケルの攻撃はガトウに三発あたり、タケルの方もガトウの気の込めた拳をまともにくらってそのまま距離を取ったんだよ。…わかつたかな？」

そう詠春には説明されタカミチは愕然とした。

（あんな一瞬でこんな攻防があつたなんて…僕もいつか師匠のように戦ってみたいと思つていたけど今の僕じゃ師匠の背中さえ拝ませてもらえない。ましてや才能なんてない僕なんて…）

そんな事考えながら顔を下に向けていると横にいた龍牙がタカミチの気持ちに気がついてか声をかける。

「タカミチ。大体何考えとるんかは想像できるけどな、勘違いしたらあかんよ?」

「えっ?」

「確かにタケヤんもガトウも強い。でもそれは今まで血のにじむような鍛錬をしてきたからや。それはここにいる皆かてそうやで?確かに才能ちゅーもんはあるやろうけど、そんなもん戦いの場では絶対的な有利になんかならし、役に立つかも微妙な所や。なあ詠春はん?」

「そうだね。才能っていうものは言ってみれば人よりも早くうまく

なれるだけだからね。それイコール強さとは何の関係も無い。むしろ遠回りした人の方が強くなる場合だってある。そもそも武術と言うのは”努力が才能を陵駕するためにつくられたモノ”と言う言葉は誰が言ったのか忘れたけど、私はその通りだと思うよ？100の努力で勝てなければ100の努力をすればいい。簡単な事だよ。」

「10でなければ1000の努力…」

「それにな。タケやんの強さを才能って言う言葉だけで片付けられるのは許せんよ。ワイはタケヤンといっしょにおったから分かるけど、毎回ぶっ倒れるまで鍛錬してやっとあそこまでの強さを手に入れたんや。確かに魔法球はつこうたけど結局はやらんければ意味は無い。それをやり続けた努力は決して才能なんかやない。タカミチはまだそこまでやってないやろ？」

龍牙の言葉は深くタカミチに突き刺さる。

今までの自分は、ちっとも上達しない事に対して才能が無いからと決め付けていたのではないか？

たとえ無いとしても勝手に自分で限界を決めて倒れるまで努力をしたことがあるだろうか？

そう考えた瞬間タカミチは今まで自分がやってきた事を恥じる。

そしてあまりにも情けなさに涙があふれてくる。

「タカミチ。君はまだ若い。…いや若すぎるといつてもいいだろう。これからいくらでも取り戻せるさ。でも今流している悔し涙は忘れないようにね。それさえ忘れなければきっと君は強くなれるよ。」

「…あゝい」

「ま、今はタケヤン達の戦いをしっかり見ることやな。お？そろそ

る動きそつやで?」

龍牙の言葉に「しごとと乱暴に涙を拭うと武たちの戦いをジツと見つめる。」

その目はいつかあの場所に立ちたいという戦う男の目をしていた。

「なんか隣でとても青臭いことやってますが…フツ嫌いじゃないですよそついうの」

「俺様もだな。漢は悔し涙の数だけ強くなるってかあ?」

「お?ラカンにはいい事いうじゃねえか。まっ俺様にはカンケーねーけどな。」

「はあ…ナギの馬鹿は少しぐらいタカミチを見習って欲しいのう。」

.....

ナギたちがそんな事を言っている中、ガトウと武は互いに方膝を付きながらこれからのことについて考えていた。

(何とか急所は外れているけど、それでもこの威力か…。まったく恐れ入るよ。”銃神”とはよくいったものだ。まさに銃弾の拳。いや食らったのは肘か…それにまだタケルは手の内をすべて見せてい

ない。もし”炎帝”の異名とされる技なんて使われたら…考えただけで嫌になるな。)

表情に出す事はけしてしないが、内心冷や汗びっしよりのガトウ。しかしタケルもそれは同じだった。

(普通あんな場面でそんな事考え付くか!? やっぱり経験の差つてやつなんだろうけど…しかも正確性だけで言ったらたぶんここにいる誰よりも上だろうな。きつちりとダメージが残る場所へ当ててきやがった。こっちは全弾撃った反動が来て頭がくらくらしてるって言うのに…はあ。どうしよか)

そうして二人してにらみ合いながら考えていると、お互い考えている事が一緒なのが分かったのか。ニヤリと笑い合ってその場で立ち上がる。

「ガトウさん。たぶん考えている事は一緒だと思いますけど、そろそろ感卦法もきれますし最後の一発になりますかね?」

「そうだな。年寄りにはそろそろきつくなってきたから終わらせた所だ。」

……………それじゃいくか!!

二人が同時にそう言葉を発するとガトウは突撃しながら、片手で普通の居合い拳を出しながら牽制をする。対する武は右腕をハンマーコックし、それを可能な限りよけながらガトウに接近して行く。そしてガトウは武を十分に引き付けると、残っていた力をすべて使っていない右手に集中し先ほどよりも特大な居合い拳を撃つ。

武はそれを見て相殺するのは無理と判断し体を捻りながらそれを交わそうとした。

しかし、特大の”豪殺居合い拳”の前では避けきれず体をかすってしまう。

かすっただけでもその威力は絶大で後ろに吹っ飛ばされそうになるが、それを体を回転させる事で何とかやり過ごしガトウの懐に入った。

「これは…俺の負けだな。」

「いつけえええ！！44マグナム！！」

ガコオオオオン！！

大きい音が当たりに響き渡り、他の人達は勝負がついたと思い二人によっていく。

するとそこには背中にマグナムがあたった証拠の弾痕が残っているガトウと、倒れそうなガトウを抱えている武の姿があった。

「この勝負タケルの勝ちだな。」

そうナギがしめるとタケルはその場でしりもちをついて肩で息をする。

「何とか勝てた…ガトウさん強いわ。」

「おいおい…お前にはまだ”炎帝”があるのに何とかって…」

近くに寄ってきたラカンが呆れた顔をしながら話しかけて来る。

そのそばでは詠春がガトウの状態を確認している。

「ラカン。”炎帝”出した所で変わらないさ。魔力を使うか気を使うかの違いでしかないし、それに単純な能力アップじゃ感卦法の方がいいんだぞ？」

「まあそうじゃろうな。確かに魔法を取り込むことによるほぼ無敵状態になるのは魅力じゃが、単純な力でいったら感卦法の方が上じや。何せ魔法と氣の融合じゃからな。」

「そんなもんか？なら何で戦闘で感卦法をあまり使わないんだ？」
ラカンの当然ともいえる質問にアルが答える。

「簡単な事ですよラカン。タケルが使う銃闘技は相手を行動不能に出来ませんが、あくまで肉弾戦。個人との戦闘に適していますが、集団にはむかない。たとえ強化してもです。だけど”炎帝”など”闇の魔法”は魔法が付加されることで広範囲にわたって攻撃ができるんですよ。例えば炎とかね。」

「なるほど。なっとくだぜ。じゃあ何で俺様と戦う時はそれを使っただんだ？」

「あの時はまだろくに感卦法も使えていなかったし、”炎帝”がどれほど使えるか試したかったんだよ。」

「へー」

「ま、そういつこっちゃ。それで詠春はん。ガトウはどないや？」

「ふむ。まあ2〜3日安静と言ったところだろう。命に別状はない

さ。」

詠春の言葉にタカミチがほっと息を吐く。そしてしばらくガトウを見ていたと思うとキツ！つと表情を引き締めて武の前まで来る。

「武さんお願いがあります！！」

「へっ！？お…おっ。何？」

「僕に銃闘技を教えてください！」

「……………マジで言ってる？」

タカミチの突然のお願いにあっけにとられる武。

ナギたちも同じようにあっけに取られている。

あ、でもラカンは何故かニヤニヤしてる。…ちょっとうっとうしいな。

「マジです！」

「何でまた？銃闘技なんかよりラカンからもっと実践的なこと教わったほうがためになると思うぞ？」

「俺に教わりたのなら金を用意しな（キラッ）」

「ラカン空気よめや。」

ラカンの言葉に皆あっけに取られていると近くにいた龍牙がラカンの言葉に龍牙が突っ込みを入れる。

「……………まあラカンは後からシバくとして、そうじゃなくてもガトウ

さんからいろいろ教わってるんだろ？それじゃだめなのか？」

「いえダメじゃないです。でも僕は銃闘技を学びたい。…憧れなんです。最初は才能がないから無理だと勝手に自分であきらめてました。でも龍牙さんや詠春さんにいろいろ言われて決めたんです。憧れを憧れで済ますんじゃなくて、自分の物にするって。…だからお願いします。」

そう言つて土下座をしながらお願いをするタカミチ。

その姿を見て武はしばらく目をつぶつて考えるとタカミチに向かって問いかける。

「タカミチ…。銃闘技を覚えたいという熱意は伝わった。けどそれは生半可な鍛錬じゃすまないぞ？」

「覚悟してます。僕には才能なんてたぶん無いけど、努力すれば身に付けられないものなんてないですから！」

「……………わかった。教えるよ。」

「!!!!ホントですか？」

「ただし!!ガトウとの鍛錬もしつかりやる事が条件だ。…いいか？あくまで俺が教えられるのは銃闘技の基礎だけだ。今使っている銃闘技はその基礎の上に俺が使えるものと組み合わせて作りあげたまったくの別物。それは俺にしか使えないものでもある。それを見に付ける事は不可能だろう。」

武がそう言つとタカミチは泣きそうな顔になる。

憧れである銃闘技は自分には使えないといわれているのだから当然

だろう。

しかし、武が言った次の一言でその顔は一変した。

「何泣きそんな顔してんだよ。言っただろ？あくまで俺が使っているものは…だ。だからお前はお前だけの銃闘技を作り上げてみる。ガトウとの鍛錬をしつかりやるって言うのもそれが理由だ。ガトウの技と銃闘技を組み合わせる事で、俺にも出来ない銃闘技が生まれるだろ？それが出来るのはお前だけだ。基礎は俺が叩き込んでやる。そこには銃闘技のすべてがある。それじゃ不満か？」

その言葉にタカミチは一生懸命首を横にふる。

「よし。…まず特別な筋トレとかが必要だけどそれはまあ明日からでもいい。でもその前に一つ課題を出したいと思う。」

「課題…ですか？」

「そうだ。課題といってもすぐに答えられるものじゃないけどな。銃闘技…いや戦うという事に対してとても大切な事だ。…タカミチお前はその拳に何を込めて戦う？」

「何を込めて…」

「そうだ。覚悟…信念といってもいいか。それをしつかりともつけない限り銃闘技は完全には扱えない。なぜならそれこそが銃闘技の強さの源だからだ。何のために戦い。何のために拳を振るうのか…それを考える事だ。これは多分すぐには見つからないだろうからとにかく考え続ける。いろんなものを見ていろんな人の考えを聞いて考え続ける。その答えはいつか俺達に迫るぐらいまで強くなった時に聞くからな。ちゃんと覚えておけよ？」

「はい！」

こうしてガトウと武の勝負は幕を下ろした。

その勝負を見て自分の進むべき道を見つけたタカミチ。

ひよっとしたらタカミチにそれを教えるために二人は戦ったのかも知れない。

ただ言えることが一つだけある。

それはここにまた一人英雄の卵が生まれた

ただそれだけである。

小話2：戦い…そして決意（後書き）

次回からはまた本編へと戻ります。

こっからは結構早足になるのかあ…原作もそう深く書いているわけじゃないし…。

あゝはやくエヴァとか出したい。

次回も楽しみにしててください。

第十話：発覚・思い・出会い（前書き）

お疲れ様です。

小話も終りまた本編へと戻ります。

今回はいろいろと動きます。

中にはえ〜…とか思う場面があるかもしれませんが、そこは大目に見てください。

ではどうぞ！

第十話：発覚・思い・出会い

ガトウとの戦いの後、俺達は魔法球の中で一週間ほど休み、外へと出る事になった。

魔法球の中で一週間と言うことはまだ現実の世界では一日も経過していない。

皆その事にとても驚き、改めて魔法球の便利さ…と言うよりもチートさに呆れたようだった。

ちなみにタカミチの修行についてだが、あの後目が覚めたガトウにも事情を説明した所

「そうか…。二つとも疎かにしないのであれば俺からは何も言う事はない。…頑張れよ」

と言われ、タカミチは感極まったのかガトウに抱きついて泣いていた。

それからはガトウが一日修行をつけ、次の日は俺が修行をつける。

一日休息と自修練の日を挟んでまたガトウの修行…といったサイクルで鍛錬を続けている。

かなり大変そうなのだが、タカミチは何処か嬉しそうに鍛錬をしていた。

きつと目指すものがしつかりと見定まったのかも知れない。

これからのタカミチに乞うご期待といった所だろう。

さて話は最初に戻るが、魔法球の外に出た俺達はガトウがいろいろ調べてくるといってその場から立ち去った後、皆思い思いに過ごしていた。

といってもナギやラカンは探索に出かけたり騒いだりといつもと変

わからない日々をすごし、他の面子といえ、タカミチは修行。俺と龍ちゃんはアルたちに魔法の授業を受けていた。

たまにガトウが帰ってきたり連絡が来て戦場に出たりしたのだが、別段特にコレといった進展は無く、ただただ時間が過ぎていった。

そんなある日の事…ガトウが皆を集めて話したいことがあるというので、もうおなじみとなっている酒場でお酒を飲みながら集まっていた。

ちなみに酒場で話す理由は下手に隠れようとする逆と怪しまれる可能性があるから、普段から騒がしい所で話した方が安全だということらしい。

「皆集まってもらったのは他でもない。ちょっと緊急の話があったな。」

「なんだよいきなり。何かあったのか？」

「ナギの言う通りですね。いったいどうしたのです？」

「……実はこの戦争には裏があったんだ。」

「そんなもの今更じゃろ？政治やらなんやらいろんなことがあるのが普通じゃ。」

「いや…確かにいろいろ裏があるのは当たり前なんだが…これはそんな生易しい話なんかじゃない。」

「ガトウ回りくどい事言うのはよそうぜ？ぱぱっと言ってくれや」

ラカンがそうちゃちゃを入れるとガトウは酒を一気に煽るとみんな

の目を見て話し出した。

「結論から言おう。この戦争はわざと引き起こされたものだ。しかも必要に戦争を長引かせて戦火を拡大させている。ある一つの組織によってな。」

「!!!!!!!!!!!!!!」

「……ちよつとまってよ。じゃあ俺達は一体何のために戦ってたんだよ。平和を勝ち取るためじゃないのか!? 戦争を終わらせるために戦ってたんじゃないのかよ!!!!!!」

ドン!と机を叩き、ガトウの言葉にナギが反応する。

「そのはずだった。…だが実際は違っていた。帝国も連合もその組織の連中たちに言いように動かされて戦争を続けているだけだ。目的なんかは分かんが、トップ近くの連中までがその組織の一員らしい。」

ガトウの言葉に皆言葉が出なかった。

俺達”紅き翼”は戦争を早く終わらせるために精一杯戦ってきた。それはきつと両国の兵士達も同じだろう。皆先にある平和を目指して戦っていたはずだったのに、ガトウの一言でそれが無駄だったといわれているのと同じ聞こえた。

重い空気がメンバーの中に漂っている中、ガトウは話を続ける。

「とりあえずわかっている事は、そいつら組織の名前は”完全なる世界”というらしい。それ以外のことは現在調査中だ。そしてここからが本題なんだが…その組織を潰すためにそのためにあるお方が

力を貸して欲しいと要請をうけた。」

「確かにそれだけの事やれる組織なら並大抵のことでは齒が立たないだろうが…ガトウその人は信用できる人なんだろうな？」

「ああ。それは大丈夫だ。もともとあのお方がおかしいと感じて調べて気付いた事だからな…それでどうする？」

「きまつてるぜ。とりあえず今の状況じゃ俺達に選べる選択肢ないんで無いようなもんだ。だったらまずその人にあつてこれからのことを考えようじゃねーか。…むやみに戦争を長引かせようとしたやつら絶対に許してはおけねー!!」

『じゃな・だな・ですね・やな・』

「わかった。さすがに今日はもう遅いから明日逢うことにしよう。」

そうガトウがしめてこの場はお開きとなった。

その後、俺と籠ちゃんは部屋へと戻り明日の準備をすることにした。部屋に戻ると先ほどから黙って何かを考えていた籠ちゃんが、何処か真剣な顔をしてが話しかけてきた。

「タケやんどうしたんや？さっきの話を聞いている時からまったく喋らんようになっただけど…」

「……いや別に何でもないよ」

「うそやな」

即答でそう返す籠ちゃんに少し驚きながらも動揺を見せないように

淡々と答える。

「うそつて…なんでだよ。」

「簡単な事や。あんな話聞かされてタケやんが頭にきてないわけが無い。あの場でナギたちと同じように叫ぶぐらいは普段のタケやんならしとる。…何を考えとるんや？いや何かしつとるんか？」

「いや、あの組織のこと考えてただけだよ。」

「……タケやんワイは信用できんか？」

「いきなりなんだよ」

そう言つて龍ちゃんの顔を見るとそこには今まで見たことのないくらい悲痛な顔と、今にも泣き出しそうな目をした龍ちゃんがそこにいた。

「前々からおもつたんやけど、タケやんいろいろ隠し事しとるやろ？それはワイにも話せんことなんか？ワイはタケやんのパートナ―やなかつたんか！？ワイか勝手におもつとっただけなんか！？」

「龍ちゃん…それは…」

「違つとでもいうんか？なら…なら…ワイに隠し事なんてやめてえな。タケやんがそこまで隠し取ることなんやかなりやばい事なんやと思う。でも…ワイはそれを一緒に悩みたい。タケやんはワイの一番の”親友”やからな。こんなこと言うの卑怯やとは思つ。でもそれくらい心配なんや。タケやんが一人で無茶しそつで…」

いつの間にか龍ちゃんは泣いていた。大きな目にいっぱい涙を浮かべて…

龍ちゃんもきつといろいろ考えてくれたんだと思う。それも自分の気持ちを押し殺して俺のことばかり…

「……………わかったよ。でもお願いだからこのことは誰にも言わないで欲しい。頼む。」

「もちろんや」

そして俺は俺自身の事をすべて龍ちゃんに話すのだった。

……………
……………
……………

「…タケちゃん確認のために聞いとくけど…この話はホントのことなんやな？」

「…信じれないのは無理ないけど…」

「アホ！そうやない。……………は？タケちゃんのことやからかなりやばい事隠しとるとはおもっとたけど…」
「…は相当やな。」

「……………」

「何おちこんどんねん。ワイは怒ってない。というよりもなんでもことはよつ聞かんかったかって自分にイラつくわ。」

「へっ」

「よう今まで我慢しとったな。えらいわ。…ほんまえらい。こんな事一人で抱え込むなんて…でも大丈夫やこれからはワイと一緒に背おつたる。ワイとタケやんは一心同体や」

その言葉に思わず龍ちゃんを抱え泣き出す俺。

誰にも言えなかった。言えるはずなかった…頭がおかしくなるといわれても仕方が無い事。

でもやっと思える相手が出来た。それが何よりもうれしい。

苦しかった。救えるすべがあるのに行動できない自分に…

悲しかった。知識を持っていたとしても守れなかった命に…

イラついた。力の無い自分に…

そんな気持ちを分かってくれているのか、龍ちゃんはただ俺に抱かれながら頬をこすりつけてくれていた。

「…泣き止んだか？」

「ああ、ありがとう。…はは。かつこ悪いところ見せたね」

「なんや今更。タケやんのかつこ悪いところなんていっぱいみとるつちゅーねん」

「ひどっ！…！」

大げさにリアクションをとって二人で笑いあう。これはきつと龍ちゃんの優しさなんだろう。

明るい雰囲気にしてジメジメした空気を払拭してくれた。

「はは。まあええ。…んでいろいろききたいんやけど、原作つちゅーたか？ともかくタケヤンは大体の事をしつとるって言うたな。」

「まあね。でも知っているといてもこんな事が起こるとか、こんな人物がいるとか…詳しくまでは知らないし、それに本当にあっているのかも確証が無いよ。」

「どついうことや？」

いまいち要領を得ないのか龍ちゃんが聞いてくる。

「例えば、こんな事があると分かっているとしても、それが何時起こるとか、敵がどんだけ強いとかそんな事は分からないって事。実際に俺が知っているのでは俺も龍ちゃんもいないわけだし。知識として知ってても経験で知っているわけじゃないから意味無いんだよ。」

「ほ…つまり答えをしつとつてもそれに辿り着くための道はしらんちゅー訳やな？」

「そういうこと。ラカンのことにしたつてもそうなんだよ。ラカンと行動していけばナギたちにもあえるだろうし、この戦争の黒幕である”完全なる世界”にも関われるだろうって思ったからだし。」

まあ実際は神からそういわれたんだけど、それ以外原作に介入する方法なんて思いつかなかつたのも事実だ。

「…役に立つのか立たんのか分からん知識やな」

「本当にその通りだと思うよ」

「でもや。その”完全なる世界”のアジトとかは知らんのか？どうせやったらそこを強襲すればすぐにでも戦争が終わると思うんやけど？」

「ん〜どうだろう。多分あそこで間違いないと思うんだけど…でも知ってても意味無いよ。大体今戦った所で勝ち目ないんでないもん。戦力が違いすぎるし…。原作でもいろいろ協力を取り付けて戦力を増強し、更にいろんな拠点を潰して相手の戦力を削っていったから勝てたんだと思うし…」

そこなんだよね。神がいうにはハッピーエンドを目指せば何やってもいいと言われているけど、実際そんなうまくいくわけじゃない。いくら俺たちが強くてもやっぱり数には勝てない。

どっかの弟も言ってたけど”戦いは数”なんだよね。はあ…

「そっか…ならしゃーないわな。しばらくは流れに身を任せんといかんというわけやな？」

「そうだね。それまでに助けられる命は極力助けたいし、あと黒幕の一員である爺たちの思い通りにはいかない様に手をうつ必要があるし…問題は山済みだよ。」

「めんどい…というか、なんというか。…にしてもその元老院っていったか？そいつらうざいな。」

「ああ。大体俺は悪とか正義とかどうでもいいんだよね。でも人の命をもてあそぶ奴等は大嫌いなんだよ！ぜってーひどい目見せてやる。」

「ワイも手伝うわ。というかワイにもやらせてや。人の権力争いと
かワイは興味ないけど、自分の事に関係無い人を巻き込むのは許せ
んわ。」

「ありがと。……まあとりあえずは明日だね。」

「明日か…たしかどっかの姫に逢うんやっけ？」

「そ。ともかく明日に備えて寝よっか？」

「そっちな。」

そう言っつて二人で寢床に言っつて寝ることにした。

明日…

とうとう逢えるのか、ナギの嫁にしてウィスペルタティア王国の姫。

アリカ・アナルキア・エンテオフィシア殿下に…

はあ…どう考えても面倒な事になりそうだよ。

さてさて、龍ちゃんとの話も終り一夜明け、俺達は本国首都へと出
向いていた。

まあ原作知っている身だとそこまで疑問を抱く事無いはずなだけで、
知らない人からしたらきつと疑問でいっぱいなんだろうな…
とそんな事を考えながら皆と一緒にまっていた。

ちなみに他の面子は何故こんな所に連れてこられたのか分からずあつげにとられているようだった。
しばらくして、こちらに向かつてくる人影を見つけ皆それに注目する。

そしてそれが誰だかわかると驚いたように声を上げる。

『マ、マクギル元老院議員!?』 「…誰？」

…ってああこの人がマクギル元老院議員か。原作で名前くらいは聞いた事あつたけど、それぐらいにしか記憶に無い。顔なんてもちろん覚えていない。まあつまり印象が薄いつて事はそこまで必要な人物じゃないんだと思うけど…まあいちお顔と名前くらいは一致させておこう。

そんな事を考えている間も話は進んでいるようだった。

「いや…ワシちゃう。主賓はあのお方じゃ」

そんな事を言つて後ろについてきた人を紹介する。
さて…いよいよご対面か。

「ウイスペルタティア王国…アリカ姫」

「へ〜アレがいつとつたアリカ姫か…性格きつそうやけどべっぴんさんやな〜そう思わんタケヤン?…つてタケヤン!？」

……………はっ一瞬言葉を失つてた。

うわ〜まさか見惚れるとは俺らしくねー!!!!!!

そりゃ確かに原作でもきれーだなーとかは思つてたけど現物見るとマジ綺麗だわ。

「これはナギが一目ぼれするのも分かるわ。」

「タケヤン!!!!」

「!!!!ん?何龍ちゃん?」

「何やあらへんがな。どうしたんや?いきなりボーっとしてからに?」

「いや本物にあえたからちよつと感動してただけだよ。」

「……ふくんまあええわ。ともかくそろそろ真面目に話し聞かんといかんのやないか?」

「わかってるよ。」

そうやって俺は話し合いに参加する事にした。

そこで話し合われた事をまとめるところこういうことらしい。

アリカ姫はなんでもこの戦争を止めるための調停役だったらしいのだが、いろいろ妨害や邪魔が入り、力及ばずダメだったらしい。それでも何とか成功させたいらしく俺たちを頼ってきたそうだ。

また”完全なる世界”についてもその妨害や邪魔をした相手を特定するためにいろいろ調べさせた所その組織が浮かび上がってきたという事だ。

そしてこれからが重要なのだが、現状組織の中心人物や構成、目的などがまったくと違っていいほど分かっていないらしく、大手を振って行動する事が出来ないらしい。

なのでしばらくは本当に信頼できる人達だけでこの組織のことを調

べ、少しずつ事態を好転させて行くしかないという結論に至った。

まあ正直目的とか何とかは俺にはわかってはいるんだけど、言えないよな。元老院がやっている事を知っているとしても名前まで知ってるわけじゃないし、知っているとしたらアールウエンクスぐらいしか覚えてないから意味ないし。

まああいつらがやっていることはわかってるんだから、それを元にするいろいろ調べればうまくいけば早くに証拠つかめるかも知れない。まあ今俺にできる事といえばそれぐらいか…もどかしいな。

「…やるしかないか。」

「ん？どうしたんや？」

「いや…この状況を好転させるためにも今はやれる事をやらないとなと思っただけだよ。」

「せやな。まずはやれる事やろうや」

龍ちゃんと決意を新たにした所で話し合いは終了となった。

俺、龍ちゃん、ガトウ、アル、ゼクト、詠春などで情報集め、そして統括をして、他の面子はおもに護衛や戦闘をする事に決まった。さっそくアリカ姫はナギに罵倒を浴びせながらも顎で使っているっぽい。

まあコレは原作通りかな？

でもなんだろ？ナギとアリカ姫が話している所を見るとちょっとズキッとするんだけど…おかしいな？

原作とかでも綺麗だとは思っていても好きとは思ってなかったから、恋とは別だとは思っけど…

一体どうしたんだろう？

まあともかく今は情報集めが先か。

さあ気合入れて頑張ろうか！！

第十話：発覚・思い・出会い（後書き）

さていかがだったでしょうか？

実を言いますと、龍ちゃんに打ち明けるかどうかは最初から決めていました。

タケルをあくまで人として書きたかったのが理由です。

普通人がこんな目にあつたらいろいろな事に押しつぶされてしまうのではないかと？

そう思います。だからその悩みとかを打ち明けることが出来る人物をつくりたかったのです。（実際は人ではありませんが…）

なので龍ちゃんにその役目をになつてもらいました。

男の同士の友情：これもまたいい作品の大事な要素だと私は思います！

次回も結構早めに投稿できると思います。

では次回また読んでくれる事を楽しみにしています。

第十一話：英雄 反逆者（前書き）

お疲れ様です。

また早めに更新する事が出来ました。

今回はタイトルの通りです。

それではどうぞ

第十一話：英雄 反逆者

アリカ姫との対談から数ヶ月が経とうとしていた。

その間俺たち”紅き翼”の面々は表立っては連合のために戦闘をおこなっていたが、裏では”完全なる世界”の情報を必死になつて集めていた。

こうしている間にも戦火は広がり、たくさんの命が奪われていく。そんな現実を見つめ今にも怒り狂いそんな気持ちをもぐつと堪え今できることをしていく。

少しでも早くこの大戦が終わるように…：そう願いながら。

そんなある日、俺達の元に有力な情報が入ったという報告を受け、それを聞いた俺達はガトウの元へと急いでいた。

そしてガトウが仕事をしている部屋へと入ると、そこには頭を抱えながら唸っているガトウがいた。

「ガトウ！有力な情報が見つかったと言うのはホントなのか？」

「ああ詠春。確かに奴等の真相に迫るファイルを見つけることには成功したんだが…」

「ガトウ。どうしたのですか？」

「いや…確かに情報のソースから言つてかなり信憑性の高い情報であることは間違いないんだがな…」

「……ガトウさん。はっきり言つたらいいんじゃないかな？一人で悩んでいても仕方がないことだと俺は思うんだけど…」

そう俺がガトウの後押しをする。
するとガトウはタバコに火をつけてふうつと煙を吐くと皆の顔を見て覚悟を決めたのか話し出す。

「…実はこの男にも”完全なる世界”との関与の疑いが出てきた。
…信じたくないぐらいの大物だよ」

そう言つて一枚の写真を俺達に見せる。
そしてそこに映っている人物を見てみんな啞然とする。

「これは…」

「オイオイオイ…マジかよ」

「現執務官!？」

「……ちょっとまってや。たしかコイツは……」

「ああ。メガロメセンブリアのNo2さ」

やっと出てきたか。

俺はそう心の中で呟く。

まったくなかなか尻尾をつかませてもらえなかったから結構時間が掛かったけど、ようやく捕まえる事が出来た。さてここからが本番だな。

龍ちゃんも俺に視線を送りコクリと首を縦にふる。
どうやら龍ちゃんも同じ気持ちらしい…。

「ただ皆に言っておくが、確かに信憑性は高いが確証があるわけじゃない。だからここだけの話にしてくれ。」

「それはもちろんじゃが…。どうやってその証拠を掴むつもりじゃ？」

「……直接聞くしかないだろう。」

「直接聞くって…そんな簡単に口を開く訳ないだろうが。」

「まあ確かに…だがこの情報を掴むだけでもかなりの時間を費やしたんだ。そんな悠長な時間はもう取れそうにない。それにやり方はあるさ…」

そう言つてニヤリと笑うガトウ。

まあそこら辺はガトウに任せるとは言えないだろうな。俺たちじゃうまく割らせる事なんて出来そうにないし…
そんな事を考えていると急に外から爆発音が鳴り響き一気に騒がしくなる。

ズズン…！！

『！！！！？』

「なんだ！？」

「外から聞こえましたね…」

急いで窓へと向かい状況を確認する。
すると市街地の方で爆発があつたみたいだ。

「！！！！（思い出した。確かナギとアリカ姫が襲われるんだっけ！

「？」

「くそっ！ここからじゃ何があったか分からない。武、龍牙一緒に来てくれるか？」

『わかった』

そう言っつて俺達と詠春は部屋からでてその場へ直行する。

「俺たちはここで情報を集めてみる。…たしか今はナギ達も町に行っているはずだ。うまく協力をしてくれ！！」

後ろからガトウがそう告げると、俺達は後ろを振り返り頷き爆発があつたであろう現場へと向かうのだった。

現場に着いた俺達がまず行った事はこの爆発でひどい怪我を負った人がいないか確認する事だった。

「武！そっちはどうだ？」

「こっちは特にひどい怪我をした人はいないみたいだ。そっちはどうですか？」

「こっちも大丈夫みたいだよ。…それにしても一体何があつたんだ…」

そう言っつて爆発の中心を見つめる詠春。

そこにはたぶん魔法で出来たであろう大きなクレーターが出来ていた。

その余波に当てられたのか近くの建物何かにも罅が入っており、かなり強い魔法を使った事が予想される。

「まさかとは思うけど、コレナギがやったんやないやろうな？」

「ハハツ…まさか……否定できないな。」

「龍ちゃんいくらナギがバカでもそれはいくらなんでも……」

「何でもなんや？」

「……………ごめん。」

そう言つて三人の間になんともいえない空気で支配されていると、何か思い立ったのか近くにいた龍ちゃんが足元までやってきておもむろにすそを引っ張る。

「ん？どうしたの龍ちゃん？」

「それで？コレはどういうことなんや？」

詠春に聞こえないように注意しながら小声で話しかけてくる。

まあ話す内容が内容なので、当然といえば当然だといえよう。

そして俺の方も詠春の視線を気にしながら龍ちゃんに話しかける。

「原作だと、ナギとアリカ姫が”完全なる世界”の奴等に襲われるのが真相なんだけど、この爆発事態は誰が起こしたもののかは覚えてないよ。」

「そうか。…これからどうするつもりや？」

「そうだね…。その後はナギとアリカ姫が敵の拠点に乗り込んで潰すんだけど、その拠点がどこにあるかなんて分からないし、できることは殆どないよ」

「ならじゃーないな。」

しよせん原作を知っているからってやれる事なんて少ない。

いくら答えを知っていてもその道筋をちゃんと分かってないとこんなもんだと改めて思う。

龍ちゃん和二人で”ん”と唸りながらどうするか考えていると、さっきまで黙っていた詠春が声をかけてくる。

「二人ともこれからのことなんだけど…」

「そうですね…。とりあえずは、どうしますか？」

「出来ればこの町の何処かにいるナギ達を探したい。それとコレの原因も可能な限り情報を集めた方が言いと私は思っているんだが、どうだろうか？」

「俺も賛成ですよ。ならとりあえずは近くにいた人からいろいろ話を聞いて見ませんか？この爆発に対してナギ達が気付いていないはずはないから、もしかしたらあつちにはあつちでいろいろ動いているのかもしれない。うまくいけばその情報も手に入るかも？」

「せやな。それにナギの奴は厄介ごとに関わるの好きやからな。と言うよりも厄介ごとに巻き込まれやすいんか？まあともかくここにいないって事はもう行動しとる可能性は高いと思うぞ？それにあのアリカ姫もな…ナギと同じような匂いがするわ？」

「いやまさか…いくらアリカ姫でも…龍牙、ちなみにその匂いで奴はどれくらいあたりそうだ？」

「ほぼ100%やと思うで」

「……………武」

「はあ…わかってますよ。全力で探します」

「たのむ…はあ。」

そう言つて二手に分かれて情報を集める事となつた。

何かアリカ姫が来てから詠春さんのため息が一気に増えたような気がするのは気のせいだろうか？あの人も後の事を考えずどんどん自分で動いていく人だからな。

…：…：今度からはあの二人にはお目付け役みたいな人が必要なのかも知れん。

じゃないと詠春さんとかガトウさんが多分ストレスがマツハで胃がテレッテーみたいなことになると思う。

「タケヤンどうしたん？」

「いや…詠春さんやガトウさんの心境を考えるとね…」

「あ…あいつ等戦闘で死んでもナギ達に殺されるんとかやうやろうか？」

「そうならないように、少しは手伝ってあげようよ。」

「そうやな。」

「はあくまさかここでこんな難題にあたるなんて…まさか思わなかったな。」

「まあアレや”英雄詠春・ガトウお腹を抱え謎の死！！”って見出し出されんようにがんばろうや。」

「そうしよっか？」

そう言つて二人は情報を集めるために奔走するのだった。

おもにナギ達の心配ではなく、詠春達のお腹の心配のために…

その後ある程度時間がたつた所で詠春と合流してみたのだが、結果は思わしくなくそれっぽいなを見かけたという情報は手に入ったのだが、それ以外は何も分からずナギ達も見つけることが出来なかったのとおりあえずは拠点に戻る事になった。

詠春は”もしかしたら戻っているかもしれない”

そう言っていたがまあ答えを知っている俺たちからしたらそんな事はまずありえないだろうと思ひ、詠春の胃が爆発しない事を祈りながら帰るのであった。

そしてその事件から一夜明けた所で、何事もなかったかのようにナギ達が帰ってきた。

アリカ姫の方は、”疲れた”とか言つて部屋へと戻つていき、それに便乗するかのようにナギも部屋から出て行こうとしたが、まあ…
…当然のごとく詠春につかまつた。

そして今ナギはと言うと……絶賛俺達の前で正座中。

主に詠春からのお叱りを受けているのであった。

「…で？お前はアリカ王女殿下を一昼夜連れまわしたあげく、敵の拠点を潰してきたとか…どうやったらそんなレベルの夜遊びをすることになるんだ！！」

「いや…まあ…あるだろその場のノリって奴がさ？それにある程度潰したら後は警察に任せてきたしよ…」

ノリって…いやまあわかんなくはないんだけどさ。

せめてもうすこしまともな言い訳はできないもんかね？

いくらなんでも中学生の夜遊びのような理由で、拠点潰されても…
どうなのよそれって。

「ノリですむ問題かー！！大体お前も理解してるだろうが！敵の下部組織潰した所でたいした意味はないんだ。だからこうやって秘密裏に情報を集めているんだろうが！大体アリカ王女殿下に怪我でもあつたらどう責任を取るつもりなんだ！？」

「いや〜最初は俺もそう思ってアリカ姫だけでも返そうとしたんだぜ？でもよー何かあの姫様ついてくって言うて聞かなくてさ。それに戦闘になつたらなつたで俺以上にノリノリだしよ。まあ怪我しないように注意はしてたけどな。」

「普通はそのついでとか言われた時点でこっちに帰って来い！そうじゃなくても連絡ぐらいしろよ！！」

「あ！…あはははっ…わりい！でもまあそのおかげでこうして敵さんの証拠も見つけてきたんだからそれでいいだろ？」

そう言つてナギは懐から一枚の手紙を取り出す。

それを受け取ったガトウが確認すると、どうやら執務官の物と思われる手紙らしい。

にしてもさすが主人公。なんてタイミングのいい事なんだ。

コレってどんなチートよりもひどいチートだと思っるのは俺だけなのか？ そうなのか？

まあそんな心の叫びはおいといて、とりあえずはナギに感謝しとくか。

「ナギ！ お前最高！」

「かつこええなくさすがワイらのリーダーや！」

「だろ？」

「だろ？ じゃなーい！！ 武達もあまりナギを調子づかせるな！！ …… ああ頭が痛くなってきた。」

あ、詠春を助けるとか言っただくせにダメージ与えちまった。

ある程度時間が取れたらまた魔法球の中にも招待しよう。そこで少しでもストレスを緩和してあげないと…

その後、ナギが見つけた証拠と今まで集めていた証拠をあわせガトウがマクギル元老院議員へ連絡をいれるとその証拠をナギに持たせてこっちに来て欲しいという話となり、ナギだけだと心配だと言う事で、ラカンとガトウ、そして俺達も一緒について行くことになった。

一方アリカ姫はというと、その前に帝国第三皇女と話をしくことが決定し、俺達より早くに出発する事になった。

ただ出発する前にアリカ姫とナギが何か話しており、それを眺めていたら思いつきりひっぱたかれていた。

たしかにあの人もすぐ手が出る人だとは思っけどさ…なんでこうすぐひっぱたかれるのかねえ？

俺も少しだけど話した事あるけどさ、そんな事無かったと思うんだけどなあ。

ま、あくまで報告だけだったし？”用が済んだら帰れ”みたいな雰囲気だったけどね？

ただ疑問に思っただんだけど、その後龍ちゃんとかラカンが”どうだった？”見たいな事をしつこく聞いてきたんだよね。あれって一体なんだっただらろうか？

さてさてそんな事があっただけど、とりあえず特に何事もなくマクギル議員の所についた。

確かマクギル議員はもう亡くなってるとるんだよな。それを防ごうと考えたんだけどすぐ別の場所に行っちゃったから何にも出来なかった。あの人いい感じの人だったからどうにかして助けたかったんだけど…。

……後悔しても今更どうしようもない。とにかく今はこの後おこることを乗り越えないと。さあご対面といきますか。

「マクギル元老院議員」

「ご苦労だった。証拠品の方はもちろんオリジナルだろうね？」

「ハッ…法務官殿はどうしたのですか？まだいらっしやらないみたいですが？」

「……法務官はこられぬ事になった。」

「え？」

「…あれからいろいろ考えたんだが、せつかくの勝ち戦なんだ…
ここで慌てて水を差すのは悪いと思ってね」

「ハア…そうですね。」

そう答えるナギは何処か納得できてない顔をしていた。

勘って奴なんだろうけど、やっぱりナギはすげーと思うよ。
でも…なあ…。

たとえ答えを知らなくてもあきらかにおかしいでしょ？

考え方が180度違うし、喋り方もびみょーに違うしね。
もう少しどうにかできなかったのかなあ…。

「あ、あーナギ、ナギ？聞こえますか？」

「ん？タケルか？どうした？」

「いや、あきらかにあのマクギル元老院議員怪しくないか？」

「お！？お前もそう思うか？俺もそう感じてるんだよ」

「じゃやつちやいますか？」

「おう。」

そんな事をナギと念話で話していると、近くにいた龍ちゃんからも
念話が入る。

「(タケヤん、タケヤん？聞こえてるか?)」

「(ういっい。どござー)」

「(あれ。偽もんやで？匂いがまったく違う。)」

「(さすがだね。正解だよ。)」

「(…なるほど。コレわかつとったわけやな？)」

「(まあそうじゃなくても怪しいと思ったけどね。…今ナギとも連絡してたけどこれからそれ暴くので一緒にやるぞ！)」

「(了解や！)」

そう龍ちゃんとも打ち合わせをし、その時に備える。

「まちな！」

「？」

「お前マクギル議員じゃねーな！正体を現しやがれ！！」

その言葉を合図に、ナギと龍ちゃんが炎で相手を燃やし、俺はハンマーコックした拳を相手のお腹めがけて打ち込む。

『なっ…』

「ちょーーー！ナギ…おまつ…何やってんだよ。タケルも龍牙もだ！」

「元老院議員の頭燃やして…しかもマグナム思いつきり食らわして

「どういつつもりだ!？」

「二人ともよく見てくれ！」

『何っ!？』

俺の言葉で二人はマクギル議員の方を向く。

するとそこにはマクギル議員の姿はどこにもなく、燃えている炎の中から出てきたのは丁度ナギや俺と同じぐらいの少年。少しお腹を押さえているがそれ以外はまるで何もなかったかのように悠然とそこに立っていた。

「：良く分かったね。千の呪文の男：それに銃神と獣王。：まさかこんな簡単に見破られるとは思わなかった。もう少し研究が必要かな？」

「ん〜研究っていうか演技力？喋り方とか雰囲気違いすぎるし、それにいくらなんでも言っている事が180度変わりすぎだろ？」

「せやな〜あといくらうまく化けたとしてもワイの鼻はごまかせへんで〜」

「：なるほど。勉強になったよ。それにしても銃神の拳は一体何なのかな？確か障壁で守られていたと思うんだけど、ダメージがしっかりのこってる…」

「ん？それは企業秘密だな。それを君に教えるほど仲良くないし…ね。」

「それは残念だね。じゃあ今度仲良くなったら教えてもらおうかな。」

「まっそんな機会多分ないと思うけどね。」

「やるぞタケル！」

「おっ！」

そうやって二人で突っ込む。

しかしそれは二つの影によって足止めを食らう。

「通しませんよ！」

「くらえ！！！」

「ちっ！！！」

ああコレが原作にあった仲間達か、確かに強いわ。マジでやってギリギリ勝てるかどうかって所かな。まあ然を使えばすぐにでも倒せるんだろうけど、アレは切り札だから使えないしな。そんな事を思いながら敵がはなつた魔法を防ぐ。

「強えぞやつら！！！」

「ハッハ！だが生身の敵だ！政治家だ何だとガチで勝負できない敵にくらべりゃ…万倍！！戦いやすいぜツ！」

「さすがはバカンやな。…でも同感や。一気にいくでえ！！！」

二人とも任せるとばかりに突っ込み。俺もその勢いに乗じて相手に

向かって攻撃を仕掛けようとするが、二人に阻まれてうまく本丸を撃つ事が出来ない。

そうしているうちにマクギル議員に化けていた奴が声を真似て応援を呼んだ。

「わしだ！マクギル議員だ。スプリングフィールド・ダテとそのペット・ラカン・ヴァンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！今も狙われている！軍に連絡をッ……！！！」

「げっ……！！！」

「やられたな。」

「君達は少しやりすぎだよ。悪いが退場してもらおう。」

「ハッ！その前にテメエの人生の幕引きが先だろ！！！」

そう叫びながらラカンとナギが突っ込むが、結局倒しきる事が出来ず、その後軍が部屋に乱入してきて、首都、そして連合から追われる事になってしまった。

「タカミチたちはだいじょうぶかな？」

「心配せんでもなんとかなるやる？」

「にしてもこれからどうすればいいか……」

「ガハハッ。傑作だぜ。退屈しねえ人生ってのは最高だな。」

皆思い思いの事を逃げながら喋っていると一人真剣な表情でいたナ

ギがボソツと呟く。

「姫さんがやべえな……」

「今の俺達じゃ下手に動くと余計に状況は悪くなるだけだと思う。だから今は……」

「ああ。とりあえず他の仲間と連絡が取れるようならとって隠れ家へ向かおう。」

「何かあったら隠れ家へ向かうという事は前から決めていた事だからあいつ等もきつと向かっているはずだろう。」

「だな。とりあえずは追っ手をまかないとな。」

そうラカンが締め、追っ手の軍から少しでも距離をとるように逃げるスピードを上げる俺達。

その後辺境を転々と移動しながら追っ手をまいていき、隠れ家へと向かうのだった。

第十一話：英雄 反逆者（後書き）

いかがでしたか？

この世界の雰囲気を変えず原作沿いにしてみたのですが、うまくいっていたでしょうか？

感想などありましたら、ぜひぜひ書いてください。

さて、ここで少し説明を…

作品の中でなぜタケルの拳が障壁を無視できたのか？

その疑問についてお答えしたいと思います。

まず知っておいてほしいのが、銃闘技のマグナムの最大の特徴です。マグナムの特徴とはずばり防御不能。ガードをしても衝撃が体を突き抜けると言うところです。

じゃあそれをネギまの世界でやってみるとどうなるか…考えたんですけど障壁突き抜けちゃうんじゃないかなって思ったんです。

グレートブリッジの時は幾重にも障壁が張り巡らされていたためそういったことが出来ませんでした、人の…それも一枚ぐらい障壁では関係無しに本体にダメージを与える事が出来ます。

ただし、あくまでマグナムだけです。他の銃闘技の技は障壁に阻まれてしまいます。絶対破壊攻撃であるマグナム系のみには与えられた付属です。

以上で説明を終わりたいと思います。

さて次回ですが、実はもう9割方で来ていて後は見直しか付け足したりするだけなのですが、ちょっとストックを増やしたいのでもしかしたら遅れるかも知れません。

何とか二日に一本のペースを保ちたいと思っていますが…

少なくとも今週中には投稿したいと思っていますので、次回も読んで

くださると嬉しいです。
それではまた次回よろしくお願ひします。

第十二話：騎士誕生（前書き）

おつかれさまです。

遅くなりました。

えー実はネット代金払い忘れてまして…今日までつながりませんでした。

書けたと思って投稿しようとしたらつながらないんですから、一瞬またMYPICが壊れたのかと思いました。

うっ…これからは気をつけます。

さてそれではどうぞ！

第十二話：騎士誕生

首都から追われ、一気に連合が敵になった俺達。

多分こつこつこのを波乱万丈とか言うんだと思うけど、あんまいいと無いなど改めて実感していた。

将来自記伝みたいのを書くとしたらこつこつ書くと思う。

”平凡な日常こそ最高の幸せ”

とまあ戯言みたいな事はおいといて…

俺達は何とか連合の追っ手を振り切り、隠れ家があるルシス大陸極西部オリンポス山に辿り着く事が出来た。

隠れ家に入ってみるともうそこには他の面子がそろっており、何があつたかをいろいろと聞かれ、説明し、皆顔色を暗くしながら納得していた。

「?…どうしたんだよ。確かに良くないニュースだけどよ。そこまで暗くなる必要はないんじゃないか?」

ナギがそう話すと、先に来ていた面々の中を代表してアルが俺達に事情を説明する。

「実はナギ達がこつこつにつくまで私達も可能な限り情報を集めていたのですが…帝国側に接触を試みていたアリカ姫が捕まったらしいのです。」

『……………』

アルの言葉に俺達は息を呑む。
今の状況を簡単にまとめてみると・・・

・”完全なる世界”によつて”紅き翼”は賞金首になり連合に追われている。

・戦争を早く終わらせるためにアリカ姫が帝国の皇女と会っていたがそれはほぼ失敗といつていい状態

・連合に対して発言力を持っていたアリカ姫が捕まり投獄されている。(原作通りならこっちの味方であろう帝国の皇女も同じく投獄されている)

うん。…これはやばいというよりもほぼムリゲーって感じだな。

力でこの戦争が終わらせられるならとつくの昔に俺達が終わらせていると思う。

それが出来なかったのは政治的なものが関係してうまく動けなかったからだ。しかもそれを担っていたアリカ姫が投獄され、こっちでうまく動けそうなのはガトウだけ。

そのガトウも連合から敵扱いされているから今までみたいに動けるわけがない。

オイオイ…コレがゲームなら俺はもう既に電源を切っているレベルだな。

「なあなあ…タケやん。これからどうなるん？」

「どうなるもこうなるも…やる事は一つしかないよ。」

「やっぱりそうなんか…。大変そうやな〜」

「軽いね龍ちゃん……。まあいいや。とりあえずは……」

「せやな。考えるよりも行動やな！」

そう俺達が内緒話をしている中他の面々はこれからどうするか話し合っていた。

皆たぶん考えている事は同じなんだろうけど、その危険性から発言できないみたいだ。

なら……ここは俺が一石を投じる事にしますか。

「皆……今俺達ができる事なんて一つしかないと思うんだけど？」

「タケル……いやしかしだな……」

「ガトウさん。確かに危険性は大きいし失敗したら終わりだと思うけど、それ以外できることがないと思うし、やらないと先に進めないと思う。」

「……タケルの言う通りだな。ここで必死になって考えても何も変わらない。ならやるしかねーだろ……！」

『……よし。やるか！』

「おう！……アリカ姫を助けるぞ！」

そこからの行動はかなり早かった。

情報収集能力が高い面々がアリカ姫がどこに投獄されているかを掴み、戦闘能力が高い面々で強襲、奪還と言う形になった。

そして決行の日。

正直こんなにもうまくいっているのか？と思うくらいに割りとおつさり成功してしまった。

まあもともと戦闘に特化している連中がいきなり強襲をかけるんだから、せめてあつちに俺達と同じぐらい戦えるやつがないと防ぐ事なんてできないだろうし。俺達のこと忘れていたのか、それとも油断していたのかは知らないけど、ザルと言っているいい警備だったし、ま、ともかくアリカ姫の奪還はすんなりと成功するのだった。

ちなみにアリカ姫とナギの掛け合いは見れなかった。

外で龍ちゃん達と暴れていたから仕方がないんだけど、それでも原作イベント見逃すのはちょっと勿体無かったかな〜とか思ったりしていた。

さてさて、そんな訳でアリカ姫とついでにテオドラ皇女の奪還に成功した俺達は隠れ家へと帰ってきた。

「何だ！これが噂の”紅き翼”の秘密基地か！どんな所と思えば…ただの掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだよ。このジャリは…」

「でも秘密基地ってこんなもんじゃないの？大体こんな所にそんなすごい建物つくったら秘密所が目立ちまくりでかなりあやしいですよ？」

「タケやんの言う通りやな。目立たんでナンボやるこんなもん。最低限休めて、あまり周りを気にせんと話し合いができればいいだけやと思うし」

「これらテオドラ皇女…」。

確か正式な名前は……長すぎて忘れた。まあテオドラ姫でいいや。

ん〜印象はやっぱりおてんば姫って感じだよな。仮にアリカ姫が綺麗ならテオドラ姫はかわいいが当てはまりそう。…性格についてはノーコメントだな。

「何だ貴様！無礼であろう！それに秘密基地と言っただからもつと期待してもいいではないか！？」

「へっへ〜ん生憎ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね。」

そう言っただけでラカンが逃走した。

……逃走？って！おい俺に丸なげするつもりか！？

「はあ…もうどうでもいいか。それと期待についてはお話の見すぎですから。」

「…主の名は？」

「申し送れました。タケル・ダテといいます。こっちの虎は龍牙です。」

「なんと！？お主等があのか？銃神”と”獣王”だということか！？」

「そつやけど？」

「うう〜む。聞いていた話と全然違うではないか…」銃神”は髪が紅く鋭い目つきをしておると聞いておるし、”獣王”にいたっては体のサイズがまるで違う…それに…」

あー確かに戦場で”炎帝”を使えばそんな感じになるけど、それを鵜

呑みにするのはどうなのよ？

大体俺普段はこっちの姿の方が多いと思うんだけどな…戦闘以外。

「……のうタケルよ。」

「なんですか？」

「……その龍牙なんじゃが…」

「龍ちゃん？それがどうかしましたか？」

「……妾に抱かせてはくれないかの？」

は？

「……だめかや？」

「……はあゝ。龍ちゃんどう？」

「まあ抱かせるくらいならええけど…」

と龍ちゃんがテオドラ姫に近づいた瞬間。

俺でも見失いそうなぐらいのスピードで一瞬にして龍ちゃんを抱きかかえて頬擦りをしている。

「ふおおおお…。このモフモフのフワフワ感。この抱き心地最高じやー！ー！」

「ちよ…やめ…やめてーな。あ、そこはあかん。あかんて…あ…あ…あはははははっ！ー！ー！」

おお。龍ちゃんがモテとる。

確かに普通に見れば、かわいいぬいぐるみが喋って、しかも動いているんだもんな。かわいいものの好きにはたまらない光景なんだろう。ぶん。いつも一緒だったから忘れてたわ。

「よかつたな龍ちゃん！モテて」

「よくないわ！頼む…ほんま頼むからたすけてや〜！！！！」

「むふふふ…。どうじゃ龍ちゃん妾のペットにならぬか？一緒に暮らそうではないか。」

「なるかポケー！！ええからもっ離さんかい！！」

「嫌じゃー！！もう絶対離すわけないじゃろーがー！！」

「ふう…。龍ちゃんにも春がきたのか。」

「そんな台詞いまいらんのじゃ！ええからはよ助けんかい！！このままやと…ワイ…ワイ…お嫁にいけんようになってまう！！」

「アホか。もともといけんだろうが。お前は雄だ」

「大丈夫じゃ。妾が娶るから心配するな。」

「ええかげんにせんかーい！！！！」

龍ちゃん体使つてまで俺たちを笑わせてくれるなんて…

くっ…さすがだよ。

とまあそんな事がありました、俺達は今隠れ家の中に集合。
今の今までテオドラ姫に弄ばれていた龍ちゃんは俺の肩でぐったり
としている。

時折”もうお嫁にいけへん…”とか呟いているが、それは聞かなか
ったことにしておきたい。

デオドラ姫はと言うとこちらをジッと見ながら指をくわえていた。
さすがにこれ以上は龍ちゃんが持たないのでやめて欲しい…龍ちゃ
んもとんでもない人に好かれたもんだ。

そんな中ナギがアリカ姫に向かって話しかける。

「さーて姫さん。助けてやったはいいいけどこっからは大変だぜ？連
合にも帝国にも…あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオステイアも似たような状
況で…最新の調査ではオステイアの上層部が最も【黒い】…という
可能性まで上がっています。」

「やはりそうか…」

アリカ姫を奪還して少しは状況が好転したといえはしたけど、それ
でもやっぱり厳しい状況なのはかわらないか。

まあそんなんであきらめる奴なんてきつとこの中ではないんだろ
うけどね。

俺ももう覚悟決めてるし。

「我が騎士よ」

「だあから。その”我が騎士”ってのは何だよ姫さん。クラスでい

「つたら魔法使いだぜ？しかも恥かしーしよー。」

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ならば主はもはや私の物じゃ」

「なっ…！！」

「オイオイ…物はねーだろ物は。言っている事は…まあ良いとしても、言い方つてもんがあると思うけどな。」

「帝国に連合…そして我がオスティア世界のすべてが我らの敵というわけじゃな」

「じゃが…主と主の”紅き翼”は無敵なのじゃろ？」

「世界すべてが敵　良いではないか！こちらの兵は8人と1匹…じゃが最強の8人と1匹じゃ！！」

「おお！なんかアリカ姫が輝いて見える！これがカリスマって奴か。始めて見たけどなんかやれそうな気持ちになるのは何でだろうな。ナギもそれもつてるっばいけど、普段が普段だけにあまりそれほど感じないしな。」

「ならば我々が世界を救おう。我が騎士ナギよ。我が盾となり剣となれ。」

「……へっやれやれ相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。…いいぜ俺の杖と翼あんたに預けよう」

「め…名場面キター…！！！！」

「やっぱここはかっこいいな。なんか心臓ドキドキしてるし、体も震

えてきた。

武者震いなんて二度目の経験だよ。

さあこの戦いのフィナーレまでラストスパート開始って感じたな。

そんな事を考えていると肩に乗っていた龍ちゃんがボソリと呟く。

「熱くなってきたな…」

「…だね。なんか体中がうずうずしてきたよ。」

「ワイもや。…血が滾ってきたわ」

「最後まで付き合ってくれるよね龍ちゃん？」

「あほ。あたりまえや。最後の最後まで一緒やで？…ちゅーかコレ終わっても一緒やけどな。」

そんな事言ってくれる龍ちゃんの頭を俺はやさしく撫ぜる。

それが気持ちいいのか目を細めて嬉しそうに撫ぜられている龍ちゃん。

初めて会った時はこうなるなんて思わなかったけど、本当に龍ちゃんにあえてよかったと思うよ。

「のじ…」

「ん？どうかしましたか？テオドラ姫？」

「まず敬語はやめよ。それに姫もいらん」

「はあ…別にいいで…いいけど。それでどうかした？」

「いや…なんだか震えておるようじゃったのでな？」

「えっ…？ああこれの事？心配ないよ。これは武者震いって言って怖くて震えているわけじゃないから。」

「そうかの。なら良いのじゃが…」

まあ他から見たら震えているように見えるのは仕方がないことなのかな？

武者震いって日本人特有らしいし。…まあホントかどうかはわからないけどね。

でもまさかテオドラが心配してくれるとは思わなかったな。

それとも俺達じゃなくて龍ちゃんの心配か？

だとしたらちよっとだけへこむな。

「ああ…それとじゃな。先ほどラカンからいろいろ話を聞いていたのじゃが、お主かなり強いらしいの。」

「まあラカンとかナギとかと一緒にされても困るけど、それなりに強いのは自覚しているよ。」

「それなり…それなりのう。お主がそういう割にはラカンは今まであった中で一番強いとか言ってたがの。…どついうことじゃろうか？」

俺にもわかりません。

普通に考えて、力で強いのはラカン。

魔法で強いのはナギ。

技で強いのは詠春…っとそれぞれ突き抜けているもんがこの”紅き

翼”に集まっているんだけど…

俺は全部中途半端でしょ？

多分あれだと思っ…器用貧乏って奴。

「ラカンが適当に言ったただけだろ多分？俺が一番なんかじゃないよ。

「いや。間違いなく俺様が闘った中で一番つえーよ、タケルはな。

俺がそうテオドラに話していると会話を聞いていたのかラカンがこっちにやってきて会話に参加してくる。

「はあ？何言っつてんだよ。俺なんて…」

「ばーか。誰が単純な力の話をした。オメーが一番つえーのはココだろ。」

そう言っつて拳を俺の心臓に当てる。

「確かに単純な戦闘力とかそんなもんは一番じゃねーかもしれねえ。あ、然は抜いてな？だが戦いっつて言うのはそれだけで決まるもんじやねーだろ。どんな状況においても潰れねえ、折れねえ、なくならねえ、ココの強さつてもんも大事なもんだ。それはお前が一番つえー。戦った事のある俺様が言うんだ。間違いねえさ。…そしてそれはここぞっつて言う時に俺達以上の力を出してくれるもんだ。あのグレート=ブリッジの時のようによ！」

「なるほどのう。ココの強さか…それなら妾はお主に期待しよう。」

「はっ？」

「アリカ姫の騎士がナギであるように、妾の騎士はお主じゃタケル。妾のために…そしてこの世界に住む者たちのために戦ってくれ。期待しておるぞ我が騎士よ。」

あれ…？なんでこんな事になってるの？

俺そんな柄じゃないんだけど…

「タケちゃん返事せんとあかんで？」

「龍ちゃんいくらなんでも俺は…」

「む…だめかや？」

あ…！！！！そんな泣きそうな顔をするなよ！

それに何この空気！？やらないといけない空気？

ラカンとかアルとかナギがニヤニヤこつちを見てるしよ…

う…あ…もう…！！

「…ったよ。わかったよ。俺の力あんたに預けるよ。目の前に塞がる敵すべて撃ち貫いてやるよ。この拳でな…！！」

「うむ！たのむぞ！」

は…なんでこうなった!？

……あと騎士っていうのはこの戦いだけの話だよな!？
ずっととか嫌だから俺は…！！！！！！

第十二話：騎士誕生（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想や質問などあれば気軽に送ってください。

さてこの展開なんですが、連載当初から決めていました。特に龍ちゃんとデオドラのくだりは絶対はずせない！！！！じゃなきゃわざわざサイズを小さくしたりしてません。

…こほん。すみません取り乱しました。

で、次回なのですが、また小話を挟みます。

タカミチ修行の様子を書いたものです。

挟むかどうか正直迷いましたが、ここを外すとまたしばらく出せませんし原作でも半年とか結構時間がたっているので丁度いいかな？って思います。

なので次回は小話です。

それではまた次回よろしく願います。

小話3：修行風景・男達の願い（前書き）

お疲れ様です。

ぽっかりと時間が空いたので今のうちに投稿しました。

今回は前回予告した通り、タカミチの修行風景です。

あくまで小話的な話で、内容は進んではいませんが、楽しんでもらえると思います。

小話3：修行風景・男達の願い

あまりの急展開さによく状況が理解できてないが、どうやら俺はテオドラの騎士になっただけらしい。

アリカ姫のことがうらやましくなったのか、それともただ騎士が欲しかったのかそれは俺にはわからないが、テオドラが本気で俺のことを騎士にしたかったということは良く分かった。

なぜならあれから事あるごとに俺を連れまわし…もとい護衛としてそばに置き。

俺が用事を出かけると、よっぱどの危険がない限りは一緒に行動するようになった。

まあそのつど甘えたり、龍ちゃんにちょっかいをかけているのは可愛嬌なのだろう。

でもこうして俺に甘えたりする事については最近では良かったと思っている。

いくらテオドラが偉い立場の人物だとしても、やっぱり歳を考えるといろんなことに興味を持ったりと、遊びたい盛りの年齢なのだ。きつと帝国に帰ってしまえば、また皇女としての仮面をかぶりそれっぽく振舞わないといけなくなる。

ならその時がくるまではこうしてわがままいったり、やんちゃしたりしていてもいいと思う。

やっぱり子供は笑顔が一番だと思うから…。

ただし…言うておくが俺はロリコンじゃない！！

アルと一緒にして欲しくないのだから声は大にしたいと思う。

……こほん。

少し取り乱してしまっただが話を進めたいと思う。

ナギ&俺の宣誓が終わってから俺達は”完全なる世界”に対して反撃を始めた。

ガトウを中心とした情報収集、そして作戦発案組みは、敵の拠点や陰謀に加担しているものを暴きそれを潰すための作戦を立案。

ナギ・ラカンなど行動組みは、それに従いながら敵を強襲・迎撃をする。

ちなみに俺は主に行動組みなのだが、時と場合によってアル達の組で行動している。

俺達自身にできる事はそう多くない。でも全員で頭を捻り行動していけばきつと光が見える！それを信じて今は必死になってできることをしていた。

そんなある日。

次の作戦まで何日か暇な時間が出来たため、弟子のタカミチと一緒に魔法球に入るようになった。

タカミチが弟子になってから、殆どを筋トレや、的に向かっての打ち込みをさせており、それを見るにそろそろ次のステップ：技の段階に入っただろうと思ったのが理由だ。

なぜか当然のようにナギ・ラカン・テオドラそして詠春と一緒に魔法球に入ってきているのだが、そこは突っ込まない方向でいきたいと思う。

「さて…これから技の修練に行きたいと思うけど、覚悟はいいか？」

「はい！」

「ん。いい返事だ。ならまずコレを渡しておこう」

そうやって俺はタカミチに指輪を渡す。

「これ…一体なんですか？」

「それはこの魔法球に入っても歳をとらなくするための指輪だ。技の修練にはそれなりに時間が掛かる。ある程度形になれば外で修練していけばいいけど、それまではココで修練する事になると思うかな。…嫌だろ？現実世界に戻った時に老け顔になってるの」

「それは…その……はい。」

苦笑いしながら返事をするタカミチ。

まあ原作を見てると強さの引き換えとはいえあそこまで老け顔になるのは正直かわいそうだと思う。

ももとの歳でそうなるのだったら仕方ないけど、魔法球に入り浸ったせいでそうなるのぐらひは変えてあげたい。

まあ…優しさって奴だな。

「よし。じゃあ始めるか！」

「よろしくお願いします！」

指輪をちゃんとはめて律儀に頭を下げるタカミチ。

さて…一体何から教えようかな…。

「いいよなーあの指輪。俺にもくれねえかな」

「本当だぜ。そうすれば気軽にこの魔法球の中に入って戦えるのに

よし…」

「うん。銃闘技は血液の流れを利用した格闘技なのさ。独自の鍛錬によって作り上げられた筋肉と心肺機能。それによって生み出される強力な血流を操作してあそこまでの威力スピードを生み出しているというわけ。」

「たしかに…筋トレについても的撃ちについても聞いたことがないものばかりでしたけど…」

「だよな。だけどその鍛錬をしっかりとこなさないと使えないんだよ。だからこれからもあの筋トレと的撃ちは続けておこなうように。技の修練に入ったからといっても、体作りが終わったわけじゃないからね。」

「はい！」

「よし！じゃ…まずなじみが深そうな近距離系の技から入ろうか。」

まだ話しておかなくちゃいけない事は沢山あるけど、いきなり一片に話しても多分頭の中が整理できないだろうから、ここで一度話を打ち切って技の修練に入る。

近距離系から始めたのは居合い拳を撃つための格好と似ているし、やっている事もさほど変わりがないからうまくいけばコツがつかめるだろうと思ったからだ。

「いいかい？まず教えるのはマシンガン、俺も良く使う技の一つだよ。この技はとにかくスピードが命だ。相手に反撃を許さないぐらいに数を撃たないと意味がない。スピードを突き詰めるために威力・正確性を犠牲にしてるからね。」

「マシンガン…それってやっぱり銃火器のマシンガンをイメージす

ればいいんですか？」

「正解。つというか銃闘技って言うてるぐらいだからね。ほぼ名前と同じ銃火器をイメージすればどういった技なのか想像できると思うよ。」

「分かりました。」

「じゃ一回手本見せるからその後我真似してやってみて。」

「はい！」

こうしてタカミチ強化の修行が本格的に始まった。

技の修練のやり方は大体こうだ。

まず最初にどういった技か説明し、目の前で実践。

その後タカミチが同じようにやってみる。

それから直すべき所を指摘して、またタカミチがやる。

これの繰り返しである。

なんにせよイメージと、とにかく数をやらせる事が一番大切だと思う。

イメージについては簡単。目指すべき物がはっきりした方がどんどん前に進む事が出来るから。

数については自分でコツを掴むしか方法がないから。

俺とタカミチではきつと体の感覚とかが違ってくるから、こればかりは数をこなさせるしかない。

もちろんある程度形になってきたら、俺が掴んだコツなんかも言っていくつもりだけどそれはあくまで参考。

自分の物にするには自分でコツを掴み完成へと導いていくしか方法がない。

それが銃闘技を見につけた俺の結論だった。

今は手探りで、しかもなかなか思うようにいかなくて苦しいだろうけどそこを乗り越えないと銃闘技は使えない。

俺から言えることは”頑張れ”の一言だけ。

あの時俺に向けた目と言葉が本当だったら乗り越えられると思う。

だから頑張れ！

.....

「よーし今日はここまで。」

日も傾き、辺りが暗くなり始めたところで今日の鍛錬の終了を告げる。

「はあ…はあ…あ…ありがとうございました。」

苦しそうな顔をしてその場に倒れこむタカミチ。

きつと今体が重くて動けないんだろっな…。うんうん。俺も経験したよ。

「タカミチそのままでもいいからちよっと話を聞きな。」

「は…は…」

「今、体中が重くてしかも目の前がチカチカしてるだろ？違うか？」

「してます」

「それが銃闘技の弱点だ。」

「へ…？」

「たとえ話をしよう。本来銃というのは弾を火薬で打ち出す兵器だ。そのため弾や火薬が無くなれば兵器としては役に立たない。そしてそれは銃闘技も同じ。銃闘技にとって弾とは血。火薬とは心肺機能…いやスタミナだな。そのことを言う。つまりどうということかわかる？」

「えっと…血が無くなれば使えなくなるってことですか？」

「まあ概ね正解。実際は血が無くなるなんてことはまず無いから、血が通っている血管。特に腕の血管を傷つけられたりするとうまく使えなくなる。スタミナについてはそのまま、数を撃つために他の格闘技とは桁違いのスタミナが必要となってくる。それと同時にマシンガンのような連射技は突き詰めて行くと無呼吸運動になりすぐに酸欠になってしまうんだよ。」

「なるほど。」

「タカミチの今の状態はね、酸素不足が大体の原因。うまく酸素が頭に行き渡ってないため目の前がチカチカしてるんだよ。これは銃闘技を使っていく限り避けられない事だから良く覚えておくように。もちろん鍛錬をしていけば、鍛えられてそう簡単にこうなる事はなくなるけど。…まあ弾数が増えるって言えばいいのかなあ…。だから

ら日々自分の限界を超えるのを目標に鍛錬に励むこと。わかったか
「？」

「はい！」

「よし。じゃさすがにここで寝るのはどうかと思うから、家に言っ
て柔軟して風呂に入って寝な。」

「はい。」

そう言っただけで体を動かさずとすがるが、思うように体が動かないのか立
てないみたいだ。

「龍ちゃん。」

「了解や。…ほらタカミチ。ワイの背に乗り」

近くで見守っていた龍ちゃんが、本来の姿に戻りタカミチを背に乗
つける。

「ありがとうございます。龍牙さん」

「ええて。…それとワイに敬語はいらん。呼び方も龍ちゃんてええ
で？」

「ありがとうございます。龍ちゃん」

「そっちの方がしっくりくるわ。…なら落ちんように気をつけや」
タカミチを背に乗せた龍ちゃんが明かりが見える家へとゆっくり、

なるべく揺らさないように移動して行く。きっとテオドラやナギがメシを食べているだろう。さっきアルとかゼクトもこっちに来てたから誰かご飯ぐらい作れるだろうしな。

「お疲れさん。」

「酒とつまみ、後メシもってきたぜ」

「ついでにタオルももってきてやったぞ。」

タカミチを見送って一息つくと、ご飯と酒をもって詠春とラカン、そしてガトウがこっちにやってきた。

「ありがとう。それにしてもガトウさんは何時こっちに？」

「ああ。結構前にな。お前たちの鍛錬の邪魔にならないように声はかけなかったけど、少し見せてもらったよ。お前の強さになっとくしたよ。あれほどハードな鍛錬をすれば強くない方が嘘だ。」

「ははっ。俺はもうなれましたけどね。まだ最初のうちは体がうまく使えなくて辛いでしょうが、慣れていけばそこまで辛くは無くなりますよ。」

「なるほどな。…それでタカミチの奴はどうだ？」

お酒を俺に渡しながらガトウが聞いてくる。
きつとそれが聞いたかったのだろう。詠春もラカンもこっちに顔を向けてくる。

「…下地は順調に出来上がっています。技については今日始めたばかりだから正直まだわかりません。ただやる気と意気込みがすこ

いので、もしかしたらすぐにでも形はできるかもしれないですね」

「そうか…」

どこかうれしそうな顔をしながら呟くガトウ。

そばで聞いていたラカンや詠春も同じように何処か嬉しそうだった。

「あいつは他の奴らからいつも才能がないといわれ続けていた。…生まれた時から魔法が使えないせいだな。魔法なんて選択肢の一つでしかないって言うのに、この世界じゃそれしか評価するものがないと言わんばかりだ。」

「まあそれは…なんとなく分かりますよ。」

俺も正直そこがよく分からなかった。

確かに生まれた時から魔法と言うものが身近に存在していて、それが使えないとなるとどういうことになるか安易に想像がつく。

現に”サムライマスター”と呼ばれ英雄扱いされている詠春でさえ、ごく一部の人間からはあまりいい印象をもたれていない。

俺から言わせてもらえば、詠春の力と技こそ真に評されるものだと思うんだけどな。

「だから俺はタカミチに居合い拳を教えた。魔法なんか頼らなくても強くなれる。そう思っただけでなく…。だからあいつが必死になっただけで強くなっていくのを見るとうれしいんだ。」

「私も同感かな。才能だの、魔法だの…たかがそんなものに胡坐をかいて偉そうにしている奴らよりタカミチの方が何倍も素晴らしいと思うし、尊敬できる」

「ハツ：そんなの当たり前だる詠春。魔法を習ってそれが使えた：それだけで強くなったと勘違いしている奴らと今のタカミチを一緒にするなんざタカミチに失礼してもんだぜ。本当の強さってのは数え切れないほどの鍛錬と経験、そして意志の強さって決まってるんだよ。」

「へえ：ラカン言うじゃないか。でも俺も賛成だよ。あいつはきつと強くなる。それはけして才能と言う言葉だけで片付けられるモノじゃない。」

そう言ってみんなで顔を見合わせてニヤリと笑う。

何の因果か知らないが、ここにいる全員魔法というものにあまり頼っていない。

全員が全員己の肉体と鍛え上げた技で戦っている。

：まあ俺は魔法も使ってはいるがあくまでそれは技の威力をあげる為のもので普段の戦闘では殆どとっていいほど使ってははいない。

「：まあ俺もここまでいろいろと魔法を認めないような感じで喋っているが、別に魔法が嫌いって訳じゃないからな？」

何を思ったかガトウがそう皆に言うと、一瞬あつげにとられそのまま大笑する。

「それぐらい分かっているさ。：それよりも」

一通り笑い終わった後、詠春がそう話、酒を注いだ杯を上を持ち上げる。

それを見て俺たちも杯を上を持ち上げ、詠春の言葉を待つ。

「タカミチのこれからの成長を」

詠春がそう言い

「タカミチの修行の成功を」

ガトウがそう続け

「タカミチが俺様達に追いつけるように」

ラカンもそれにあわせるかのように話

「タカミチがタカミチだけの強さを手に入れますように」

俺が最後に締める。

そして全員タイミングを計ったかのように叫ぶ。

『『乾杯!!』』

タカミチのこれからの成長に期待し、男達は酒を飲む。

いつかこの場所にタカミチが入って同じように酒を飲めるように…
そんな事を願いながら…

小話3：修行風景・男達の願い（後書き）

いかがだったでしょうか？

修行とかもつと戦闘っぽくど派手な感じでやった方が良かったですかね？

とは言ってみたものどうしても修行は地味になりやすいのでそこはご勘弁を…

さてまた次回からは話が進みますととうとう”完全なる世界”と対決します。

うまく魅せれるように頑張りますのでこれからも応援よろしくお願ひします。

あ、感想とかもいつでも募集しますので気軽にどうぞ！

ありがたく思いながら返信させてもらいます！

第十三話：決戦・前（前書き）

お疲れ様です。

予告通り投稿させてもらいました。

さっそくアンケート答えてもらって嬉しいです。

三人ともヒロインにしてほしいとかでもかまわないのでどしどし書き込んでください。

それではラストステージ前編どうぞ！！

第十三話：決戦・前

魔法球の中でタカミチの修行をつけている間にも周囲の状況は刻々と変化していった。

連合と帝国が大々的な戦闘をおっはじめれば、両軍を止めるために俺達は戦い、その間に”完全なる世界”の拠点を一つ一つ確実に潰していった。

もちろん自分達の敵は帝国や連合ではなく、それを操っている”完全なる世界”だということの説明するのも忘れない。

その説得のおかげなのか、犯罪者として狙われていた俺達にも少しずつ味方が増えていき早くこの戦争を終わらせるために多くの人達が力を逢わせて戦っていった。

そして半年後：とうとう俺達は”完全なる世界”の親玉がいる拠点を見つけることに成功したのだった。

.....

昔見ていた二次小説の中で書いてあった長編映画になるっていうやつが良く分かった。

これは確かにそういわれても仕方がない。

俺が思うに映画にもなった某物語を現実で再現されているような感覚に陥る。

実際現実に行くと夢も希望もないのだけど...

さてその物語にたとえるなら映画で言う三作目。

とうとう最後の締めの部分までやってきた。

そう：“完全なる世界”が根城にしている世界最古の都・王都オスティア空中王宮最奥部。

墓守人の宮殿へと…

「あ、…あの！ナギ殿！」

「ん？なんだ？」

「ササ…サイン！お願いできないでしょうか！？」

「お？おお…いいぜ？」

辺りがピーンと張り詰めている緊張感の中、セラス総長がナギにサインをねだっていた。

なんとというかこの場面でそれが言えるセラス総長は肝が据わっているというか、空気読めていないとでも言うのか…いやはやなんとも言えない感じがする。

すると微妙な表情を見ていたのか肩に乗っている龍ちゃんが声をかけてくる。

「なんや？うらやましいんか？」

「い…いや！？そんな事はないけどさ…ただ最終決戦のはずなのになんでこんな変な空気になっているのかな？って思ってたね」

「あー…まあええんとちゃう？下手に緊張するよりましやろ？」

「まあそうだけどね」

そう言って二人で笑い合う。

ちなみに前俺達にファンクラブが出来たと言ったと思うが、何故か俺のファンクラブには女性が少ない。まったくいないわけじゃないのだが、なんだかちょっと悲しくなってくる。

なんでも俺のファンの殆どはタカミチぐらいの子供とか若い男性が中心で、俺自身の強さと言うよりは銃闘技に憧れている人が殆どらしい。

その人達曰く……”銃をもしてつくられた銃闘技……イカス!”とか”コレに燃えなきゃ男じゃねえだろ!?”とかそんな意見ばかりである。

まあ確かに本家の漫画でも男気が凄かったらしいけど……やっぱり男として生まれたからには女の人にちやほやされてみたいという願いはあるわけで……うん。考えると涙が出そうだからもう考えるのはよそう。

でもやっぱり……主人公つてのはもてるのが当たり前なんだね。たしかこの物語の中では俺が主人公のはずなんだけど……

「タケヤん何考えとるんかわからんけど……とりあえず涙拭き?」

「な……泣いてなんかいないんだからね!??」

「なんやそのキャラきつもいわ〜」

龍ちゃんはこの戦いが終わった後じっくりと拳で語り合つとしよう。コイツのファンクラブも女性多いからな。

”カッコイイのに、カワイイ”とか”私の肩にも乗って〜”とか……親友って思っているけどそれとこれは話が別だ!!

「しっかしよ〜不気味なぐらい静かだな奴等」

「なめてんだろ?悪の組織なんてそんなもんだ」

「ラカン。油断するな！相手は強敵ばかりだぞ！？」

「へいへいわーってるよ詠春。」

「ともかくあの少年達のことだから何かあるんだろ？警戒しつつも早く準備を整えようぜ？」

俺がそう締めると皆頷き道具の点検をしたり体を少し動かしてこれから起こる戦いに備える。

するとさっきまでナギにサインをねだっていたセラス総長が真剣な顔つきでこちらにやってきた。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混合部隊準備が整いました！」

「おう。あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺たちが本丸に突入出来る。頼んだぜ！」

「ハッ！おまかせください。」

俺達の前で敬礼をすると、準備が完了している部隊に指示を出すためにこの場を後にする。

さっきまでのセラス総長はどこにいったのだろうか？

なんてバカな疑問を考えつつも戦場を見渡し気持ちを戦闘状態まで持っていく。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国に行っているタカミチと皇女も同じだろう。決戦を遅らせる事はできないか？」

ガトウが通信でそう言うてくる。できる事なら俺達だって遅らせた

い…でも…

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ…。彼はもう始めています”世界を無に返す儀式”を…。なぜなら世界の鍵”黄昏の姫御子”は今彼等の手の中にあるのですから」

「ああ」

「…：…そうか。こっちも少しでも早くそちらに向かえるよう力を尽くす。…：皆死ぬなよ。」

『おっ！』

「じゃあヤロウドも…：…いくぜ！…！」

ナギの掛け声で俺達は大勢の敵へと突撃を開始した。
心は不安でいっぱいだ。

「ただど勝ちたい…：いや勝たなくてはいけないんだ！
ハッピーエンド目指すって決めてるんだから。」

さあ戦闘開始だ！
オープンコンバット

「道を開けな！…！」 千の雷”

ドゴオオオン！！！

「オラオラオラアァー！！！！俺様達を止めようなんざ1000年はえーんだよ！！！」

ドドドドドドドドオオオン

ナギとラカンが持ち前の魔力と力を使って敵を混乱させ、本丸へと続く道を作っていく。

俺達といえばナギ達の撃ち残しを倒しながら被害を広げ、この後戦うであろう混合部隊の為に少しでも敵を減らして行く。

ここであまり体力や力を使いすぎないようにナギ達と交代しながら進んでいき敵の本丸へと入っていった。

「オラアァー！！！」

「邪魔すんなや！！！」

予想はしていたのだが、やっぱり敵の本拠地と言う事はありそこら中にトラップや敵がうじゃうじゃいる。敵はまあ外にいるやつ等よりは強かったと思うけど、所詮はモブで名前もないザコキャラ…俺達の敵じゃないな。

それにトラップとか最初見つけたときは避けるとか解除しなくちゃいけないからめんどくさいっておもったんだけど、目の前にそんなのかんけーねーっと言わんばかりに力づくで壊していつている奴らがいるんだから…やっぱりバグと呼ばれている人達は違うな。それにしても…

「…んーあいつ等は何のためにトラップ何か仕掛けたんだろうな？」

「ん〜？大方あれちゃう？足止めできればいいとか考えとったんやろ？」

「だろうな。だが…まあ…無駄だな」

「無駄ですね」

「無駄じゃな」

「ハッハー！！なんだこんなもんで俺様を止められるとも思っただんなのか！？」

「邪魔なんだよ！！」

はい。皆様お気づきの通りナギとラカンが手当たり次第ぶっ壊しています。

しかも中心に行けばいいとかきつと考えているのでしよう。

目の前に壁があつたらそれをぶっ壊して直進しているんです。

確かに最短距離を進んでいけばそれだけ早くつくんだろっけどさ…さすがに壁壊しても直進するとか、それってどうなんだろっ？

「………宮殿残るかな？」

「武。答えが分かってていうもんじゃないぞ？それにいいじゃないか…」

「え？…詠春さん？」

「フフフフ…今更どんだけ壊しても頭を下げる必要はない。それこそ宮殿壊してもな。最近ストレスが溜まりに溜まっていたんだ。」

「丁度いい」

いや…あの…詠春さん？目が反転してるんですけど？
どれだけストレス溜まってたんですかー！！！！
黒い…黒いよ詠春さん！！

「…アルはん。これが終わったら詠春の為にクスリでもつくっても
らえへんか？」

「…そうですね。そうしましょう。彼が壊れてしまったらいろいろ
とダメになりますから。」

「詠春も疲れとったんじやのう…。すこしでも優しくせんとあかん
な」

「フハハハハハ…邪魔者はすべて切り捨てる！！！！」

これが修羅って奴か…
ああは絶対なりたくないな。

.....

「うづらあああ…！！！！」

ドゴオオオン！！！！！！

「おー？なんだか広い所に出たぜ？」

「どつやらこの先がこの宮殿の中心部分みたいですね。」

「…まったく。まさか壁を壊しながらこっちにくるなんて、乱暴にもほどがあるよ」

ラカンが壁を壊し皆あたりを警戒しながらそこにはいると、丁度その中心には忘れもしないあの少年が佇んでいた。

「あ！テメーは…」

「久しぶりだね千の呪文の男…。まった君達のおかげでここまでやってきた事がすべて水の泡だよ。」

「ハツそいつは良かったぜ。テメーらがやっている事は気にいらねえ…。だからぶっ飛ばす」

「あいかわらず直線的だね。…だけど僕もその意見には賛成さ…
…君達はやり過ぎたよ。ここで死んでもらう」

そう少年が言うと今までどこに隠れていたのか、急に人影が現れ俺達一人一人に向かって突撃し、その場から遠ざける。
そして気付いたらこの場所には俺とあの少年の二人になっていた。

「…で、俺の相手はお前って事か？」

原作だとコイツはナギが相手することになってたんだけど、これは俺が介入した事によって変わった所なんだろうな。

てつきり適当な相手が俺に来ると思ってたんだけど、あてが外れた。

「そつだよ。本当なら僕の相手はナギだったんだけどね。…どうし

てもあの時の借りを反したくねて無理を言ってお願ひしたのさ。」

「借り?…おいおい借りがあるのはこっちのほうだろ?」

「まあそつちも借りはあると思うけど、こっちにはこっちで借りがあるのさ。」

そう言うと少年は少し笑い体を動かし始めた。

「僕は魔法に結構自信があつてね。障壁も、そんじよそこらの魔法使い何かじゃ破れもしないぐらい強力なはずなんだけどさ…それを破るのではなく突き抜けさせた。それがちよつと悔しくてね。だからこうして君と対峙してるってわけさ。」

「なるほどな。…にしても冷静そうに見えて実は結構熱血タイプなのか?」

「自分でもこんな気持ちになるのは驚いているさ。…でも悪くないね」

「そうか…。ははっなんだか俺お前のことちよつと好きになつたよ。」

「お?それはうれしいよ。まあ僕も君の事は嫌いじゃないけどね…」

俺達は和やかに会話をしながら、コツコツと中心に向かって歩いていきその間に少年と俺は魔力を高めながらすぐにも動けるように準備をしていく。

そしてある程度近づいた所で俺達はそこに立ち止まりすぐにも戦闘がおこなえるように構える。

「…そういえばあの時はいろいろあつて名前聞きそびれたけど、なんていうんだ？」

「そういえばそうだったね。本来僕には名前なんてもんはないし、呼ばれている名前も気に入ってないからね…僕の事を呼ぶならフェイト…フェイト・アーウェルクスって呼んでくれないか？」

この名前を聞いて俺は愕然とした。

なんだって！？なんでここでもうフェイトが出てくるんだ？

たしかここで来るのは確か一番目…フェイトじゃなかったはずなのに。

フェイトの話聞いてる限りだと、元老院議員に化けていたのもどうやらこいつらしいし…

いろいろ変わっちゃまったみたいだけど、それはそれでいいか。それに丁度いいのかもしれない。

フェイト…コイツは間違いなく俺達と同レベル。

今まで稽古として詠春やナギ、ラカン達と戦ってきたけどそれはあくまで稽古。

同レベルの人物と真剣に戦ったのは詠春と戦った時以来になる。

あれから俺がどれだけ強くなれたのか確かめるチャンスだろ。

あれ？俺、戦闘狂じゃなかったはずなんだけど…もしかしたら銃闘技を扱っているせいで、剛打銃のようにスリルを楽しむようになったのかな？

ははっ…俺も龍ちゃんやラカンのこともう言えないな…

「わかったフェイトだな。」

「君の名前知ってはいるんだけど、君から教えてもらえるかい？」

「俺の名前はタケル・ダテだ。好きに呼んでいいよ。」

「じゃあタケちゃんど…」

「タケルと呼べ、タケルと！」

「冗談だよ。」

そう言つてクスクス笑い出す。

性格原作と違つてねえか？まあこっちの方がとっつきやすいし、親しみも沸くんだけどさ。

何か調子くるうな。

「さて、君と話すのはとても楽しいんだけどそろそろ始めないとね。」

「…そうしようか。」

「じゃあ」「それじゃ」

『始めようか！…！…』

第十三話：決戦・前（後書き）

いかがだったでしょうか？

この展開を読んでいた人は果たして何人いるのだろうか…

今回はフェイトとの本格的な戦闘となります。

今書いたものを修正中ではありますが、それなりにうまくかけているのかな？

自分では結構やりきった感があったりしてます。

ヒロインも公開してはやく武たちと絡ませていきたいので頑張ります！！

ではまた次回楽しみにしてください。

PS：アンケートの結果は活動報告で報告させてもらいます。予定としては十三話が終わった頃になると思いますのでそれまではアンケート続行となります。気が変わったり、やっぱりあのキャラも追加して欲しいと思ったらいつでも感想に書いてください。

第十四話：決戦・中編（前書き）

お疲れ様です。

寒い夜には熱い二次小説を：

みたいな感じでお送りしたいと思います。

原作フェイトが好きな人には正直ん？っと思う所が何度かあるかも
知れませんがその辺はご了承ください。

それではどうぞ！

第十四話：決戦・中編

【Onther・Side】

ビシッ…

どこからともなく音が聞こえてくる。

それは戦いの始まりであった。

先ほど、戦いを決意しそれを言葉によって表明した二人だったが、その後はまったくといっていいほど動かず…いや動けず、その場でじっと動き出す切欠をまっていた。

そしてそれは起こった。

…二人は敵を互いの得意な距離に置こうと動き出す。
最初に仕掛けたのは、武からだった。

「オン・ファスト・ガン・ペンスリット

” 契約に従い我に従え炎の霸王” ” 来たれ浄化の炎” ” 燃え盛る大剣”

” ほとばしれよ” ” ソドムを焼きし火と硫黄” ” 罪ありし物を死の塵に”

” 燃える天空” “！！” ” 固定” ” 掌握” ” 術式兵装” …… ” 赤熱の騎士” “

「いきなり” 闇の魔法” かい？これは評価されているかと思っていいのかな？」

「ああ。最初から出し惜しみなんてしてたらすぐにも負けそうなんだな。…それに勝負は楽しみたいが時間がないのも事実。だから

早く決着をつけたいと思ってね」

「つれないねえ……。だけどその技はたしか”炎帝”って名前じゃなかったけ？」

「”炎帝”の名にもっと相応しい技を習得したからね。これには改めて名前をつけさせてもらったのさ。」

「なるほど……。じゃあまずはその”炎帝”を引っ張り出さないといけないかな？」

「この”赤熱の騎士”もなめないで欲しいな。フェイトたちが調べていた時よりも数段威力共が上がってるんだから……」

武がそう言い放ちフェイトに向かって炎を纏ったガンブレットを撃つ。

その威力は武が言った様に、今までとは比べものにならないくらい強力。

言ってみれば”豪殺居合い拳”に炎が螺旋を巻くようにまとわりついている感じだ。

それを見たフェイトは最初受け止めようと構えたが、背中にゾクリと冷たいものはしりその場から退避する。

ドゴオオオオンー！！

すると先ほどまでフェイトがいたであろう場所には大きなクレーターが、そして地面は所々黒くこげていた。

しかも中心には拳の痕がくつきりと残り、その拳の威力の凄さをまざまざと見せ付けているようだった。

「…なるほど。確かに。さっき言った言葉は訂正させてもらおうよ。本当に君の拳は危険だね。」

「ま、これでも”銃神”とかたいそうな名前をつけられているんだ。これくらいは出来ないとか名前負けするだろ？」

「ふう…」銃神”ね。いままでも十分名前負けしてなかったと思うけど…。やはり君は”紅き翼”の中で最も注意すべき相手だと思うよ。」

「嬉しい事言ってくれているけど、”紅き翼”の中じゃ強い方だとは思ってないんだ。注意するべき奴は他にもいるさ…」

「やれやれ…：自覚していないのがもつと腹立たしいね。…そして何よりも恐ろしい。」

「言ってる。オラア！！どんどん行くぜ！！」

強制的に会話を終わらせると、先ほど撃ったガンブレットをフェイトに向かって連射する。

その多さにフェイトも顔を歪めながらも致命傷を避けつつよけて行くが、その眼光は鋭く、わずかな隙も見逃さないように相手を睨みつけ、そしていつでも魔法が撃てるように準備をしているようだった。

一方武の方と言えばこちらもまた、ガンブレットを連射しながらもフェイトが魔法を撃つタイミングを計っていることを重々承知しており、撃たれるにしてもなるべくこちらがいい状態で次につなげられるように注意しながら相手を追い詰めて行く。もちろんこのまま終わって決めの一発を食らわせれるならそれに越した事はないと思っではいるが、相手は少なくとも俺よりは下の実力者ではないフェ

イト。

そう簡単にいくとは思えなかった。

「くっ…隙探そうにもこう威力のあるものを連射されたら隙なんて見つかりそうにないね。…：…ならここは少し強引でもちよっとおとなしくしてもらおうか…！」

フェイトがそう呟くと、ガンブレットをギリギリまで引き付けて避け、相手が次を撃つ前に無詠唱魔法を繰り出す。

「千波黒耀剣…！」

するとフェイトの周りに無数の石の剣が出現し、武に向かって突っ込んでいく。

それを見た武はガンブレットを撃つのをやめ、ガンマンポジションに構えを返るとすべて撃ち落す。

「これくらいなんてことない…！」

「そんな事分かっているよ。でもこれで少しは時間が稼げた。今度は僕からいかせてもらおうよ…！」

「”障壁突破””石の槍”…！」

フェイトがそう唱えると、武の足元から急にとがった石が武のお腹を指して伸びてくる。

「チッ…！」

それをバックステップでよけ、すぐにフェイトに向かって攻撃を仕

掛けようとするが、目の前にはフェイトの次の攻撃が迫っていた。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト

”おお…””地の底に眠る死者の宮殿よ””我らの下に姿を現せ”

”冥府の石柱”！！”

「まだだよ。『二重詠唱』

ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト

”おお…””地の底に眠る使者の宮殿よ””我らの下に姿を現せ”

”冥府の石柱””連続投下”！！”

あつという間に武の前には大きな一枚岩が次々と投下され、武を潰さんと迫ってくる。

「くそ…。同じタイミングで落としてくれればそれなりに楽なのに、わざと遅らせて撃つとか…性格悪いぞ。フェイト！！”

「それは心外だよ。それに君のガンブレットに比べればこんなの全然ましだろ！？そらどんどんいくよ！！”

武にそう言われ、心底心外だといわんばかりに呆れた顔をしながら次の魔法を唱え始める。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト

”小さき王””八つ足の蜥蜴””邪眼の主よ”

”その光””我手に宿し””災いなる眼差しで射よ”

”石化の邪眼”！！”

するとフェイトの手から光線が発射され、それを見た武は聞こえてきた呪文と背中に感じた寒気を信じずぐさま、その場から離れる。

そしてそれは正解だった。

先ほどまで武がいた場所では不気味な石のオブジェができていたのだから……

大方、フェイトと武の戦いを影でこっそりと見て隙あらば武をしとめようとしていた、フェイト側の人物であろう……今にも後ろから殴りかかろうとしていた所を”石化の邪眼”によって石像となっていた。

「……あつぶね。にしても味方まで巻き添えかよ……。」

「味方？……せつかくの決闘を邪魔しようなんてやからなんて味方じゃないさ。それにしても……さすがの”闇の魔法”でもその様子だと石化は防げないみたいだね。」

「それを承知で使ったんだらどうせ……。」

「確証はなかったさ……でもこれで君に有効な攻撃方法が分かったよ」

「ふっ……だからと言ってそう簡単に使わせるかよ。」

武は突撃形態 アサルトル・ポジション をとると、宙に浮かんでいるフェイトめがけて突っ込む。

しかも足の方に魔力を集中したおかげか、まるでロケット噴射をしたのように炎の道を空に描きながら突っ込んでいく。

「くっ……旧世界で見たことがあるミサイルみたいだよ。まあ……威力もスピードも桁違いだろうけどね。」

「お褒めいただき光荣だ……お礼に一発くらっていきな！」

「それはごめんごつむるよ！」

「えんりようすんな…よ…！」

武の突っ込んでくるスピードに魔法は撃つ暇がないし、逃げるのにも無理があると判断したのか、その場で魔力を集中させて武の拳を防ごうと突き出した手で向かってくる拳を払おうとする。

フェイトの考えでは銃弾と同じく側面から衝撃を与えれば武の拳は方向を変えて防げると思ったのだろうがそれは甘い考えだと思いき知らされる。

「ぐっ…!!！」

払おうとした手をはじかれてそのまま武の拳は吸い込まれるようにフェイトの体に突き刺さっていた。

「続けていくぜ!!セカンド!サード!…」

一度懐に入ったらもう武は止まらない。

体を回転させてながらハンマーコックをしていき、二発・三発とフェイトにマグナムを撃ちつけていく。

その間フェイトも何とかしてこの間合いから脱却しようとする後ろに向かってバックステップをするのだが、リボルバーマグナムの特徴の一つがそれを許さない。

リボルバーマグナムは回転しながら次のショットに繋げていく為、セカンド・ショット サード・ショットと続けると遠心力によりどんどん撃つスピードが上がっていく。しかも回転は相手の懐に飛び込む役目もしており、一度マグナムからリボルバーへと繋げられると回避するのが難しくあつという間に最高弾数である6発を無防備に打ち込まれてしまうのである。

うにうごかねえじゃねえか。ちつ…はやく動けよ俺の体！！あいつがこんなチャンスのがす訳がねえ。すぐに追撃がくるぞ！！」

武は必死にうまく動かない体を無理やり動かすが、体は動いてくれず片膝を付いたままだった。

それも仕方がないことだろう。マグナムをフルショットした後遺症のブラックアウトに加え、スピードが乗った所にカウンターであわされてしまえば、どんなにタフな奴でもすぐに体が動くわけない。武はかすむ視界の中せめてフェイトの姿でも見えればと、必死になつて探すが目の前にはフェイトの姿などどこにもなかった。

なせならフェイトも同じ状況に陥っていたからだ。

「グフツ…ハアハア…クツ…（最初から無傷で勝てるなんて考えてはいなかったし、タケルのことも要注意人物として油断してなかったつもりなんだけど…このダメージはさすがに予想外すぎるね。この体は打撃とかにはかなりの耐性があるはずなんだけど…。恐るべきは銃闘技…いやタケル本人かな？さてこの後どうするか…体が動くまでまだ少し時間が掛かる。それまでタケルがまってくれてくれるはずないし、これはかなりやばいね。」

フェイトも武と同じように体を無理やり動かそうとしていたが、まったく動けない。

ならばと意味は殆どないだろうが、気休めにと魔法障壁をはりはやく体が動けるように回復に努める。

もちろんあたりを見渡しながら警戒するのも忘れない。

こうして二人は互いに警戒し合いながらも体力の回復に努めこの後どうするのか考えるのであった。

.....

『.....』

体力が回復し、ようやく立ち上がる事が出来た二人は互いに見つめあい無言。

そしてしばらくそうやって見詰め合っていると互いに顔を歪め笑い出す。

『.....クククッアーハッハッハ.....』

「なんだフェイトもぼろぼろだったのか」

「それはこっちの台詞だよ。おかげで余計な心配してしまったじゃないか。」

「自業自得だろ?」

「だろうね。にしてもなぜかな?」

「ん?」

「君に出会ってから驚く事ばかりだ。今までにない気持ちになったり、言葉遣いも少し感情的になったり生まれて初めての体験だよ」

「でも悪くないんじゃないか?」

「ふっ...そうかもしれないね。」

その時フェイトはかすかにだが笑みをこぼした。
その表情に少し驚く武。

それは原作で知っている人形のようなフェイトではなく。
人そのものに見えたからだ。

ズズウウウン…！

「おっと…タケルとこうして話している時間もそろそろ終わりみたいだ。名残惜しいけど決着をつけないとね。」

「みたいだな。さっき聞こえた音からして他の所も決着がつく頃だろっし…」

ザザツ……………

「楽しかったよタケル。タケルを殺すのはなんだか勿体無い気がするけど、仕方がないね。これも世界のため…ここで終りにしよう。」

「俺も同じ気持ちだよ。さよならフェイト……………お前は俺がここで撃ち殺す。」

二人とも互いに必殺を口にし構える。

もう両者とも戦っていられる時間は少ない。

だからこそ今もてる最高の一撃を撃たんと集中する。

ドオオオオン…！

ダツ…！

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト…」秘匿されし天上人”今こそその名を呼ばん”

”その者死を予期する者なり””その者すべてを視る瞳なり””その者すべての終りを示すものなり””その名の下に我に逆らいし者に永久の別れを告げよ”…”運命のダブルレット”!!”

フェイトがそう唱えると、フェイトの右腕に魔力が集まり姿を変えていく。

それは動いているものさえ止めてしまいそうなくらい美しい天使の翼だった。

その翼が羽を広げたかと思うと、まるで翼が意思を持っているかのようにタケルに向かって伸びていった。

「これが俺の最凶の一撃だ!…紅蓮の拳に貫かれな。エクスプロード・キャノン!!」

天使の翼が迫ってくる中、武も己の最凶の一撃を放たと力をためていた。

最強ではなく最凶…これは武がどんだけピンチになろうと使うのをためらっていた銃闘技の奥義であった。

最凶の一撃の元の名前は44マグナム・キャノン。

相手に衝撃を貫通させる事が出来る44マグナムとは違い、これは相手の体ごと貫通させる事が出来る。つまり本物の銃と変わらない一撃を出す技である。

もちろん奥義と呼ばれるだけありそう簡単に撃てるものではない。

このマグナム・キャノンを撃つ為には相手を殺すという意志…つまり”殺意”が必要なのだ。

武にとって”殺意”を持つ事は正直難しい事ではなかった。

今は戦争をやっているのだ。”殺意”を抱かせる理由なんてそこら

じゆうにあるのだから。

実際戦争に参戦してからすぐにこのマグナムを使う事が出来たくらいなのだ。

だけど今まで使うことはなかった…いや使う気も起こらなかったがきつと正しいのだろう。

それは人を殺すのが怖いわけではなく、自分が”殺意”に飲まれることが怖かったから。

そして人を殺しても罪悪感を持たなくなってしまう事を恐れたからだった。

だから使わない。

そう決めていたはずなのに…

武はこの場面で迷わずそれを使うことにした。

別にフェイトをそこまで憎んでいるわけではないのに、何故か”今使うべき”そう思った。

それはきつと……

ドゴオオオオオオンン！！！！！！

大きな爆発音と閃光が武たちが戦っていた部屋を包み込む。

その衝撃波で部屋の壁は殆どはじけとび外が丸見えになっていた。そして二人はその中心にいた。

一人はたっているものの左手から左肩にかけて石になっていた。

そしてもう一人は上半身だけの姿になってその場に倒れていた。

「ゴフツ……見事だよ…タケル。僕の負けだ」

「ほんの少しの差だったけどな」

そう言っただけでタケルは石化された左腕を左手でさする。

「フフ…どこがほんの少しなのかな…。」

そう言っただけでフェイトはあの瞬間を思い出す。

あの時フェイトは自分の勝利を確信していた。

(いくら力をためる必要があるとはいえ、いくらなんでもタケルの行動が遅すぎる。あの状態からじゃもう避けることもできない。もしかしたらこの魔法ごと迎撃を考えているのかもしれないけど、それは甘い。これは僕が創り上げた石化の最大呪文。その翼に触れるすべても物を石化させる。いくらその拳が強くてもこの魔法は撃ち破れるわけではない)

しかし、次の瞬間武が起こした行動にフェイトは驚くのであった。

武はフェイトの攻撃がまじかに迫った所で、ハンマーコックしていない左手をわざと魔法の中に突き入れ、その魔法の根元であるフェイトの腕を外側にはじく。

いくら石化魔法といえど一瞬にして石化する訳ではなく、ほんのわずかではあるが自由に動かせる時間はある。ただどまさか左手を犠牲にするとは思っても見なく、フェイトはなすがまま手をはじかれてしまった。

そして武はあいたスペースにもぐりこむとフェイトに向かってエクスプロード・キャノンを放ったのだった。

「まさか左腕を犠牲にするなんて思わなかったよ…でもそれ以上に驚いたのが最後の技。アレは一体なんなんだい？」

「言っただろ？最凶の一撃だったさ」

「最凶……フフフツ…確かに最凶だね。僕をこんな姿にするんだから……でも疑問が残る。何故この技を今まで使わなかったんだ？」

「……この技は封印してたんだよ。あまりにも威力が強すぎる……それこそ死ぬまで使う気なんてなかったよ」

「……だったらなぜ？」

当然のように聞くフェイトに対してタケルは何処か遠くを見つめるように呟く。

「さて……正直自分でも良く分かってない……ただ、フェイトにこれを使う事は礼儀だと思った。そうとしか今の俺には言えないよ。」

「そっか……」

その答えに何処か満足したような顔をしてフェイトは、壊れた壁から除かせている空を見上げた。

「……はやくナギ達に合流したほうがいい。」

「えっ？」

「僕達が真の黒幕じゃないってこそさ……真の黒幕は別にいる。そしてそのお方はきっとナギを狙ってくると思うよ」

「……なんでそれを俺に？」

「……………君と同じ礼儀だよ。命を懸けて僕と戦ってくれたね」

「……………ありがとう。」

「礼なんていらぬよ。ふう……………でも最後に銃神の腕を潰せたのはいい思い出になったかな」

「……………わるいな」

そうフェイトに謝ると、武は右手に意識を集中させる。

するとその手には白っぽい何かが集まり、武はそれを石化している左腕に当てる。

すると石化した左手はあつという間にもとの腕に治っていた。

「……………クククツ……………君は本当に面白いね。まさかそんな事まで出来るなんて……………」

「俺だけにしか出来ない裏技だよ。……………龍ちゃん以外でこれを知っているのはフェイトだけだからないしょにしてくれよ?」

「さて……………それはどうしようかな?」

二人はそう言い合いながら笑い出す。

「じゃ……………行くわ」

「……………またいつか逢おう。今度逢う時までにもっと強くなっておくから……………」

「……そんな時はまた返り討ちにしてやるよ。」

ニヤリとした顔でフェイトにそう言つと武はその場を後にした。フェイトといえは武がその場を立ち去るのを見届けた後、満足そうに笑みを浮かべながら目を閉じていく……。その顔は決して敗者がするような顔ではなかった。

武VSフェイト……………勝者・武。

第十四話：決戦・中編（後書き）

技説明&裏話

”運命のダブレット”

この元ネタは、天使図鑑のある天使からとったものです。

名前もそこからいただきました。

なんでも天使は人が死ぬ間際に現れるといわれている天使で、その翼には生きているものすべての目があるとか…

天使なのに死神みたいなのはどうなんだろう？とか最初読んだ時思いました。

最初は土系の最大魔法でもいいかと思っていたんですが、私の中で土に火ってどうなのよ？って思い石化の最大呪文を作りました。

フェイト君石化好きですからね（笑

エクスプロード・キャノン

作品中にも説明があった通り44マグナム・キャノンの炎バージョンです。

名前についてはイメージしてこんな感じだろうとつけました。

イメージとしては通常キャノンは相手の体に銃と同じように穴をあけるものなのですが、炎を纏った場合そこに”爆発”という力が働くのではないかと考えました。その結果少々残酷ではありますが、体がぶっ飛びます。

本当なら使う予定はなかった技なんですよね。”殺意”をどうやって持たせるかとかどんな場面で使えばいいのかとかいろいろ考えてもいまいちピンと来なかつたんです。ただこれを書いている時にフェイトにだったら使えるかな？と思いました。

命を懸けて戦う時の礼儀としてこれを使ったんだと思ってくれれば嬉しいです。

ただやっぱり私としてはあまり使いたくない技なのでもう出ないかもしれません。

さて今回はいかがだったでしょうか？

現時点で私が書ける最高の戦闘シーンを書いたつもりです。

もちろんできにはまだまだ満足はできていませんが、それでも読んでくださる方に戦闘の熱さとかドキドキが伝わってくれたらいいな
〜って思っています。

皆様の感想や意見を踏まえてもっと精進していきたいと思います。

感想や意見はいつでもお待ちしております。

”おもしろかった”だけでも嬉しいです。私のテンションがかなり上がります。

アンケートの方もまだまだ募集中です。

そちらもよろしく願います。

では次回またよろしくです。

寒い日が続くので体にお気をつけて…

第十五話：決戦・後（前書き）

お疲れ様です。

本当なら今回で”完全なる世界”との最終決戦を終わらせる予定だったんですけど…手直ししている時にアレも入れたいコレも入れたいと書いていたらむちゃくちゃ長くなってしまいそうなので、とりあえずキリがいいところでいったん投稿します。

それではどうぞ！

第十五話：決戦・後

フェイトとの戦闘を終えて、俺はナギ達が居るであろう場所に向かって移動していた。

ナギがどこにいるかは正直分からないけど、多分爆発している所が”紅き翼”がいる場所だろうだからとりあえずは騒がしい所に行けば誰かと合流できると思う。

そんな事を考えながら移動していると、意外な人物と最初に合流する事が出来た。

「意外なんて失礼ですね？」

「思っていることを読まないで欲しいなアル？」

最初に合流できたのはアルだった。

話を聞くとどうやら俺に近い所へ飛ばされたらしく、自分の相手を倒してからまず俺に合流しようとしていたらしい。

なぜアルが正確に俺の場所がわかったかという点、アルのアーティファクトである”イノチノシヘン”のおかげらしい。

俺が知っている原作ではそんな能力はなかった気がするけど、アルから聞いた話ではある程度の距離ならばその人物がどこにいるか把握できるとか。

意外に便利だということが判明した。

ちなみになぜ俺が登録されているかという点、”然”の修行に付き合った見返りとしてほぼ無理やりに登録させられた。正直かなり助けてもらった事もあったため断る事ができなかった。

「それで？そのフェイトが言っていた事は本当に信用できるのですか？」

アルと合流した所で俺はフェイトから聞いた情報をアルにも話しておいた。

アルとしては黒幕についてはそんなに驚く事はなかったが、フェイトから聞いたナギを狙っているという情報だけは今ひとつ信用できないらしい。

俺が聞き出した訳じゃなく、フェイトが自ら喋ってくれた事だから信じる事が出来ないのも無理はないのかもしれない。

「俺はそう信じているかな。なんていうか命かけて戦ったせいかな…あいつが嘘言っているようには思えなかったから」

「なるほど。…まあいいですよ。フェイトについては私は到底信じることは出来そうにありませんが、貴方なら信じることはできますから」

「うえ…まさかアル…」

「何を想像しているか分かりたくありませんが、私は幼女が好きなノーマルですからね？男にはそういう興味はありません。男の娘は大歓迎ですけど…」

「わざわざ力説しなくても…」

まさかいきなりそんな事を言うとは思わなかった。

正直あの必死さはドン引きせざる終えない…。

「……こほん。ともかくですね。ナギを狙っているにしろ、そうでないにしろ一度皆と合流するのは良い事だと思います。とりあえずは念話で皆に呼びかけることにしましょう。あとタケルの傷もある

程度回復しておかないといけませんね？」

そうアルが言うと俺に向かって回復魔法をかけてくれる。
正直ありがたいと思った。

フエイトの戦闘であった石化で、解呪を使ったせいで魔力をかなり消費している。

多分ラスボスの創造主ライフメイカーと戦うとなると”然”になる必要が出てくるだろう。

そうなるともう魔力を使う事は出来ない。

ゼクトやアルと修行をしていて分かったこと、それは”然”の活動時間やその後の状態は使う前の魔力と気に比例するという事だった。そして現状の魔力を考えると、これ以上使ってしまうと最大稼働である30分持たない所かその後の後遺症がかなりひどくなってしまふことになる。

それだと非情に困った事になる。

だってラスボス倒してはい終わりじゃないから。

ハッピーエンド目指すならオスティア墜落は阻止できなくてもせめてそこにいる住人の退避するための仕掛けぐらいはしないとイケないと思う。

もうこの戦争で亡くなる人は無しにしたい。

それぐらいこの戦争ではもう人が死にすぎってしまったのだから…

．．．．．
．．．．．
．．．

しばらくしてラカン・詠春・ゼクトそして龍ちゃんが合流した。

皆所々怪我などをしていたがたいした事はなく戦闘にも支障をきたすものはないようだ。

「みんな集まりましたね？じゃナギの所へ向かいましょう。先ほどナギと連絡を取ってみたのですが、敵がなかなか強いらしくまだ少し時間がかかるそうです。それまでになんとしてもナギの下にたどりつきましょう。」

「そうじゃな。タケルが敵から聞き出した黒幕…もしそれがおつてナギを狙っておるなら目の前の敵をナギが倒した瞬間に現れるじゃろっ」

「なるほど。勝利して油断した所で…ということだな。はやくナギの下へ行かないとな…」

「やけど、ワイらも多少なりとも体力や魔力を消費しとる。もし黒幕と戦うなら少しでも回復せなあかとちゃうんか？」

「龍ちゃんの言う通りだな。でもどうやって…」

「あ〜うだうだ言ってもしかたがないだろ！？とにかく今は行動あるのみだ。アル！ナギがいる場所はここから遠いのか？」

「いえ…そこまで遠くではないようです。」

「なら移動しながらでも休めばいいだろ。遠くじゃなかったら気や魔力を使わなくても移動できるからな…。ともかく急ごうぜ。…俺様はあまりこういったこと信じねえんだが、なんか嫌な予感がするんだよ」

ラカンがそう締めると皆頷いて行動を開始した。

ラカンが言った”嫌な予感”というのはきつと”創造主”のことを

指しているんだと思う。

しかもいつも戦闘でも余裕綽々といった表情でいるラカンがこんな真剣な顔をしているのだからかなりやばいのだということがわかる。事実他の皆もラカンの顔を見て同じ事を考えていたのか回復に努めながらも今まで以上に神経を尖らせていた。

ナギ……！！頼むから俺達がつくまで無事にいてくれよ！！

【ナギ side】

「いい加減死になよ”千の呪文の男”！！」

そう叫び俺に向かって魔法を放ってくる敵。

「そいつは聞けねえ頼みだな。それと”千の呪文の男”っていい加減いづらくないのか？」

敵が放ってくる魔法に対し魔法で迎え撃ちそれを迎撃する。

本当ならこんなめんどくさい事しなくてもでっけえ魔法一発ぶっ放せばすぐにも決着がつくんだろうけど……アルに止められているからな。

しばらくこの敵と戦闘をしていた時にアルから連絡があつた。

なんでも今戦っているやるらが黒幕じゃなくて、こいつらに命令している真の黒幕がいるらしい。

まあ聞いてて確かにありえそうだなっと思ったけど”そんなの関係ねえ！全部まとめて相手をしてやる”とアルに返事をしたんだけど……おもいつきり怒られた。

タケルが敵から聞き出した話だとその親玉はどうやら俺を狙っているらしい……俺的には望む所なんだが、手下でさえこれだけ強力なんだ親玉は俺が思っている以上に強い、だから皆と合流するまで戦闘

を引き伸ばせ！と言われた。

戦闘を長引かせるのはそんなに難しい事じゃない。

たしかにコイツも結構強いが、だからと言って普段ケンカしているラカンやタケル、詠春に比べると見劣りしてしまう、そんなやつが俺に敵うわけがない！

きつと親玉もアルが勝手に心配しているだけだとそう思っではいる。だけど、アルは”紅き翼”の参謀で俺よりも遥かに頭がいい。

そんなアルがここまで言っているんだからきつとそれは正しいんだと思う。

けどなあ……

「…力をセーブして戦うのは結構ストレスが溜まるんだよな。…大体細かいこと俺は苦手だしよ……」

「何か言ったい!？」

「あ? いや、オメーよ確かメガロで一回戦った事あるよな? 確か元老院議員に化けてて…けどなんつか違うんだよなあ」

「僕は君と戦った事なんてないよ。君達と戦ったのは別の奴さ。たぶん今頃あの”銃神”と戦っているはず…まあもう決着がついて”銃神”は死んでいるだろうけどね」

そう言っつて奴はまた俺に向かって魔法をぶっ放してくる。

なるほど。前戦った奴はタケルと戦っているって訳か…あいつはかなり強そうだったからちよつとタケルがうらやましいぜ。

でもコイツは何を言っているんだろうか?

「タケルが負ける? ……ハッ! そんな事笑い話にもならねーぜ? いか俺達”紅き翼”は最強無敵だ! そいつは今頃思い知っているだ

るうぜ？”銃神””炎帝”の名を持つ意味って奴をなあ！！”

それによ。もう念話で聞いてんだよ。

アイツは多少怪我とかしているっほいけど勝ったってな！

それをわざわざアイツに教える義理なんてねーからいわねーけどよ。

「フン。それはどうか。大体”紅き翼”のリーダーである君でさえこんな力ではないんだ。どうせ今頃ズタボロになって殺されているだろうさ。他の皆も同様にね。”銃神”とかたいそうな名前いろいろ貰っているみたいだけど、所詮鼻屑目で見られただけなんだろう？だいたい君達がやっていることは所詮無駄な努力でしかないのさ。世界を救うためにやっているのに何で君達は邪魔をするのかな。理解に苦しむよ。」

……………わりいアル。

さすがに今の言葉は頭にきちまった。

もとから鼻につくやつだったけど、今の言葉は許せねえよ。

俺を同等と勘違いしたことや、俺の仲間を侮辱した事も理由にあるけど…それ以上に頭に来ていることがある。テメーは今なんって言つた？

「…世界を救う？…ふざけるな！！世界を救う為なら何でこんなに大勢の人を殺す必要がある！戦争を起こす必要がある！無駄な努力？…無駄なんかじゃねえ！人つてもんをバカにするな！！！！」

「なっ！！」

ドゴオオン！！

俺の魔力を込めた一撃でアイツがぶっ飛ぶ。

そのさい何か驚愕したような表情をしていたが、いまさら何を言っ
てんだか…。

俺がわざと戦闘を長引かせるために力を抑えていたのにも気付かな
い奴が俺に勝てる訳がねえだろ？

アル…皆…多分もう近くまで来てるんだろっけど、はやく来てくれ
よ？

俺はもうとまらねえ…。

さあ…ここからは本気でやってやる。

俺を…いや人間をなめた落とし前つけてもらおうか！！

【ナギside終】

【タケルside】

「これはちよつとまずいですねえ…」

「どうしたんだアル？」

体力の回復に努めながら移動をしていると、さっきまで真剣な顔で
何かをやっていたアルがそう呟く。

「いえ…皆合流したのでナギにもう一度報告しようと思話を飛ばし
たのですが、通じません。」

『!!!!!!!!!!』

アルの一言で俺達の顔が歪む。

「それって…ナギがやられたってことか？」

「いえ…それは無いでしょう。先ほど話していた限りではナギが相手しているのはナギに言わせれがそこまで強くない敵のようですし、それにあの時にしつかり言い聞かせましたから”時間を稼げ”と…」

「それならいったいどうして…」

詠春が皆が思っているであろう疑問を口にする

するとアルはすこし考えるような仕草をして自分の考えを口にする。

「考えられる事は二つ。一つ今戦っている敵と同時に新たな敵…多分黒幕でしょうが、そいつが一緒になって攻撃を仕掛けてきており念話をする余裕が無い。二つ頭に血が上るような事があつて念話を自ら無視している。これのどちらかでしょう。」

「ふーむ。いつもなら二つ目と断言できるのじゃが…今の状況からじゃとどちらもありえそうじゃな。」

「どちらにせよナギの奴がそう簡単にやられるわけがねえ…が、急いだ方がよさそうだな」

ラカンの言葉に皆頷き移動する速度を上げる。

爆発の音が段々近くなっていき、遠目でナギ達の姿が確認できるくらいまでになった。

どうやらまだ無事らしい。

敵さんのほうは……アレはもうだめだな。

ナギの圧倒的な火力の前に何も出来てない。たまに魔法とか撃っているみたいだけどそれを魔法で相殺……いや逆に押し込んで攻撃を当てている。

まったくあんなことできるのは世界でもナギだけだろうな……さすが元祖バグ。

そして俺たちが十分に近づく事が出来た頃、ナギは敵の首を持って持ち上げていた。

「ナギ!!」

「お？皆無事だったか。……へへまあ知ってたけどよ。」

「まったく私があればほど戦いを伸ばせと言っておいたのに……暴走して……」

「わりいアル。……でもよコイツがどうしてもゆるせねえ事言ったもんでなさすがに頭にきちまったんだよ。でもこうして間に合ったんだし結果オーライじゃね？」

『は……』

ナギの言葉に皆ため息が出る。

俺だってそうだ。何か心配するのが損だと思ってしまう。

「クククツ……確かに僕の考えが甘かったみたいだね。だけど君達は僕が黒幕だと本当に思っているのかい？」

俺達の姿を見て最初は驚いたような顔をしていた敵だが、すぐに冷静さを取り戻したのかナギに向かってそんな言葉を投げかける。

「いや？思ってたねーぜ？って言うかそれを知ってるから少しでも戦いを有利にしようとかわざわざめんどくせーのに戦闘を長引かせてたんだしな」

「なっ！なんだと！！」

おゝ敵さん驚いてるな。

まあそりゃそうだろうな。敵からしたら真の黒幕がいることはトッブシュークレットだったろうし、今それを言ったのもきつと俺達の戦意を少しでもそぐためだったんだだろうしね。

なんていうか：哀れたしか一番目の人。

他の人達もなんだかかわいそうな目で敵を見つめていた。

そしてその場の空気が少し緩みかけた所に、いきなり大きな黒い塊が俺達を襲った。

ゴオッ！！

「チッ！味方も関係無しって事かよ！！」

ナギが先ほどつかんでいた敵を放し後ろにバックステップをする。

「障壁最大じゃ！！」

ゼクトはナギの前に躍り出て最大の障壁を展開する。

「ナギ下がって魔法をあゝの黒い塊に撃って相殺してください。タケル貴方も遠距離からの攻撃を！」

ゼクトの後ろではアルが結界を張りながら皆に指示を出しゼクトと同じく障壁を展開する。

「オラア！！！」

ラカン是谁よりも前に出て気を最大限解放し、自らの肉体で黒い塊を押さえ込む。

「くっ…私の護符でどれだけ食い止められるか…」

詠春はアルが張った結界に更に護符で結界を張り、護符に気をめいっぱい注ぎ込んでいく。

「ナギ！龍ちゃん！」

「おう！」

「わつとる！」

そして俺とナギ、龍ちゃんは魔法を、ガンブレットを、炎を黒い塊に向けて放つ。

「くっ…この…いいかげん止まりやがれー！！！！！」

「！！あかん！タケヤン！！！」

ドゴオオオオン！！！！！！

大きな爆発が起こり俺はその爆風によって吹き飛ばされる。

そして目の前が大量の煙で埋め尽くされる。

「痛っ…くっ…皆！無事か！！！」

さっきの衝撃で体中が傷だらけになって血が流れている。どうやら致命傷は避けられたみたいで動く事などは出来た。

他の皆は…！？

視界が悪すぎて皆がどこにいるか…生きてるかどうかも分からない。

だから声を出して叫んだ。

皆はやられちゃいない！そう信じて…

「ゴホッ…タケル。俺様は何とか生きてるぜ！」

「わいもや……体中痛いけどな」

最初に返事をしてくれたのは俺の近くに飛ばされていたラカンと龍ちゃんであった。

やっと煙が無くなり始めてその姿を確認できた瞬間俺は言葉を失ってしまった。

ラカンは口から血を流し体中血だらけになって地面に横たわっていた。そしてあの太い腕が両方ともなくなっており、そこから滝のよう血が流れている。

龍ちゃんはいつの間にか”赤王”が解除されて普通の白い虎になっていたのだが、その毛は所々赤く染まり何とか立とうとしているのだろうが足が震えておりうまく立つ事が出来ないみたいだ。

「龍ちゃん…俺をかばって…」

あの爆発の瞬間近くにいた龍ちゃんは俺の前に立ちふさがって炎を

全開にしていたのが見えた。

つまり龍ちゃんは身を挺して俺を守ってくれたって言う事だ。

それにラカンも同じだ一番先頭において皆を守るために自分の体を盾にして守っていた。

そのせいでこんな大怪我までして……

「ははっ……かつこよくタケヤンを守ろう思ったんやけどな……うまく守れんですまんかった。」

「俺様も……ちょっと無理しすぎたみたいだな。」

「バカやろっ……無茶しやがって……」

涙がどうしても流れてくる。

今は泣いている場合じゃないのに……敵が目の前に迫ってきているって言うのに……

「くふっ……皆さん無事ですか？」

今度はアルの声が聞こえた。

声から察するにかなり辛そうだった。

「私は生きてるよ……立てそっくに無いけどね……」

「わしも無事じゃ」

「俺……もだぜ……ちょっときついけどな。」

煙が完全にはれて皆の姿が確認できるとそこはまさに死屍累々といった光景が広がっていた。

皆所々血を流しておりかろうじて動けそうなのは俺とゼクト、そしてナギぐらいだった。

他の皆はどうにか起き上がれそうではあったけどとても戦闘なんて出来る体じゃないことは一目で分かる。

そんな光景に言葉を失っていると近くから俺たちではない声が聞こえてくる。

「クククツ…まさか生き残っているとはな正直驚きだ」

その声の方向に視線を向けるとそこには黒い外装を纏ったモノが悠然とそこに佇んでいた。

「けっ…親玉登場って訳か。」

体を起こしながらナギが敵を睨みつける。

「我名は創造主 ライフメイカー …よくぞここまで辿り着いた。その褒美とっては何だがそこで指をくわえて見ているがいい。世界の救済を…」

創造主はそう言って消えるようにその場から立ち去った。

「くそ…まちやがれ!」

「フン…。もう魔法は発動し始めている。止められるものなら止めて見るがいい。…おってこられるのであればな…」

姿はもう消えているのに言葉だけ聞こえてきた。

一瞬見ただけで分かる。

アレはあきらかに俺たちより強い。

「…………アル。俺に残りすべての魔力を使って回復魔法をかけてくれ。」

「ナギ!?」

ナギが何かを決意したような目でアルにそう話、それを見た他の面々は驚く。

「無茶です!いくら貴方でもそんな無茶な治療では…………」

「30分持てば十分だ!!やっつけてくれ!」

「ふふ良からう。わしも行くぞ。この中では比較的傷は浅い方じゃ。十分戦闘は出来る」

「お師匠…………」

「ゼクトまで…………」

「ナギ!ゼクト!待て!アイツは別格だ!死ぬぞ!ここはいったん体勢を立てた押してだな…………」

ラカンも一目でその強さが分かったんだろう。普段言わないようなことをいいナギ達を止める。

「…………それじゃ意味が無い。」

時間はもう無い。さっき創造主が言っていたが魔法が始まりかけているんだ。だったらもうここで倒さないと今までやってきた意味がなくなっちゃう。

それに…………俺達はこのくそつたれた戦争を終わらせるために…………世界を

救うとか言いながら多くの生物を死なせたあのクソ野郎をぶつたお
すためにここに来たんだ。

ここで引ける訳がないだろうが!!!!
だから俺は……

ポン

「ん?…タケル!？」

「心配するなよラカン。俺達は死なねえよ。ここで全部決着をつけ
てやる。」

「ばっ…!!バカやろう!お前まで死に行くって言うのかよ!」

「だから死なねえって。……行ってくる!」

まだラカンが何か言いたそうな目をしていただけ、俺の顔見て止め
られないと思ったのか口を閉じる。

そして創造主がいるであろう奥に目を向けると、いつの間にか目の
前にはさっきまで倒れていた龍ちゃんが座っていた。

「どうせ止めても無駄なんやろ?」

「さすが俺の相棒わかってるね。」

「当たり前や。…本当ならワイもいっしょについていきたいけど、
この傷じゃ足手まといになってまう。だからここで皆とまっとる。」

「ああ。まっけてくれ」

「…一つお願いがあるんやけど」

「何？」

「あの創造主といっけすかん馬鹿にこれでもかかって言っくらい拳叩き込んで、撃ち貫いて、ぶっ飛ばしてきてや。」

「約束する」

「たのむわ」

龍ちゃんの頭を何故ながら約束を交わし更に前へと足を踏み出す。するとそこにはナギ・ゼクトが俺を待っていた。

「おいおい。やるのはかまわねえけどよ。俺の分も残しておいてくれよ？俺もこれでもかって一発叩き込みたいんだからよ」

「相変わらずじゃの。…じゃがそれがナギ…いやわしらしいかの。」

「違うない」

そう三人で言い合つとタイミングを計つたように一斉に笑い出す。今から死ぬかも分からない場所へと行くと言うのに何故か笑いがこみ上げてくる。

それを見ていたアルたちも最初あっけに取られていたが、しだいにその顔には笑みが浮かぶ。

「クククツ…やっぱ俺達は最高だぜ！…それじゃいくか！」

『オウ!!』

俺達は創造主、そして黄昏の姫御子がいるであろう奥へと向かった。
俺はこの世界が好きだ。

だから…この世界を壊そうとする創造主。

お前だけは……この手で必ずぶっ飛ばしてやる!!!!!!

第十五話：決戦・後（後書き）

いかがだったでしょうか？

かっこよく魅せているといいなあ…

せっかくGODAGUNのように漢の友情も結構盛り込んできたのでこういう所で失敗とかしたくないです。
技量不足は否めませんが…

次回決着です。…決着の予定です。

何とかまとめます！！

コレが終わって後一つ山を越えればヒロインキャラとの遭遇が書けます。

今からとても楽しみです。

アンケートもまだ募集中です。

感想・指摘よろしければ書いてください。

返信は必ずしますので…

活動報告もちよっと書き始めてます。主に私事が多いですがよかつたらそちらも書き込んでください。

それでは次回またよろしくお願いします。

第十六話：人の力（前書き）

おつかれさまです。

今回でやっと戦争がおわります。

作者が結構はっちゃけていろいろ書いてしまっていますが、暖かな目で読んでください。

それではどうぞ！

第十六話：人の力

俺達三人は宮殿の奥へと向かった。

畏や適当な敵がいるかと思つて、警戒だけはしていたんだけど…どうやらそれらしいものはないようだ。

もともと仕掛けてなかったのか、それとも追つてくるはずがないという余裕の表れか…とにかくありがたい。

これで余計な時間をとらずに目的地に迎えることが出来る。

そんな事を考えながらしばらく進むと、目の前に広い広場のような場所が見えて来た。

しかもその中心には創造主らしき人影も見える。

「見えたの。お主等覚悟はよいか？」

「覚悟？アイツをぶつ飛ばす用意ならできてるけど？」

そう俺が返すとナギとゼクトが一瞬ポカンとした表情でこちらを見てその後顔がにやける。

「クククツ…さすが”銃神”だぜ。お師匠俺もアイツをぶつ飛ばす用意はできてるぜ？」

「クククツ…失言じゃったな。ワシの方も準備万端じゃ。」

「？」

「いや…なんでもねえよ。よしや！行くぜ二人とも！」

そうして俺達は広場へと躍り出るのであった。

「へっ！わざわざここで俺達をまっけてくれたのか？」

ナギが創造主にその言葉を投げかけると、表情は見えないが何処か驚いた感じの創造主がこちらに顔を向ける。

「まさかここまで来るとはな。…しかしわからん。何故そこまでして我らの邪魔をする？我らはこの世界を救済…」

「あゝごちゃごちゃうるせー。その事についてはもう何も言う事はない。今まで何度も言っただろうが！とにかくお前は俺達がぶっ飛ばしてやる！」

創造主の言葉をさえぎるようにナギが叫ぶ。

「我に勝てるとも思っているのか？ククク…身の程知らずが。よからう…我にはむかう意味をその身で味わうがいい！！」

創造主がそう言い放つと、いつの間にか創造主の周りには黒く大きな楔みたいなものがうかんでおり、俺達に向かって突き進んでくる。

「クツ！ゼクト・ナギ！」然”を使うからちよつと間だけ時間稼いでくれ！」

「オウ、任せとけ！…オラア！」千の雷”！！」

「うむ！」雷の暴風”！！」

ナギ達は俺の言葉に返事をして創造主に向かって突っ込んでいく。その間に俺は少しはなれた所で精神を集中させて呪文を紡いでいく。

【Another Side】

オン・スフィト・ガン・ペンスリット…

”我詠うは精霊の詩” 我奏でるは命の炎”

”二つは交わりすべてを照らす光となる” 固定”

「ん？…あの者何をする気だ！？」

タケルが何かしようとしているのに気がつたのか創造主の意識がそつちに向く。

「おい！余所見なんてしている暇あるのかよ！」魔法の射手！連弾・光の1001矢”！！」

「こつちを忘れてもらっては困るの。”魔法の射手！集束・光の101矢”！」

「くっ！おとなしくしていればいいものを…！！」

迫り来る光の矢を楔で迎撃しながらそう悪態をつく創造主。その間もタケルの呪文は止まらない。

”我願うは終焉の炎” 我掴むは精霊の理”

”二つは重なりすべてを飲み込む闇となる” 固定”

「…まさか…どけ貴様ら！」

ようやくタケルが何をやるうとしていいのか気がついたのか、創造主は自分にまわりついていているナギやゼクトを魔法で攻撃してタケルへ続く道を開けようとする。

しかしそれをナギ達が許すわけがない。

「よっ…と！確かに前魔法は強力だけだよ。

撃つ所さえ見えればよけるのはそんなに難しくねえ…オラアまだまだ行くぜ！

” 来れ ” ” 虚空の雷 ” ” 薙ぎ払え ” ” 雷の斧 ” …！

「そうじゃな。それにお主をあちらに行かせるわけにはいかんの！
” 闇夜に切り裂く ” ” 一条の光 ” ” 我が手に宿りて ” ” 敵を喰らえ
” ” 白き雷 ” …！

創造主に向かって二人の雷が落ちる。

だがまともに喰らったはずなのに少しひるんだだけで、すぐさまナギ達に攻撃を仕掛けてくる。

「ちっ！結構まともに当たってるはずなのによ…効いてねえのか？
アイツは！」

「いや…それなりに効いてはおるじゃろ。本当に効いておらんのなら止まらずにこちらに攻撃を仕掛けておるはずじゃからな。」

「つまり火力不足ってことかよ…。タケルまだか！？」

ナギがそう言つて少しタケルに視線をやつた瞬間、創造主はいきなり膨大な魔力を放ちだした。

「我に余所見をするなど言つておいて自らするとはおろかな…滅せよ！…！」

「ナギ！…！」

ゼクトの声にハツ！つとなつて創造主の方へ視線を戻すと目の前には先ほどとは比べ物にならないくらい大きな黒い塊がまじかに迫ってきていた。

「しまつ…！！！」

ナギは回避行動が取れないと分かるとすぐにも障壁を張る。近くにいたゼクトもナギのそばに来て同じく障壁を張つた。

このままじゃやられる！！せめてタケルだけでも…！！！！

偶然にもゼクトとナギが同じ事を考えて、いざとなつたらこの体でこの魔法を相殺しようと思つたと覚悟を決める。しかしその覚悟は後ろから来たオレンジ色の影によつて無駄に終わった。

！！
”光と闇すべてはわが身に宿り”
”すべてを撃ち貫く力となれ”
！！

ドオオオオン！！！！！！

そのオレンジ色の影と大きな黒い塊がぶつかりその衝撃で爆発が起こった。

ナギ達は障壁を張っていたため爆発に巻き込まれずにすんだが、衝撃波によって少し後ろに飛ばされた。

「タケル！！」

紅い影がタケルだと気付いたナギは爆発した場所に向かって叫ぶ。すると煙がはれて見えてきたのは、体中からオレンジ色の炎を纏ったタケルの姿だった。

「おまたせ。」

「ほんとじゃよ。」

「美味しい所もっていくよな相変わらず。」

ゼクトとナギは二人して軽口を叩く。

その顔は先ほどまでとの表情とは打って変わり、まるでこの後の勝利を確信したような笑みであった。

「な…なんだその姿は…そんな魔法知らんぞ！大体あの魔法をまとも喰らってなぜ平然と立っておられるのだ！！」

タケルの姿に驚く創造主。

自分の知らない魔法が出てきたことにも驚いていたが、それよりもあの質量と密度をもった魔法をまとも喰らったのに平然と立っているこの男に初めて恐怖を感じていた。

「知らない？それはお前が勉強不足なだけじゃないか？大体自分の

魔法が無敵だと考えている時点でおかしい。しょせん魔法は魔法…
撃ち破る方法なんていくらでもあるのさ」

「そんな馬鹿なことが…あるはずが…」

タケルが創造主に向かってそう言葉を返すが、創造主は目の前で起こったことをまだ信じられずうろたえていた。

タケルはそう言ったが別に何かしたわけじゃない。

すべては”然”の特性である魔法吸収・無力化のおかげである。

魔法…魔力でつくられている物であればどんなものでも吸収・無力化することが出来る。

それは創造主が使う魔法でも同じ事だった。

「さて…そろそろクライマックスといきますか…！」

そう叫ぶとタケルは創造主に向かって突撃を仕掛ける。

創造主も先ほどまでうろたえていたようだったが、すぐに楔などを飛ばしタケルを迎撃しようとする。

「無駄だ…！今の俺にそんなもんは効かねえ…！」

飛んできた楔などは左手でマシンガンを放ち迎撃し、魔法などは当たっても効果がないと分かったので無視してそのまま突っ込む。その間に右腕はハンマーコックしてあり既に目標の創造主の体に定めていた。

「くらえ…！メガフレア・バレット…！」

ズゴオオオオン…！！！！

大きな爆発音と共にまともに喰らった創造主は爆炎に包まれながらぶっ飛んでいく。

そして近くの壁にぶつかるとそのまま壁に貼り付けられたようにめり込む。

それを見届けたナギとゼクトはめり込んでいる創造主に注意しながらもタケルのそばへと寄っていく。

「やったのか？」

「……………いや。多分まだだと思っ」

「あの攻撃をくらってまだ立ってくるといつのか？」

決まったと思っていたナギとゼクトは驚く。

タケルも拳があたったときは決まったと思った。

だが、勘といえはいいのだろうか？

タケルにはどうしても終わったようには感じなかった。

そしてその勘はあたっていた。

「クククッ……………まさか人でありながら我をここまで追い詰めるとは…ほめてやるう。だがそんなもんで我が倒れるとでも思っているのか！……………」

埋まっていた壁を魔力で無理やり壊し、何事も無かったかのようにそこに佇んでいる創造主。

その姿にさすがのナギ達も言葉を失った。

「…ちっ！タケルのメガフレア・バレットでもダメなのかよ！…いたいどうすりゃいいんだ！…」

ナギがそう叫ぶ中。
タケルはある考えが浮かんでいた。

「ゼクト。」

「なんじゃ？」

「さっき拳を当てた時感じた感触なんだけど、ここに来る前に戦ったフェイトと似た感触がした。人では感じたことがない感触を…」

「人ではないじゃと？…それはつまりアイツは人間じゃないということか？」

「ああ。それにあの耐久力にしても膨大な魔力にしても…人が持つにはおかしすぎる」

そうタケルが答えるとゼクトはその言葉に引っかかる事があったのか少し考え…やがて一つの答えに辿り着いた。

「…まさか…。じゃがそれならタケルが感じた違和感と一致する。」

「お師匠どういうことだ？」

ゼクトの呟きにナギが先を促す。

「…魔道を研究し極めようとした場合、大まかに二つの道がある。一つはワシやアルように不老となり研究を続けて行くこと…そしてもう一つが…」

「もう一つが？」

「己自身が魔法となることじゃ」

『……………』

ゼクトの考えに二人は驚く。

「魔法になるって……………どういう意味だよ。」

ナギがそう叫ぶがゼクトはきわめて冷静に喋り続ける。

「そのまんまの意味じゃ。肉体を捨て自ら魔法そのものになる。古来より幾度も同じ考えをもった奴がおったが、そのすべてが失敗に終りただの怪物へとなり果てた。…がもしそれが成功していたとしたら……………」

「アイツのようになるって訳だな。…それでそいつを打ち破るにはどうすればいいんだ？」

「そうじゃな…用はアイツは魔法な訳だから、それを撃ち破るにはアイツの魔法以上の攻撃を食らわせればよい。しかし生半可な攻撃じゃと効かぬうえ、しばらくしたら積もっていたダメージも回復してしまうじゃろ…つまり。」

「全員で一気に畳み掛けるしかないって事だな？……………それならば方法はある。」

ゼクトの考えを聞いてタケルは先ほどから考えていたある技を思い出す。

それはタケルにとって最高の技であると同時に不可能と思っていた

技だった。

「どつする気じゃ？」

「以前考えていた技があった。…だけどそれは体力的にも身体能力的にも不可能だったため断念していたんだけど、今の状態ならそれが使える。」

「ならそれをぶっ放せば…」

タケルの言葉にナギ達の表情に光が差す。

「だけど、多分コレを使ったらいくら”然”の状態でもしばらく動けなくなるだろうし、メガフレア・バレットを耐えたんだ。多分決め手にかけるかもしれない。そこで二人にお願いがある…」

「ん？」

.....

「それじゃ手はず通りに頼む！」

「おう！」「まかせるがよい」

「相談は終わったか？ならば…死ぬがよい！！」

ゴッー！！

タケル達が相談している間にダメージから回復した創造主は、固まっていた俺達に向けて、黒い塊と楔を容赦なく撃ってくる。俺達はそれをよけて三方向に散らばり、準備を始めた。

「創造主！お前の相手は俺だ！！！」

タケルは自分の分身を出来るだけ作り上げ創造主に向かって突撃を開始する。

なるべく黒い塊に近づいて魔力を吸収するのも忘れない。分身を作るということは、それすなわち魔力を分けるということ。少しでも相手から魔力を奪えるのであれば、それに越した事は無いのだ。

「面倒な…だが魔法が効かないとはいえ、この楔は効くのだろう？」
この短時間でこちらに通用するものを感じ取ったのか創造主は、先ほどの倍に増えた楔をタケルに向かって放ってくる。

「チイツ…もう見抜いたのかよ！」

タケルはそう悪態をつきながら、迫ってくる楔を迎撃するために迎撃隊形 ガンマン・ポジション をとりそれを迎撃する。
本来なら”然”の姿になったタケルには物理攻撃などは一切効かない。

だが、この楔だけは別だった。

おそらくこの楔にはなんらかの魔法的付加がついており、”然”のように魔法と一体となっていたとしてもそれを無視して攻撃が出来るようになってる。

詠春の”斬魔剣・二ノ太刀”と同じようなものだろう。

ただし数やスピードは段違いなのだが：

創造主の楔による攻撃によって、次々分身体が攻撃をくらい消えて逝く。

本体も致命的な傷は負っていないものの、所々引つかき傷のようなものが増えていった。

特に直接ではないにしろ拳で攻撃している事もあって、両腕の傷はかなりひどい。

オレンジ色の炎を纏っていたタケルだが、両腕だけは段々紅く染まっていた。

「やばいな…さすがにもう抑えられねえかもしれない。」

ついにタケルが気弱な言葉を呟いたその時、待ちに待っていた声が聞こえてきた。

「またせたのうタケル！準備万端じゃ！」

タケルに声をかけてきたのは、先ほどまで戦闘に参加していなかったゼクトであった。

「まってたぜゼクト！頼む！！！」

「任せておけ！！！」 ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト”

” 契約により我に従え” 大空をすべる王”

” 来れ” 天上を貫く荒ぶる槍よ”

” 天へと誘う道となれ”…最大出力じゃ！！” 深緑の柱”！！！！”

ゼクトが魔法を唱えると、創造主を中心に巨大な竜巻が発生する。

それは以前、龍牙と戦闘した時とは比べ物にならないくらい大きく、

強い。

「グググ…死にぞこないがいきがりおつて…」

創造主が己に魔力を集中させて抜け出そうとするが、思うように体が動かない事もあつて難航していた。

その間タケルはと言うと、迎撃隊形 ガンマン・ポジション のまま創造主を睨みつけながら力を貯めていく。

すると、次第にタケルを纏っていたオレンジ色の炎が不規則に暴れだし、全身をオレンジ色から青色へと色を変えていく。

「無駄だというのがまだ分からのか!!!」

そんな叫びと共に”深緑の柱”を力づくで破り、創造主が姿を現す。しかしそれはタケル達が待ちのぞんでいた瞬間でもあった。

「そつでもないぜ？」

「ぬう!!!」

創造主が姿を現した瞬間、彼の懐には青い炎を纏ったタケルがいつの間にかおり、ニヤリとした表情で彼を睨みつける。

「いくぜ!…これがすべてを撃ち貫く俺の拳だ!…バレットカーニバル!!!」

タケルがそう叫んだ瞬間、創造主の目の前には今までに見たことが無いくらいの拳の弾幕があつた。

「ダブルガトリングショット!!!」

「インビジブル・デリンジャー!!」

左手の必殺技である、インビリブル・デリンジャーを心臓と鳩尾辺りに打ち込む。

ズドドン!!

「くはっ…!!」

衝撃が突き抜ける攻撃を無防備に喰らったせいか、初めて創造主から苦痛の息が漏れる。

「全弾もってけ! 44リボルバーマグナム!!」

ドン! ドン! ドン! ドン! ドン!

ファースト! セカンド! サード! フォース! ファイフス!

容赦なく絶対破壊攻撃の44マグナムを急所に打ち込んでいく。しかも一箇所ではなくすべて違う場所: 四肢とレバーに容赦なく打ち込み、完全に目標を破壊していく。

そして五発目が撃ち終わったところでほんの少し停止し創造主を睨む。

「この我が…まさか…」

「お前は俺達をなめ過ぎだ。リーダーが言っただろ? 俺達は最高、最強なんだよ!」

「コレでファイナーレだ！…目標補足 ターゲット・ロック !ナパ
ームキャノン!!」

ズガアアアアン!!!!!!!!!!!!!!

創造主の体のだ真ん中に向けて最後の一撃を放つ。

その威力の強さに、創造主の体に弾痕ができ、体ごと地面に向かって落ちて行く。

「グハア…!!しかし!まだ!」

落ちながらも体制を立て直そうともがく創造主。

しかし、忘れてはいけない。この戦いには三人で来ているのだ。

そう…”紅き翼”のリーダー…”サウザントマスター”ことナギが
まだ残っており、魔力を溜めながら創造主が落ちてくる場所で待っ
ていた。

「そう、まだまだよなあ…。俺が残ってるぜ!!!!」

ナギがそう叫び落ちてくる創造主に思いっきりアッパーを繰り出し
また空へと打ち上げる。

そのアッパーの威力が強すぎたのか、創造主は屋根を突き破り外へ
とほつりだされる。

そしてナギも一緒になって創造主がいる空へと上っていき創造主が
来ている黒い外装を掴む。

「最後にテメエに言いたいことがある。…俺様をなめるな!”紅き
翼”をなめるな!何より…人間をなめてんじゃねー!!!!!!」

ドゴオオオン!!!!!!!!!!

創造主に向かってナギがそう叫ぶと、掴んだまま魔力をたんまり込めた”千の雷”を放つ。

その威力により墓守人の宮殿全域にまぶしいほどの光が降り注ぎ、創造主はその黒い姿を光に浸食されるがごとく消えていく。

「我を倒すか……それも良からう。せいぜい”箱庭”で束の間の平和を楽しむが良い。いずれその時がくるまでな……ククク……アーハッハッハッハ……」

その言葉を残し創造主はすべて光の中へと消え、光が収まった頃にはその姿は無かった。

【タケルside】

「はあ……はあ……最後まで訳のわからない奴だったぜ。」

空から降りてきたナギが膝を付き、息を荒げながら呟く。
そこへ俺とゼクトが駆け寄る。

「お疲れナギ！」

「おう。……へへ。タケルからあんな良いパス貰ったんだ。決めないと失礼だろ？」

「当たり前だ！」

パシン！！

軽口をたたきながら二人はハイタッチを交わす。
それを見て嬉しそうにゼクトも頷く。

「うむうむ。めでたしめでたしじゃな。…まあ創造主が最後に言っていた言葉は気になるがの。」

「”箱庭”だっけ？」

「そうじゃ。一体どういう意味なのか…」

創造主が残した”箱庭”と言う言葉の意味を考えこむゼクト。

俺達もゼクトに習うかのように考える。

もつともここが”箱庭”じゃないということを知っている俺は別の事を考えていたのだが…

(たしか俺をここに転生させた神さま曰く、ここは”箱庭”じゃないから心配しなくいいみたいいな事言っていたはずだけど…。実際の所どうなんだろう。もしもう一度会えるならそこら辺を確かめた方がいいのかもしれない。)

ゴゴゴゴゴゴ...

三人そろって考え事していると、急に地面が揺れだし大きな音を立て始める。

「って今ここでのんきに考えている暇はねえ。早いとこ姫子ちゃんを助けないと…」

「そうじゃの。創造主の話じゃと儀式はもう始まってしまっておる。今から止めれるかどうかは分からんが、とりあえずは…」

「だね。姫御子を助けて、皆と合流してこの場を脱出しよう！」

皆俺の言葉に頷くと早速行動を開始した。

姫御子を探すのに結構時間が掛かるかもと思っていた俺だったが、運良くと言えば良いのか創造主と戦った場所のすぐ近くの部屋に姫御子…原作ヒロインのアスナが子供の姿でそこにいた。

その周りには大きな魔方阵が展開されていたが、そんなものは無視して中央にいるアスナを連れ出す。

アスナは人形みたいで声をかけてみてもまるで反応しない。

おそらく何らかの魔法がかけてあるのだろうと判断した俺達は、とにかくこの宮殿から脱出するためにその場から急いで立ち去った。

「ナギ！ゼクト！タケル！」

その部屋から出て創造主と戦った場所まで戻ってくると、そこには他のメンバーが集まっていた。

どうやらナギが創造主をぶっ飛ばした所を見てこっちに向かってきたらしい。

「お？お前達もう大丈夫なのか？」

「ええ。移動できるぐらいには回復できました。にしてもあなた達は…よく創造主に勝ちましたね。」

「まったくだぜ。さすがの俺様もビックリだ。」

「まったく…おそれいるよ」

「たいしたもんやで！」

皆俺達を見るや無事で安心し、口々に俺達をほめる。
たしかにほめられるのはうれしいんだけど、今はそれどころじゃない。

「皆ありがとつ。…でもとりあえずは脱出だ。」

「そうじゃな。ここはもうもたんじゃろつ。逃げるぞ！」

『了解！！』

こうして”紅き翼”は宮殿から脱出した。

…が、宮殿から出た瞬間目にしたのは巨大な光の塊だった。

「なんだあれは！！」

「…まさか儀式が完了してしまっただという事ですか！？」

「姫御子を連れ出すのが遅かったということか！？」

皆が光球を見て絶望にくれていると、近くにいたナギが地面を殴る。

ドン！

「ちくしょう…。俺達は間に合わなかったということか！？…せつかく悪の親玉を倒してこうして姫子ちゃんも助けられたって言うのによー！！」

ナギの嘆きにこの場に居る誰も声をかけられない。

皆どうにかできないかと考えては見るものの、アレをどうにかするすべなど誰も持ち合わせていなかった。

「あきらめるのはまだ早いのじゃ!!--」

『!!--!!--!!--』

俺達はその声に導かれるように空を見上げる。
するとそこには空を埋め尽くすほどの戦艦があった。

「あの声は…テオドラか!?!」

俺がその声を上げる。

「そうじゃ。どうやら間に合ったようじゃの。あとは妾たちに任せ
ておけ!」

「我騎士ナギよ。テオドラ姫の言う通りじゃ。後は私達にまかせて
おけ!」

テオドラに続きアリカ姫の声まで聞こえてくる。
ああ…テオドラが腰に手を当てる偉そうにしているのが見えるよ。
今の状況から言えば、ロリ天使って所か。

「タケヤン。また変な事考えとるやろ?」

「龍ちゃん思っても言わないで…でもこれで…」

「そやな。…ようやく終わったようぢや。この戦いも…」

帝国・連合・アリアドネーの艦隊が光球の周りを取り囲み、反転封印術式を大規模展開。

その力によって光球はその大きさを小さくしていき、最後には消えてなくなった。

「ああ…俺達の勝ちだ!!!」

その光景をみてナギがそう叫ぶと、俺たちも一緒になって言葉にならない喜びを天に向かって叫ぶ。

それにつられる様にまわりにいた人達からも歓声が巻き起こり皆戦争が終わった事を喜んだ。

その日、世界中に戦争が終わった事があったという間に伝わり、この場所にいた皆と同じように天に向かって歓声を上げる。

こうして永きに渡って続いた帝国・連合の戦争が幕を閉じたのであった。

第十六話：人の力（後書き）

技説明・裏話

バレットカーニバル：

私としてはどうしてもコレを出したかった。

一撃の奥義みたいなものよりも連続技の奥義の方が好きなため頑張
って書いてみました。

簡単に言えば、それぞれ強力な技をつなげただけの技。

体力的に無茶だろ？と言われても”然”の状態なら撃てる！！！！
名前については元ネタがあります。

武装神姫のゼノグラード型の必殺技です。

最初コレを見たとき絶対に入れてやるって思っていました。

内容はまったく違いますが…

私は銃火器萌えです（笑

さてさてやっとひと段落ついたかんじです。

この後すぐにもイベントが発生しますがそれはそれで、今は書き
終えた達成感でいっぱいです。

かっこよく魅せているかな？

感想・ご指摘まっています。

アンケートについては活動報告ですが、今週末まで待ちます。

結果については活動報告で発表予定です。

第十七話：守るために（前書き）

お疲れ様です。

さて皆さん予想通りウエスペルタティア王国陥落の話となります。
長くなりそうなので分ける事にしました。
まずは準備編からどうぞ！

追記：12/9オステイア大陸 ウエスペルタティア王国に変更しました。

またそれに伴い一部文章を変更しました。

第十七話：守るために

戦いから一夜あけ、ここは学術都市アリアドネー。

戦争の終結を宣言する場所として、中立であったアリアドネーが選ばれ、俺達”紅き翼”もここで一夜を明かすことになった。どうやら俺達の今までの功績を讃え表彰もされるらしいのだが…そんな事は今関係ない。

なにせウェスペルティア王国の滅亡はもう間近に迫っているのだから。

「なあタケちゃん？さつきからなにやっとするん？さつきからうるさいと思ったらいきなり何かつくつとるけど…」

いつも通り龍ちゃんと一緒の部屋になっている俺は戦い後すぐに寝て、目が覚めた瞬間から滅亡を防ぐために必要な物をつくっていた。創造主との戦いで限界まで”然”を使ったからもしかしたら前みたいに体が動かなくなるかも…とそう思っていたが、ゼクト達と一緒に修行をしたおかげか、コレといって体に異常は無かった。

しいて言うなら魔力が全回復してないのと、体中がバキバキ音を立てるぐらいなものだ。そこら辺は我慢出来る範囲である。

当初の予定では魔法が発動する前に止めれるよう、行動をしていたのだが、結果として原作通りになってしまったのが残念で仕方が無い。ただ後悔している時間が勿体無いので、とりあえず今できることをやりたいと思う。

当然一緒の部屋にいた龍ちゃんは俺が作業を始めてしばらくたったら、目を覚ましこちらをずっと見ていた。多分音がうるさくて起きてしまったのだろう…ちょっと悪い事したと思うが、今回ばかりは許して欲しい所だ。

「これからやることに必要なものさ」

「これから？戦いも終わったばっかやっていうのにまだ何かおこるんか？」

「いや…正確にはもう起こってて、原因もわかってるんだけどね。」

「は！？ちょ…まてや！一体何がおこってるん？しかも原因がわかっとるって…どういふことや？」

俺のいきなりの言葉に慌てながらも疑問をぶつける龍ちゃん。
その表情には誰が見ても分かるような焦りが出ていた。

「……結論から言つと、もうすぐウェスペルティア王国は崩壊する。」

「！……！……！」

はっきり俺がそう言つと、龍ちゃんの顔から血の気が引き蒼白なる。

「どういふことや？何でウェスペルティア王国が崩壊せなあかねん！……！」

「原因はあの大規模の封印魔法にあるんだ。」

「なんやと？」

「そもそもあんな技術がありながら、なんで戦争で使われなかったと思っ？」

「そりゃ…その魔法が完成できてなかったからやないんか？」

龍ちゃんが少し考えて喋る。

たしかにそれもある…でもそうじゃないんだよ…。

「…確かにそれもあるかもしれない。けど原因はもっと別にある。使えなかったんだよ。あまりにも欠点がでかすぎて。」

「欠点？」

「そう。確かにあの魔法であの巨大な魔力の塊は封印することが出来た。だけど目標だけを封印できるなんてそんな都合のいい魔法なんてそうそうある訳が無い。アレはねその周辺の魔力まで封印してしまうんだ。」

「周辺の魔力まで…？」

「うん。するとどうなると思う？…今まで魔力で支えられていたウエスペルティア王国は、その魔力の大半をあ封印魔法で失ってしまう。今は多少魔力が残っていたのか何とか大丈夫みたいだけど、それが消費された瞬間、支えを失ったウエスペルティア王国は崩壊してしまうって訳さ。」

「な…ならその魔力を補充すれば…！！」

「それは無理だよ。理屈ではそうなんだけどさ、王国の島々を支えるほどの魔力なんてどこから補充するのさ？例えばナギヤ”然”状態の俺がそれを補充するとしても何日…いや何年掛かるか分からないよ。その前に魔力が尽きる。…そもそもその空間にどうやって魔力を補充するの？その方法すら分からないんだよ？」

「な…なら！黙って見とけっちゆうんかい！！崩壊するのを！！」
思わず龍ちゃんが声を荒げる。
その目にはうつすらと涙まで浮かんでいた。

龍ちゃんは、俺と一緒に行動するようになってからいろいろ変わった所がある。

本来幻獣などは、自然に逆らう事をせず、身を任せるものらしいのだが、龍ちゃんは過剰じゃない限り人の味方をして、自然に抗うようになった。

聞けば、「ワイと同じように他の幻獣も人となかようできるようにしたいからなあ」らしい。

そう言ってくれたときの喜びは今も覚えているし、俺もその場で賛同したくらいだから。

だからこそ俺がこうして淡々と喋っている事に怒りを感じているのだろう。

まったく…俺の相棒ならこんな時でも俺を信じろって…

「まって龍ちゃん！だれも黙ってみてるなんて言っていないよ。それに俺がまさかその事を知って何もしないとでも思うのかい？」

「え…？じゃ…じゃあ！」

やれやれといった感じで龍ちゃんにそう話すと、さっきまで泣きそうだった顔が一瞬キョトンとして、俺の言葉を理解できた瞬間顔色が明るくなる。

「そう。今やっている事は少しでも状況をよくしようといろいろつくっている所さ。」

「なんやそれ！そうならばよそう言わんかい！！！」

「いやそつちが勝手に勘違いしただけだろ？」

「う…うるさいわい！んで？どうするつもりなんや？」

ちよつと照れた感じでこつちを睨み、これからどうするかを聞く龍ちゃん。

その目にはもう悲壮なんてものは無い。

あるのは何とかしてやるうと言つ熱い眼差しだけだった。

「まず、最初に言わないといけないのは、どうやってもウエスペルタイア王国は崩壊してしまうと言つ事だ。コレはどうやっても変えられないだろ…」

「そうか…やったら状況をよくするってどういう意味なんや？」

「確かに王国は崩壊してしまうかもしれない。だけど、そこにいる人や幻獣たちなら話は別だ。助けられるかもしれない。」

「なるほど！だから状況を良くするっていったんか。んで？作戦は？」

「それを今から説明する。けどその前に…龍ちゃん”紅き翼”のメンバーを至急集めてくれ。」

「ん！了解や！」

龍ちゃんはそう言つとすぐにドアから飛び出して皆を呼びに言った。

ここからだ。

原作ではアリカ姫が何とか少しでも犠牲を減らそうと頑張っていたけど、俺達がいる限り一人ですべてを背負わせない。

俺達も最後まで責任をとってこそすべて丸く収まるって言うもんだ。

だから…

かならずウエスペルタティアの民達を…そこに住む生き物達を救ってみせる！

さあ始めようか…” 紅き翼” にしか出来ない最高の救出劇ってやつを！！！！

.....

しばらくして、俺の部屋には” 紅き翼” のメンバーがそろっていた。皆最初は何で集めたんだとか、いろいろ文句を言っていたが、俺がこれから起こる事を説明し始めると、事態の重要さに気付いたのか、皆真剣な顔つきになって話を聞いていた。

そして最後に俺が思っていた事を話すと、皆同じ気持ちのようで全員絶対助けてやると意気込んでいた。

「皆話しは理解できた？」

「ちくしょう…まだこんな問題が残ってるなんてな。何でもっとはやく俺は気付けなかつたんだ！」

「ナギ…。それはここにいる皆も同じですよ。…でも良かったタケルがそれに気付いてくれて。このままでは取り返しのつかないことになる所でした。」

「じゃな。してタケル？お主のことじゃ、どうするか考えておるのじゃろ？」

「タケル。私にできることなら何でも言ってくれ！」

「腕もくっついたし。俺様に何でもいいな！」

皆そう言っただけ俺を見てくる。

ナギは気付けなかった自分を責めていたが、アルに諭されて気持ちを入れ替えたのか、真剣な顔つきでこつちを見つめていた。

「じゃ作戦を言うよ？まず、ガトウとタカミチはアリカ姫を手伝ってくれ。あの人もこのことに気付いているはずだ。じゃないとわざわざあそこから離れたアリアドネーで式典を開く事なんかしない。」

「どうということだよ？」

「いいかナギ？あの戦いで傷を負ったものは大勢いた。本来ならその場で一泊でもして負傷者の手当てをしたほうが良いのに、わざわざ負傷者を戦艦に運び込んで、こつちに運ぶ必要なんてないと思わないか？」

俺の言葉に皆確かに…と呟く。すると詠春が疑問に思ったことを口にする。

「たしかになそうかもしれない。でもタケル？それはアリアドネーの方が効果的な治療をできるからじゃないのか？治癒魔法も進んでいるし…」

「だけどあそこにはアリアドネーの戦艦も居たんだよ？もちろん治癒魔法が得意な人だって乗っていたはずさ。それなのにか？」

「…そうだな。」

「これは俺の予想でしかないけど、負傷者をアリアドネーに運んだり、式典をすると決めた理由はすこしでもウエスペルティアから人を少なくするためだと思うんだ。ここまで大規模の戦争の終結、しかもそれを救った英雄のお披露目、わざわざ出向いて見てみたいと思う人も少なくないと思うからね。」

俺の想像に皆”なるほど”と頭を縦にふる。

「だからアリカ姫は戦艦などを使って残っている人を運び出そうとするはずだ。だけど、アリカ姫やその側近達だけではどう考えても手が足りないと思う。だからガトウとタカミチはそれを手伝って欲しい。でももしかしたらアリカ姫はシラをきつたり、一人で抱え込もうとか考えてるかもしれないからそこら辺は二人でうまくやってほしいかな。…最悪アリカ姫に内緒で事を運んで、アリカ姫が行動した時に駆けつけるとかの方が良いかもしれない。」

「それはありえるな…。わかった。まかせてもらおう」

「僕もがんばります！」

ガトウとタカミチが頷くのを確認して俺は続きを話す。

「それで他の面子だけど、まず今のままじゃ何にも役に立たないんだ。」

「は？いや…ちょっとまで。確かに戦艦とか俺達には用意できないだろうが、魔力を使って人を運ぶことぐらいならできるぞ？」

ナギがそう反論する。

ラカンや詠春も同じように頷くが、アルとゼクトはどうやら俺の考えが分かったのか頭を悩ませていた。

「おいアル！お師匠！何で何も言い返さないんだ？」

「ナギよ…。今ウエスペルタティアがどういう状況なのかは知っておるな？」

「ああ、王国を支える魔力が無くて崩壊しかけてるんだろ？」

「そうです。つまり今ウエスペルタティア王国の周り…大気中に魔力が無い事になります。ナギ分かってると思いますが、いつも通り空を飛んだり、転移魔法を使うには大気の魔力を必要とします。それが出来ないとなると今私達にできる事はありません。」

「そう。何時間…いや数分間なら可能かも知れないが、己自身の魔力でどこまで出来るかわからないし途中で力尽きたらその場でアウトだ。気については正直分らないけど、あの浮かんでいる島々からこっちの大陸までの距離を考えると、ジャンプして届く距離じゃないと思う。」

そついい終えると全員悔しそうな顔をする。

ドンー!!

「こんな大変な時に俺は何もできないって言うのかよ…!!」

地面に拳を撃ちつけてうなだれるナギ。

皆ナギと同じ気持ちなんだろう…だれも声をかける事が出来なかった。

ただ一人…龍ちゃんを除いて

「皆あほやなあ…。タケちゃんがそんな事分かってないわけが無いやろ? さっきの言葉も”今のままじゃ〜”とかつけとつたし、解決する方法があるんやろ?」

さすが龍ちゃん。

さっきまで皆と同じ反応をしていた奴とは思えないね。

「なんや…タケちゃんに言いたい事ができたんやけど、いいかえせん気がするわ…」

『本当かタケル!!!』

龍ちゃんの言葉を聞いて皆顔を上げて俺に詰め寄る。

「ああ…まあ…。とりあえず落ち着いてくれ。さすがに詰め寄せられると怖い…」

そう俺が言つと皆俺から少し離れて聞く体勢になる。

「ぶつ…。まず、あそこでは魔法は使えずせいぜい体の強化ぐらい

しか出来ないだろう。だけど魔道具なら別だと思っ。」

「でも魔道具も大気の魔力を使うのでは？」

「俺もそう思ってたんだけど、よくよく考えたらあの大規模封印術を使っている時でも近くにいた戦艦とかは動いていた？それから考えると魔力をためこんだものならあそこでも発動できるんじゃないかと思うんだ。もちろんずっとって言う訳じゃないと思うけど…そこら辺は込めた魔力次第だな。そこで俺は考えてつくってみたんだ。コレを」

そう言っただけの間にバスケットボールぐらいの大きさのガラスの玉を置く。

「これは……魔法球ですか？」

それを見たアルがタケルに質問する。

「正確にはもどきだけどね。もどきの理由は、時間はこつちと一緒に、中にあるのもただっ広くて真っ白な地面、そして入れる容量が決まっているってことかな？」

タケルがそう話した瞬間。アル・ゼクト・ガトウ・龍ちゃんから笑みがかぼれる。

どうやら俺がやるうとしていた事がわかったみたいだ。

「なるほどのう。うまい手を考えたもんじゃ」

「確かにこの方法ならいけそうですね」

「さすがだタケル！」

「わいは信じとったで」

しばらくして、詠春も分かったのか頭を縦に揺らしながら何度も頷き、タカミチはガトウに答えを聞いていた。そしていまだ分かってないのは体力馬鹿達。

「というかラカン！お前馬鹿だけどさっしはいいほうだろうが！」

「おい！何で俺達以外皆わかったような顔してるんだよう。ずるいぞ！」

「そうだぜ！さっさと説明しやがれ！！」

「つまりあそこにいる人とかはコレに入ってもらって、王国の外にもち運ばうって言う事だよ。…たのむからコレくらい分かってくれよ。」

「「おおー！！」」

ポン！と一昔前のリアクションをしながら頷く二人。なんか懐かしいな…と思いつつながらも続きを話す。

「今の所コレ一個しかないけど、作り方は結構簡単だからゼクトとアル、そしてナギと一緒に今からできるだけつくる。特にナギは魔力が多いから魔力を込めるのを手伝って欲しい」

「わかった。」

「詠春さんとラカンはコレの材料の調達。後コレをを運ぶための何

かを探るか、作って欲しい。ちょっとやさつとの衝撃で壊れるほどやわなつくり方はしてないけど、できれば安全に運べるよう考えてくれ」

『了解』

「龍ちゃんはしばらく経ったら俺とオスティアに行こう。コレが本当に使えるか試さないと意味無いから。」

「まかせとき」

「ガトウとタカミチはさっき言っていた事をたのむ。それとできればいつアリカ姫が動くか調べて欲しい。出来れば正確な時間を頼みたい。ギリギリまでコレを作っておきたいからね」

「了解だ。」

「作戦はこれだけ。じゃ…ナギ後はまかせた。」

「おう…。まずこの事態に気付けたのも方法とか考えてくれたのもタケルのおかげだ。…ありがとう」

ナギがそう頭を下げると、皆同じように俺に頭を下げる。

その状況がちょっと恥かしくて、くすぐったくて顔を背けるとナギがそれを見て少し笑う。

「はは…。さて皆！タケルのおかげでこのやべえ状況でも何とかできそうだ！俺達はこんな状況で黙っていられるほど諦めがいいわけじゃない。そうだろ！？」

そこはダメだとはつきり言った。

これで、あらかた救出の目処がたったが、正直これでも俺は足りないと思う。

正確にこの王国にいる人数がわからないため、全力で作っても足りなくなるのではないかと考える事はおかしい事じゃない。

”常に最悪を考えて動け” コレは戦争とかでよく使われる言葉だけど、常日頃から考えていても悪い事じゃないだろうと思う。

だから俺は無理かも知れないけどあるお願いを龍ちゃんにするのだった。

「龍ちゃん？」

「なんや？」

「今やっていることで全部丸く収まればいいんだけど、最悪の状況…足りなくなる事も俺は考えたい」

「せやな。常に最悪を…その考え方はええと思う。それでどうするんや？」

「龍ちゃんにあることを頼みたいんだ。それは……………」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「……………！タケちゃん？それマジでいっとなるんか？」

案の定龍ちゃんが驚いている。

でも仕方が無い。それくらい無理難題を頼んでいるんだから……でもこのことがうまくいったら、ほぼ確実に助けられると思う。

「無理を言っている事は分かるんだけど、でもうまくいけばほぼ確実に全員助けられる。」

「そらそうやるうけど……あんなタケヤン？これは矜持の問題に関わるんやで？それ分かって話とるんやろな？」

「もちろん。龍ちゃんに教えてもらったから知ってるよ。」

「……わーった、わーった。話してみるわ。だけどうまくいかんかも知れんことだけは覚えといてや？」

「わかった。」

「ほな。今から行って来るわ。」

「いつてらっしゃい」

俺は龍ちゃんを見送ると、転移魔法でナギ達が居る場所へと戻った。

これで今出来る事はすべてやったはずだ。

あとは失敗しないように、全力で準備をするだけ……。

どうか願わくば、皆が笑える明日が迎えられますように……

ウェスペルタティア王国崩壊まであとわずか……

第十七話：守るために（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想・意見お待ちしております。

今回出した簡易魔法球ですが、簡単に言うなら脱出ポットですね。最初錬金の才をどうしようか迷っていたのですが、思わぬ所で使えてよかったです。

あと活動報告の方にヒロインの最終決定を載せましたので、そちらもご覧ください。

次回ですが、できれば今週中にでも投稿したい所ですが、何分忙しくなっているのでどうなるかわかりません。

予定としては今年中には麻帆良編にまでいきたい所ですがどうなる事やら…

第十八話：守れたもの（前書き）

お疲れ様です。

何とか書き上げる事が出来ました。

過去最高の長さになってしまいましたが、最後まで読んでくださると嬉しいです。

あとがきの方に原作との変更点を書きましたので、よろしければそちらもご覧ください。

それではどうぞー！

第十八話：守れたもの

ウエスペルタティア王国の崩落を”紅き翼”が知ってから数日が経過としていた。

その間俺達は順番に休みを取りながら簡易魔法球を製作し、俺が想像していたよりも多くの量産に成功していた。

龍ちゃんといえば、俺が用事を頼んでからこちらには帰っていない。

他のメンバーが心配して俺にいろいろ訊いてきたが、”もしものために手をうつてもらっている”と説明し、しぶしぶながらも納得してくれた。

原作ではそろそろ記念式典が起こる頃なのだが、やっぱり現実とは別で多くの人が戦争の事後処理に追われおそらくまだまだ時間がかかるだろう…。俺達にしてみれば願ったり叶ったりである。

そして今日も準備で一日が終わろうとしていた時ガトウから緊急の念話が届いた。

どうやらとうとうその時がやってきたようだ。

「タケル聞こえるか？」

「ん？ガトウか？聞こえているよ？どうしたの？」

「とうとうアリカ姫が動き出したぞ。今オスティアが出せるすべての戦艦を用意して大陸に向かうみたいだ。事情を知らない人には復興のためと偽って行動している。……俺もそう言われた。どうやらごく一部で解決させようと本気で思っているみたいだ。…まったくなんて姫様だ。」

「了解。ならこっちも行動を開始する。転移魔法で近くまで行けばおそらく艦隊がつく前にはこっちの作戦を実行に移せると思う。ガトウはどうするんだ？」

「俺は戦艦にもぐりこむつもりだ。さすがにタカミチには荷が重いからこっちに残すつもりだ。」

「わかった。じゃ王都オスティアで逢おう」

「ああ」

ガトウとの念話を切り、近くに居るメンバーの顔を見る。

どうやら俺がガトウと念話している顔を見ておおよその事は分かっているみたいだ。

「皆。とうとうアリカ姫が動き出したよ。ガトウは隠れてアリカ姫について行くみたいだ。」

「そうか。…でも何でアイツはガトウとかに相談しないんだ？相談した方がいいだろうによ…」

「大体の予測はついてるけど、時間が勿体無い。とにかくこっちも行動を開始しよう。」

「そうですね。それで作戦ですが、簡易魔法球にどうやって人を入れるつもりですか？」

「それだけど、さすがに正直に話しても入ってくれないだろうから、アリカ姫の名前を使って見るのはどうかな？」

「とうとう?。」

「最終決戦の場になり、巻き込まれたウエスペルタティアの民にせめてもの償いとしてアリアドネーに招待したい」とアリカ姫が言っていたが、他の島々にも人がいて開会式に間に合うようにするには時間が足りない。なので効率を良くするためにこの魔法球に入っ
て欲しい。…って感じはどうだろうか?」

「ふーむ。きわどい所じゃな。確かにウエスペルタティアの民達はアリカ姫に信望しておるからうまくいくかもしれんが、それをワシ達
がやっている理由にはならんのではないか?」

「そこはアレだよ。”紅き翼”はアリカ姫の騎士って言うのは皆知
っているだろうから、無理やり手伝わされたとしても言っておけばい
いんじゃないかな?”お主等が手伝った方が早いじゃろ?”とかい
いそうじゃない?」

俺がそう話すと皆なんとも言えない顔をする。
多分簡単にその光景が想像できたのであろう…。
あの人ナギが騎士宣言してから俺達を自分の手のようにコキつかっ
ていたからな。

「……私達は簡単に想像できませんが、ウエスペルタティアの民達が
どう思うかは正直な所言ってみなければ分かりませんね。でもその
案以外は思いつきそうにありません。それでいきましょう。」

「よし。後はあっちで臨機応変に対処するって事で何とかするか。
それじゃ俺達も行くとするか。……ウエスペルタティアの民を助け
によー。」

ナギがその意見をまとめ、俺達は転移魔法でウエスペタティア王国の近くまで飛ぶ事にした。時間はもう無い。

とにかく今は最善が尽くせるように頑張るだけだ！

【アリカside】

「姫様。今の所予定通りに進んでおります。我々が計算した所によると崩壊まで後三日。あちらにいる者からの報告によれば、予兆として小規模の地震が島々で起きています。このまま行けばあと数時間で到着できると思います。」

「うむ。もつと速度を出せるなら出すように言っておいてくのか。三日後と言うのはあくまで私達の予想でしかない。予定よりはやくなるかも知れない事を忘れるな！」

「はっ！……アリカ様。このような状況下の中、訊くのは間違っているかもしれませんが……なぜ”紅き翼”にも協力を要請しなかったのですか？あの者たちがいればもつとうまく事が運ぶのでは？」

「っ……！それはならぬ。ならぬのじゃ。これは私達の問題じゃ。

あの者達は関係ない。……もうよい下がれ！」

「はっ……」

”紅き翼”に伝えるか……もう何度同じ事を聞かれたであろうか。だが、決して教えるわけにはいかん。特にナギにはな……

あやつがこの事を知ってしまえば、己の身も省みず助けようとする

に違いない。

そしてナギに連れ添うように他の”紅き翼”のメンバーも無理をす
るだろう。

それは…つまりまたナギ達を危険にさらしてしまうと言う事だ。

そう思つて長年仕えてくれたガトウにもこのことを伝えなかったの
じゃ。

あやつはきつとナギ達に伝えてしまつたらうからの。

大体、ただでさえ”紅き翼”には圧倒的に戦力が足りない中、親玉
を倒せと無理を言ったのだ。

その間私達は何をしていた？

身の危険が及ばない所で、頭の固い連中と話し合いをしていただけ
ではないか！

体中に傷を負い、血を流し、常に死と隣り合わせの戦場で戦つてい
たあやつらにまた助けを請うのか？

”英雄”…”英雄”と周りは囁し立てるがナギ達も同じ人なのだぞ
！？

私達と同じく血が流れ、私達と同じように泣き、私達と同じように
……キズつくのだ。

もう良い…もう良いのだ。

彼らはもう十分この悲惨な戦争で心をキズつけてきた。

いつも皆の先頭に立って気持ちを奮い立たせてきたのだ…。

今度は私の番だ。

今まで何もできなかった私が今度はやらなければいけないのだ。

それに……どうせ民をすべて助ける事は出来ない。

何度も考えたが、戦艦の脱出もくわえた時間を入れたらどうしても
まわりきれない島が出てきてしまう。

それでも何とかしようと、無理を通してアリアドネーで記念式典を行う事にして、少しでも民達をオスティアから遠ざけるようにした。だが、状況は思わしくなかった。それならとすぐにでも戦艦で救出へ行こうとしたが、今度は議員どもが渋って今の今まで時間がかかってしまった。

私はなんて無力なのだ…。

だが私に出来ることは、まだある。

そう民を助けられなかった愚か者として皆の非難を受ける事だ。

だがそこにナギ達がおれば一緒になって非難を受ける事になる。

それはなんとしてでも避けたい。

あやつらは……”紅き翼”は真の英雄じゃ。

今まで何も恩返しが出来なかったあやつらに、私から送れる数少ない恩返し。

皆に崇められ、讃えられるようにし、これからをせめて幸せに過して欲しい。

あのとこの事はすべて私が引き受ける。

だから”ナギよ…我騎士よ…

どうか気付いてもこちらにはこないでくれ。

私に出来ることはもうこれぐらいしか出来ないのだから……

「アリカ姫様!!」

「なんじゃ?」

「あの…本国から連絡が入りまして……それが…その…」

「どうしたのじゃ?はつきり申さんか!」

「……オスティアに”紅き翼”のメンバーが現れたと言っております」

「!?!?!なんじゃと!?!」

【ナギside】

「アル!そつちはどうだ?」

「あまり芳しくないですね。信じてくれる人がいるにはいるんですが、さすがに急だと準備に手間取っていますよ」

「そうか……まじいな。予定の半分も出来てねえじゃねえか。」

そう言つて俺は目の前に広がる光景に目をやる。

タケルが案を出してくれた作戦はひとまずは成功した。

姫さんの奴にはすこし申し訳ないことをしたかもしれねえが…、どうやら俺達が思っている以上に姫さんの性格はウエスペルタィア

の民に知れ渡っていたようだ。
……すこしは隠そうとしろよ。……姫なんだからよ。

それはともかく、簡易魔法球には不信がりながらも皆入ってくれて
るみたいだ。

それもこれも、ここにいたオスティアのお偉いさんが、俺達の言葉を
を肯定してくれたからだ。

”ご協力感謝します。…ですがいつの間ここに来る事が決まった
のですか？”

そう言われたが、とりあえずは適当にごまかしておいた。

……やっぱり俺達には伝える事無く、自分一人で何とかしようとし
ていたみたいだな。

まったく……何のために俺はお前の騎士をやっていると思っている
んだ！

ザザ……ザザ……

ん？タケルに持たしてもらった通信機がなってるな。

最初はこんなものいらねえ…とか思っていたが貰っというて正解だっ
た。

ここに来たとたん念話がうまく使えない。

話すことは出来そうだったが、いつもみたいに気軽に使えず、結構
気を使わないと無理だ。

どうやらこれも大気に魔力が無い弊害って奴だな。

…とりあえず通信にでねーとな。

「こちらナギだ。どうした？」

「あーこちら詠春だ。こちらも兵士達が誘導を手伝ってはくれてい

るが芳しくない。そっちはどうだ？」

「こっちも同じだ。今すぐ魔法球に入ってくれるやつは殆どいない。戦艦が着いたら少しは変わるかもしれないねえが……それだと間に合いそうにねえかもな。やばいぜ？」

「……そうか。先ほどゼクトから訊いたんだが、予想以上に魔力の減りが早いみたいだ。さすがに民達に魔法を使うなともいえないから仕方が無いのかも知れないが……このままだと、ガトウが知らせてくれた予定よりはやく崩落が始まるみたいだ。……現にさっきから地震が頻発して起こっている。」

「っ……！そうか。こっちは島が大きいせいか、まだそこまで地震は起こっていいえ。とにかくなるべく急ぐぞ。」

「了解。」

詠春からの通信が切れ、俺は考える。

このままだとさすがにやばい。

もう後、数時間もすれば戦艦が到着するだろうが、時間が足りなさ過ぎる。

今の所民達の混乱はないみたいだけど、いつ混乱が起こるかわからねえ……。

どうする……どうすればいいんだ！

考えるナギ！

あきらめるなんて俺の辞書にはねえ！！

「お主は…ここがどれ…ムグウ」

アリカ姫が、これから起こることを口にする前に、ナギが慌てて口をふさぐ。

（おい！お前こんな所で何を言い出すんだ！！パニックになっちまうだろうが！！）

ナギがアリカ姫だけに聞こえるように叫ぶ。

周りから見たらナギがアリカ姫を襲っているように見えなくも無いのだが、どうやら周りにいた民達は、じゃれているだけど勘違いしたのか、生暖かい目でそれを眺めていた。

ちなみに、なぜそう見られたかと言つと、ことあるごとにアリカ姫がナギを連れまわし、わがままを言っていたのを目撃されたからである。

「ムグームグー！！」

口を塞がれている為、何を言っているのか分からないが、どうやら文句をまだ言っているらしい。

言葉は分からないが、アリカ姫の目がそんな目をしていた。

（まったく。わかった。あつちで話し訊くからよ。今はとりあえず黙ってついて来てくれ。…たのむから黙ってだぞ。）

「……ムグ」（コクコク）

とりあえず肯定を意味するであろう言葉と、頷く事で異論が無い事を伝え、ナギはそれを確認するとアルにしばらくここを離れると話

して、アリカ姫を人気が無い場所へと連れて行った。

「……よし。ここなら誰もこねーだろう。」

そうナギがあたりを見渡しながら呟く。

「ムゲームムゲームグー!!!」

「お？ワリィ…口ふさいだまんまだったな。」

ナギが今更気付いたように、アリカ姫の口から手を離す。

自由になったアリカ姫はよっぽど苦しかったのか、ゼーゼー息を荒げながらナギを睨みつける。

「お主という奴は……もっと早くに気付かぬか!!この馬鹿者!!」

「だから悪かったって言ってるだろ?…それより話はいいのかよ?」

あきらかに悪びれて無い表情をしながら、とりあえずアリカ姫を落ち着かせる。

そして、表情を真剣なものに変えアリカ姫を促す。

「そうじゃった…何故お主等がここにおるのじゃ?」

「なぜって……姫さんが一人で抱え込もうとしているもんを分けてもらいにだよ。」

「……何のことじゃ?」

ナギの一言で表情が変わるアリカ姫。

だがそれも一瞬の事…すぐに普段通りの表情に戻しシラをきる。

「まだシラをきるつもりか？ウエスペルタティア王国が崩落する前に、少しでも民を避難させようっていう姫さんを助けにきたって言うてんだよ！」

「……何故その事を知っておるのじゃ！それはごく一部の者しか知らないはず……」

「タケルのおかげだよ。…アイツが気付いてくれた。あいつがいなきゃ…今頃俺達は何にも知らないで騒いでいただろうさ。」

「…あやつがか……余計な事を……」

チツッと舌打ちしながら呟く。

「…なあ姫さん。何で一人でやろうとしたんだ？どう考えたって一人でやるのは無理があるだろうが？」

そんな表情を見ながら、ナギは今まで疑問に思っていたことを聞いてみる。

ナギ自身、一人で突っ走ってしまっ事が多々あるのだが、この戦争を通じて仲間を信頼し、相談することを覚えたナギから見れば、アリカ姫の今の行動は昔の自分を思い出させた。

「…うるさい。そんなものわたしの勝手ではないか！」

その一言にナギは思わずカッとなる。

今言った一言はとても許せる一言ではない。

明日を生きたくても生きられなかった人達がこの戦争では多く出てしまったというのに、せつかく生きている人達をこともあろうにアリカ姫は自分の感情だけで死なせようとしているのだから。

「……ふざけるなよ。お前の勝手って奴で死ぬ奴が増えるかもしれねーんだぞ？何をそんなに意地はってやがるんだ！！馬鹿かお前は！！！」

「……………」

「っち！だんまりかよ。まあいい…でもこれだけは言っておくぜ？俺はお前がどんな気持ちでいるかなんてわからねえ…。けどな、姫さんが守りたいって思っているもんはな、俺も守りたいってもんなんだよ！……俺だって一人で何でも出来ねえ、現に他の奴らに助けてもらってばっかだからな。……だからせめて俺ぐらいには本心さらけだしてたよってくれよな！」

「……………！！！」

ナギがそう言っただけで笑顔を見せると、思わずアリカ姫はそれに見惚れてしまう。

初めて会った時から、ある感情を抱いていたが、それがアリカ姫の心で更に大きくなるのを感じる。

もちろんその感情の意味する所は分かっているのだが、素直になれない性格と変なプライドが邪魔をして、ナギに伝える事は今までなかった。

無論このような事態になってしまっただけからもう言いつもりはないのだが、それでもやっぱり自覚してしまう。

この人は自分にとって”特別な人”なのだ…

「そんじゃ俺は俺のやるべきことに戻るぜ？姫さんも、姫さんが出来ることをやればいいからよ！」

そんな事を思っているとも知らず、ナギはいそいそとその場を後にする。

そして一人その場に残されたアリカ姫といえは、走っていく後ろ姿を見ながら呟く。

「……………馬鹿者が。私の気持ちも知らないで……………ほんと馬鹿者が……………じゃが……………ありがとう」

それはアリカ姫が自分の心のうちを始めて言葉にした瞬間でもあった。

……………
……………
……………

ナギとアリカ姫との会話が終了してから、一日が過ぎようとしていた。

ナギ達の読み通り、アリカ姫と連れてきた戦艦を見てから、ウエスペルタティアの民達は次々と簡易魔法球に入っていた。

それを見たナギ達は少しだけほっとすると、作戦を次の段階に以降した。

それは、要領がいつぱいになり、それがある程度溜まってきたら、小型の戦艦を使い、とりあえず近くの町まで輸送する。

というものだった。

当初それは秘密裏にガトウが用意していた船でおこなうつもりだったのだが、アリカ姫を交えて相談した所、アリカ姫達も協力することになったのだ。

ちなみにガトウの姿を見たアリカ姫が驚き、叱ろうとした所をナギが必死になって止めていた。

民達には”全員そろってから再度出発する”とアリカ姫が言い、今の所変な不信心は持たれていない。

だが、効率が上がったとしても、状況は芳しくなかった。

なぜなら思った以上に難民があり、しかもここに留まると言い、その場から出ようとしないうものがいるからだ。

そういつた輩にはアリカ姫やナギ達自ら説得にあたり、何とか連れ出そうとしている。

さすがに”姫”と”紅き翼”に説得されればと…その場を離れようとするのだが、準備も何もしていなかったため更に時間がたった。

もうすぐそこまで崩壊が迫っているというのに…どうすれば…!

事情を知っている人達の心の中は全員一緒だった。

だが、こうする以外方法が思いつかず、内心焦りながらもとにかく行動をするのだった。

そしてその時はやってきた。

「姫様！民の移動ですが、今魔法球に入っているものも含めて、8割を超えました！」

「まだ8割しか出来てないのか…」

船から出て自ら指揮を執っているアリカ姫に、側近からの報告が入る。

その報告を聞き、アリカ姫は目を細める。

今民達の前にいるため、露骨に表情を出さないが、内心かなり焦っ

ていた。

思った以上に人の移動が遅い。

予定ではもうすべて移動できてもいいぐらいなのに…
やはり予想以上に人が多かつたせいか…。

そんなアリカ姫の気持ちを察するように、側近は言葉を続ける。

「はっ！…ですが、予測の日まで後一日はあります。このままいけば問題ないと思いますが…」

「それはそうじゃが………」

側近の言葉に、心の焦りが少し治まったその時！

大きな音を立てて地面が大きく揺れだした。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「！！！！これは…今まで起こっていた地震の比じゃない。」

「姫様大変です！！！」

「なんじゃ！！！」

「周囲を警戒していた戦艦からの報告ですが、ウエスペルタティア王国にある小さな島々が崩壊を始めたとのこと。ただし既にその住民は避難が完了しており、人に被害は無いということです」

そう報告され、アリカ姫は瞬時に察知する。

ウエスペルティア王国の崩壊が始まったと…

「姫様！」

「今度は何じゃー！！」

「たった今近くにいた戦艦から報告が来ました。この島のあちこちに罅が入り危険な状況とのこと！」

『！！！！！！』

「民達の收容を急がせよ！魔法球にまだ入っていないものは遠くにおる者を除き、直接戦艦に誘導し收容する事。発進準備もするのじやー！」

「はっ！！！」

アリカ姫に連絡をしに来た兵はすぐさま、この命令を伝えに行く。

「…姫様。もうここは危険です。小型船に乗り民達とこの場からの脱出を…」

「ならぬ！私はギリギリまでここで指揮をとる！」

「ですが！！！！」

「くどい！二度は言わぬ。それとこの事態をナギ達にも知らせよ。おそらくナギ達も、もう気付いておるじやろうが、詳しい状況は知らぬはず…。そしてそのままナギ達を援護。急げ！時間は待たずくれぬぞ！！！！」

「…はっ！」

アリカ姫の剣幕に圧倒されながら、すぐさまナギ達がいるであろう場所へ走っていく。

そしてそこに残ったアリカ姫は、大きな音と揺れの中、毅然とした態度で指示を出す。

「皆の者落ち着くのじゃ。大丈夫、何も心配せずともよい。落ち着いて私達の誘導に従ってくれ。」

その姿にその場にいた民は、不安そうな表情をしながらも、特に大きな騒ぎもせず誘導に従うのだった。

【ナギside】

アリカ姫が毅然とした態度をとって指示を出していた頃、いまだ多くの難民たちがいる場所で、誘導をしていたナギ達もまた異変に気付きながらも、自分達が慌ててしまったら余計混乱するだけだと思い、きわめて冷静に対処していた。

「皆落ち着いてくれ。確かにちよつと大きな地震だけだよ。なんてことはねえ…こっちの指示にしたがってくれれば大丈夫だからよ。」

「そうですね。皆さん。せつかく姫様が終戦記念式典に招待してくれと言っているのです。たかが地震ごときで慌てて怪我をしなければ、ついたら楽しめませんかよ？」

その言葉を聞いた民達の顔に少し笑みがこぼれるのを確認したナギ達は、心の中でガッツポーズをする。

（よし。ここで暴れられたら間に合うものも間に合わねえ。おそろく崩壊が始まったんだろう。ゼクト達が言っていたように予定よりかなり早いな。…でも後はここに残っている奴等だけだ。他の連中はもう移動し終わって、今頃姫さんの所で順番待ちをしているはずだ。ここさえしのげば大丈夫だ。）

するとそこへ先ほどアリカ姫の所にいた側近が小型船に乗ってやってきた。

側近はナギの姿を確認すると、収容を他の人に任せて、ナギ達の下へ向かう。

「ナギ殿！」

「ん？オメーは確か姫さんの…」

「はっ！側近のクルト・ゲードルと言います。アリカ姫の命によりこちらを手伝うように言われました。それと……ちよつと耳を…」

（この近くにいた戦艦からの報告で、周りの小さな島から崩壊が始まっております。そしてこの島にも多数の罅がはいており崩壊するのも時間の問題です。）

（なるほど。了解した。この辺に居る奴等は全部ここに集まっている。今詠春とお師匠が見落としがないか確認に向かっている。）

（分かりました。ではこれより私も貴方の指揮下に入ります）

「よろしく頼むぜ。じゃあうちの魔法球で誘導を手伝ってくれ。」

「わかりました。」

ナギにそう言われ指示通り動く。
それを確認すると、ナギはふと空を見上げる。

（後はこの島がどれだけ持つかが勝負だな。……タケルどこ行ったんだ？最後の手をうつてくるって言ってラカンをつれてこの場からいなくなったけどよ……。そろそろやばいぜ？…ま、信じているけどな）

そう思いながらナギは少し前のことを思い出していた。

それは地震が起こる前、この場にメンバー全員が集まった時突然タケルが言い出した事だった。

【事が起こる数時間前】

「…悪いけど、今から俺はここをちよつと離れる」

「はっ？いきなりどうしたんだ？お前にかぎって怖くなったとかじやねーのは分かるけどよ。」

タケルがいきなり言い出したことに皆困惑する。

それを承知の上だったのか、タケルは大して弁解もせず話を続ける。

「皆結構前から龍ちゃんがないのは知っているよね？」

「もちろんじゃ。ワシらがそれを訊いたらお主がもしもの時の為に動いてもらっていると説明していたではないか。」

「ああ。でなんだけど、さっき龍ちゃんから報告があつて、後もう少いでうまくいきそうなんだけど、自分ではこれ以上無理だといわれてね。応援に行きたいんだ。」

「…なるほど。でもそれはこっちをほつといてまで、行かなくてはいけないものなのですか？無理なら無理で龍ちゃんをこっちに呼び戻せは良いことじゃないですか？」

タケルが言っている事は皆理解できるし、今の状況じゃなかったら、二つ返事で了解した事だろう。

しかし、今はウェスペルタイア王国が崩壊するまでもう時間が無い状態。

流石の皆でもそう簡単に了承する訳にはいかなかった。

「確かにそれを言われると困るんだけど、これがうまくいけば決定的な決め手になると思うんだ。ゼクトが言ったと思うけど、確実に俺達が予想しているより早く崩壊が始まると俺は思うんだ。」

「理由は？」

「地震の頻度とその強さ。そして予想以上に人が多い事…これが理由だよ。」

「地震とかについては納得できるけど、人が多いというのは何故なんだい？」

タケルが話した理由で引つかかる事があつたのか、詠春が訊ねる。

「常日頃から皆魔法を多様しているからだよ。人が多ければ多いほ

ど魔法を使う人が増え、その分大気中にある魔力を消費してしまう。火を熾したりするだけで大気の魔力を消費するんだ。特に難民たちは家が無いから、火を熾して夜を過ごしたはずだ。だったら予想以上に魔力が少なくなっているに違いない。」

「なるほど。そう言われれば納得できる。」

タケルの言い分はもつともであつた。

そしてそれが本当に正しいのなら、大変な事だ。

なおの事今タケルにここを離れる事を良しとする訳にはいかなかった。

そんな中、黙ってタケルの説明を聞いていたナギが、意を決したように呟く。

「…わかった。」

「ナギ!？」

「アル…。タケルが今まで俺達の期待を裏切つた事があるか？タケルが言うんだからそれは必ず俺達の力になってくれる。だったら俺達は俺達が心底信頼する仲間を信じればいいだけじゃねーか？」

ナギがいった言葉によって皆の表情に少し笑みがこぼれる。

今までいろんなピンチを迎えてきたけど、そのたびに自分達は仲間を信じてこれまでやってこれた。

しかも、ピンチにおいて一番頼りになるタケルがそういうのだ。今更信じないという選択肢などありえない。

「…そうですね。分かりました。期待させてもらいますよ。」

「ありがとう。それと…ラカン？」

自分を信じてくれる皆に感謝しながらタケルは頭を下げた。
頭を上げた所で近くにいたラカンに声をかける。

「どうした？」

「ラカンも手伝ってくれねーか？多分ラカンの力が必要になるだろうからな。」

「お？いいぜ？どんな事やるかわからねーが俺様に任せな！」

ラカンまでいなくなる事に、少しこれからの事で不安を覚えた他の面々だったが、すぐに気持ちを入れ替え、タケル達を送り出す。

「よし。じゃいつてこい！こつちのことは心配するな。そつちに集中して成功させるよ！」

「おっ！」

元気よく返事をしたタケル達はすぐさま行動を開始して、その場を去っていくのだった。

【ナギside】

「ナギ！」

別の所で指揮を執っていたアルが、焦った表情でこちらに向かってくる。

「どうしたアル！」

その表情を見て緊急の要件だと察したナギは、ここの指揮を他の人に任せ、アルがここに来る時間さえおしいとばかりに、自ら向かっていく。

「大変です。魔法球が足りなくなりました。私達が予想していたよりも人が多すぎました。残りの魔表球の数を考えても、とてもすべて収容出来るとは思えません。」

「ちっ…マジか。」

「たとえ知っていたとしてもこれ以上は時間が足りなくて無理だったと思いますが…ナギの方はどうですか？」

悔しそうな顔をしながら話すアル。

そもそもあの短時間でこれだけの魔法球をつくれるだけでも規格外なのだ。

けしてアル達のせいとは言えない。

「俺の方は今出ているので全部だ。こっちも全員収容する事はできねーが、後は小型船にギリギリまで入れればいけると思っていただけが……クルト！！！」

ナギがそう叫ぶと、同じく近くで作業をしていたクルトが、こっちに走ってやってくる。

「どうしましたナギ殿！」

「クルト、今から小型船…もしくは戦艦をこっちに向かわすことは出来るか？」

「えっ……無理です。小型船は今ここにあるので全部です。他はもう非難させるために発進してしまいました。先に到着したものも急いで下ろしているでしょうが、たとえ今から連絡を取ってきてもらうとしても、どう考えても間に合いません。戦艦はこちらよりも大勢を現在収容しているため、こちらに向かう余裕なんてないと思います。」

ナギにそう訊かれたクルトは最初うろたえたが、気を取り直して報告する。

それを聞いたナギは更に顔を歪ませる。

「そうか……アル何か手はあるか？」

「残念ながら思い浮かびません。今私達が出来ることといえば、魔法球に収容できなかった人をギリギリまで小型船に押し込んで発進させる事だけかと。」

アルも悲痛な気持ちでナギに告げる。

そんな中詳しい事情を知らないクルトがナギ達に尋ねる。

「あの…どうしたのですか？」

「言いか良く聞きなクルト。俺達が用意した魔法球だが、数が足りなくなつた。まあ予想を遥かに超えた人数だったせいなんだが…それは今更どうでもいい。それよりもだ、お前は今ある魔法球がいつ

ばいになったらすぐさま小型船に乗せ、そのままお前も乗ってこの場から脱出しろ。その際小型船に乗れる人はすべて乗せてだ。」

「！！！！：分かりました。ナギ殿はどうするのですか？」

「俺達はこの場に残って、収容できなかった人達とギリギリまで救援を待つ！」

「そ…そんな。だったら僕も残ります！！」

クルトがそうナギに詰め寄るが、隣にいたアルがクルトの肩に手を乗せて目を合わせて諭すように話し出す。

「それはダメですよクルト君。貴方はまだ若い。こんな所で無理をする必要なんてありません。それにその歳でアリカ姫の側近をやっているのですから、優秀なのでしょう？ならなおの事無事にこの場から脱出しなくてははいけません。」

「そんな事ありません。それよりも貴方達こそこの場から早く脱出してください。もう救援なんて繰るわけが無いじゃないですか！！貴方達は”英雄”なのですよ！！？こんな場所で死んでいいはずが…」

「”英雄”か…いいかクルト？俺達は別に”英雄”なんて呼ばれなくて頑張ったわけじゃねえ。もちろん言われるのは嬉しいけどな。…俺達は俺達がやりたいと思ったから…間違っていると思ったから行動しただけだ。それは今も変わっちゃいねえ、だからここに残るのも俺達がやりたいと思っただからだ。…それに何を勘違いしているのか分からないが、死ぬなんてこれっぽちも思っただけぞ？俺達にはまだ最後の手段って奴が残っているからな！」

「最後の……手段ですか？」

「おっと。それは教えられねえな。なんせ取って置きだからよ。どうするか楽しみにしてな。……ほら涙を拭いてさっさと行動しな。時間は待ってくれねーぞ。……姫さんの事たのむな」

「ぐす……はい。絶対ですよ！楽しみにしてますからね！」

涙を乱暴に拭いて、クルトは今出来る精一杯の笑顔をナギ達に向け、その場を後にした。

それを見届けた後、アルはクスクス笑いながらナギに聞く。

「とっておきって……そんなものどこにあるんですか？」

「ん？あるじゃねーか。タケル達っていうとっておきがな！」

「そうでしたね。……ならそのとっておきを私達も楽しみにしておきましょうか。」

「だな。」

そう言って二人で笑い出す。

まるでピンチをピンチじゃないと感じるほど楽しそうな笑い声だった。

【アリカside】

「姫様！」

アリカ姫の近くで作業をしていた兵士が、報告に行く。

「なんじゃ？」

「ここにいるすべての人収容完了しました。念のため乗り遅れがないか確認しましたが、漏れはないそうです。」

「ナギ達がいる場所はどののじゃ？」

「そちらも先ほど避難所に向けて小型船が移動しているとの報告が入りました。通信する事はできませんでしたが、向かった小型船の数と一致したと言う事です。」

「そうか……何とか間に合ったか。…よし！私達もここから脱出するぞ！！」

『はっ！！』

アリカ姫の言葉で戦艦が浮上を始める。

周りにいた戦艦もそれを見て同じく浮上を開始した。

前もってすぐに移動できるよう準備をしていたため、遅れる戦艦はおらず、アリカ姫もそれを見て安心した。

（良かった。何とか全員を助ける事が出来た。…これもナギ達のお蔭じゃな。まったく本当にたいした奴らじゃ。落ち着いたらこの功績も含め、改めて謝儀をしなくてはな…。ナギ達はいららないと言うかもしれないが、今回ばかりは、何が何でも受け取って貰うぞ？…お主達はそれほどの事をしでかしたのだからな。）

そう心の中で誓う。

その際、ナギ達が困惑しながら断っている姿を想像し思わず笑みがこぼれる。

他の皆も無事に助ける事が出来て笑顔だ。

そう……誰も全員無事だと信じて疑わなかった。

ナギ達と収容できなかった人がまだ崩壊しかかっている島に残っている事も知らずに……。

アリカ姫が避難所に到着したのと時を同じくして、クルト達を乗せた小型船もまた避難所へと到着した。

それを確認したアリカ姫は、民の移動を他のものに任せて、自分はずぐさまその小型船へと向かう。

アリカ姫が小型船の前に到着すると、そこには自分の側近であるクルトが、兵士達に必死になって指示を出していた。

だが、普通ならその場所にいそうなナギ達の姿は見当たらない。

別の小型船に乗っているのかと思い、別の場所へと向かうがその場所にもナギ達の姿は見付けられなかった。

流石におかしいと感じたアリカ姫は、先ほど指示を出していたクルトの場所まで戻り、訊ねる。

「クルトよ。ナギ達の姿が見当たらんのか、どこにおるのか？」

「……………」

アリカ姫に訊かれたクルトは、思わず視線を外して俯く。
ますますおかしいと感じ再度訊ねる。

「黙っては何もわからんではないか！答えよ！！」

「……………ナギ殿達は収容しきれなかった民達と一緒にまだあの場所にいます。」

「…なんじゃと？…うそ…じゃよな？クルト嘘じゃと言っのじゃ！！」

クルトのいった言葉が信じられないとばかりに、肩をゆすって訊ねる。

その様子をおかしく感じた他の兵達も近寄ってくる。

「…本当の事です。最後の手段があると僕に伝え、その場に残りました。」

搾り出すように話すクルト。

それを訊いたアリカ姫はすぐさまその場から駆け出し、戦艦があるほうへ走り出す。

それを見たクルトは、アリカ姫が何をしようかすぐに分かり追いかける。

そしてアリカ姫に追いつくと、後ろから羽交い絞めにしその場にとどめる。

「どこに行こうというのですか！！」

「決まっておるであろう！ナギ達を助けに向かうのじゃ！！」

「ダメです。いくら戦艦だからといっても戻って来れません！！」

「うるさい！離すのじゃ！やってみなくてはそんなものわからんではないか！離せー！！」

クルトを引きずりながらも戦艦へと向かうアリカ姫。

事情を知った兵士達もアリカ姫を押さえ戦艦へ向かわせないようにする。

「アリカ姫様どうかおやめください。」

「姫様を危険な場所へ向かわせるわけにはいきません。」

兵士達も口々にそう話すが、聞き入れることなく暴れて拘束を外そうとするアリカ姫。

そんな中、また一人の兵士が話す。

「大丈夫ですよ。あの人は”英雄”ですよ？きっと…」

兵士に悪気はなく、少しでも安心してもらおうと思っていた一言だったのだろう。

しかし、その一言がアリカ姫を激怒させた。

「ふ…ふざけるなー！！！！！！」

普段見せた事の無いアリカ姫の叫びに、思わずその場にいた全員の動きが止まる。

「確かにナギ達は私達が想像もできないほど強く、そしてどんな困難も乗り越えるほどの機転をもっておるじやろう。だが！！私達と同じ人間なんじゃぞ！！”英雄”…確かにそう呼ばれるに相応しい人物じゃと私も思っておる。じゃが、ナギ達も攻撃を受ければ、血

を流す。どんなに強くても死ぬ時は同じように死ぬのじゃ！”英雄”だから死なない？”英雄”だからどんな事があつても大丈夫？ふざけるな！何故ナギ達か”英雄”と呼ばれるか…それは困難にぶち当たり、死に掛けても、そこから氣力を振り絞って立ち向かう…同じ”人間”だからそう呼ばれておるのじゃ！！お前達はそれが分からんのか！！！”

アリカ姫の叫びに全員が黙り込む。

アリカ姫を羽交い絞めにしていたクルトもまた同じだった。

「よいか！二度と”英雄だから大丈夫”などと思うな！」

そう言い切った後、アリカ姫は動く事の出来ないクルト達をその場に置いて、戦艦へと再び走り出す。

そんな時一人の若者が大声を上げてこちらにやってきた。

「大変だー！！！！ウエスペルタイア王国が……崩れだしたぞー！！！！！！！！」

『！！！！！！！！！！』

それを聞いたアリカ姫は、戦艦の方からウエスペルタイア王国が一望できる場所へと向かう方向を変え、一目散に走り出す。

その場にいた人達も一斉に走り出し、その場所へと向かった。

そして目の前に広がる惨劇に言葉がでず、ただただ呆然とその光景を眺めていた。

「まに……あわなかつた……。」

アリカ姫がその場に膝を付き、呟く。

「なぜ…じゃ…なぜなんじゃ…!!」

「何故ナギ達が死なねばならぬ！何故これまで命を懸けてまで戦った”英雄”が死なねばならぬ！」

その叫びに答えるものはいない。

「彼らがいたからこそ世界は救われた。彼らがいたからこそ、ここまで多くの民達を、この惨劇から逃す事が出来た!!」

「その彼らが何故…!!」

その叫びは皆の心の叫びをまるで代弁しているようだった。

そんな中…膝を付いて泣き叫ぶアリカ姫の下に、近くにいたクルトは声をかける。

「アリカ姫様。お気持ちはわかります。…ですが、いまだ魔法球の中には外に出してもらおうのを待っている民達があります。そして今の光景を見て不安に駆られている民達を静めねばなりません。…つらいでしょうが、立って指揮を執って下さい。」

「…無理じゃ」

「姫様…!!」

クルトを見ずそう答えるアリカ姫。

それを見たクルトは思わず声を荒げた。

するとゆっくりと顔を上げてクルトを見るアリカ姫。
その顔は涙でぐちゃぐちゃになり、顔色も真つ青に、いつもそばで見ていたアリカ姫とは別人のようだった。

「無理なんじゃ！どんな顔で説明すればいいと言っのじゃ…私には分からん！私達はいち早くこの事を知っていたのに、ギリギリまで何もできなかった役立たずじゃ。それに比べてナギ達はこの事に自ら気付き、すべての民達を助けるために最善とやっていい行動をとった。しかもギリギリまでその場で前頭指揮を執り最後まで民達を思いこの事態と真正面から戦った。…そんなナギ達を助けられなかった愚か者に何が喋れるというのじゃ！！！」

そう泣きながらアリカ姫に言われ、かける言葉を失うクルト。

（くそっ！！！僕はナギ殿にアリカ姫を頼まれたんだぞ！！なのにこのざまはなんだ！何の為にここへ戻ってきたというのだ！自分はアリカ姫の側近…支える事が仕事なのに……僕は託された事も出来ないのか！？情けない…情けないぞクルト・ゲーデル！！！！）

悔しさのあまり握っていた手から血が滴り落ちる。

その瞳には涙を一杯浮かべていた。

そんな時……崩壊している島の方から何かの叫び声が聞こえる。

グオオオオオオ…

ハツとなって、目を凝らして島の方を見ると、そこには小さな影が見える。

しかも最初は舞っていた土煙で一つしか見えなかったが、それが段々を数が増えていき、どんどんこちらに近づいてくる。

まさか幻獣が襲いに来たのか!?

そう思い、思わず身構えるが、次聞こえてきた声によってその想像は裏切られる事になる。

「おーい！皆無事かーい？」

お…おい…あれ……

お前にも聞こえるのなら俺の聞き間違いじゃねーよな…

ま…まさか……

その声に聞き覚えがあるのか、皆ざわざわと騒ぎ出す。

「あ…アリカ姫様……あれをご覧ください。」

震えるような声でクルトが喋ると、アリカ姫もクルトが向けている所に視線を移す。

するとそこには……

大きな籠らしきものを持ったドラゴン達と、その首辺りに乗っているナギ達の姿が目に入ってきた。

「お？皆流石に驚いているみたいだな。へへ…気持ちがいいぜ」

「まったく暢気ですね。…しかし私も気分は悪くないです。」

「にしてもまさか幻獣の背に乗れるとは…長生きはするもんじゃのう。」

「振動が腰に来て後が怖いな。…まあ流石にそれは贅沢か…」

「流石タケルだな。まさかこんな体験をさせてもらうなんて夢にも思わなかったよ」

「H A H A H A！ 見るよ人がごみのようだ！！」

「うわーラカン。この状況でそのポケはひくわー…めっちゃひくわー」

「って言うか何でそのポケをラカンが知っている！？なら俺も言わざるおえまい。あの呪文を…」バルス」

バチーン！！！！

「言わせるかーい！！っていうか今の状況やとマジでそれっばいやろーが！！！！」

「いいツツコミだ龍ちゃん…だが何故お主がそれを知っている！！」

まるで何てこと無かったかの様にドラゴンの上で騒いでいるナギ達。籠からは乗り遅れた人達が顔を出してこちらに手を振っていた。それを見てこちらの民達も手を振りながら歓声を上げる。

ワアアアア……………

先ほどまで絶望の表情をしていたとは思えないぐらいの笑顔。もちろんクルトも同じように歓声を上げて手を振っていたが、近くからすごい怒気を感じ、恐る恐る隣を見る。するとそこには黒い瘴気を纏ったアリカ姫がいた。

「フフフ……………」

「あ…アリカ姫様？」

「あの…馬鹿は…………私が心配していたのも知らないで……………」

その表情は笑顔のはずなのに目が笑ってはおらず、思わずその場から離れてしまう。

そしてナギ達に心の中で必死に叫び声を上げる。

（逃げてー！！ナギ殿逃げてー！！…でもこれをなだめるの僕では無理だからやっぱり早く降りて来てー！！！！！！）

そんなクルトの叫びが聞こえたのか、ナギ達を乗せたドラゴンが近くの広い所に降り立った。

ドラゴンの背からナギ達は降りると、アリカ姫のいる場所へと向かう。

「へへ…姫さん。無事かよ。戻ってきたぜ？」

ナギが笑いながらアリカ姫に話しかけると、ビクツとアリカ姫の体が反応し、無言でナギの肩を掴む。

「姫さん？」

「無事でなによりじゃナギよ。…心配したんじゃぞ？」

「お…おう。ありがとな。」

普段見せないアリカ姫のしおらしさに、思わずナギは顔を真っ赤にしてうろたえる。

それを眺めていたメンバーは、ニヤニヤしながら事の成り行きを見守る。

だが次にアリカ姫がとった行動で皆ニヤニヤしていた顔が一気に引きつる。

「ばち————ん————！！！！」

「へぶろはっ！！！！！！」

アリカ姫から繰り出される必殺の右張り手によって、ナギはぶっ飛ばされる。

それはまさに神速！

”紅き翼”のメンバーにもその軌道は見えなかった。

アリカ姫はぶっ飛ばされたナギに走って近寄ると、馬乗りになりながら、ナギの胸倉を掴みガクガクゆらす。

「…なんて私が言うつでも思ったかこの馬鹿者が！！大体なんじゃ！へらへら笑いながら帰ってきおって、私が流した涙を返せ！！心配した心を返せ！！！！そもそも幻獣に助けてもらえるなら何故私にそういわんのじゃ！！！！！！」

ガクガクガクガク……

「ちょ…姫さん…やめ……しゃべれ………うっぷ」

「早く喋らんかー！ー！ー！！！！！」

その光景を見て引きつった人達から、次第に笑い声が聞こえ始めあつという間に大爆笑の渦になった。クルトは必死になってアリカ姫を引き離そうとするが、ラカンによって羽交い絞めされ、もがいていた。

そんな事お構い無しにアリカ姫はナギをゆすり、ナギはゆすられて気持ち悪くなったのか、真つ青な顔をして口を押さえる。

その光景が更に、大きな笑いを呼ぶ事となり、アリカ姫の気が済むまで笑い声は治まる事は無かった。

なんともしまらない終わり方であったが、これも”紅き翼”らしいのだろうとタケルは思った。

こうしてウエスペルタイア王国崩壊と言う大惨事は、一人の犠牲者……いや真つ青になった一人の犠牲者を出ただけで、終りを告げた。

まさに奇跡と言うほかは無い。

この功績を讃え更に”紅き翼”の名声は広まるのであった。

第十八話：守れたもの（後書き）

長い文読んでくださってありがとうございます。

さて、原作との変更点になりますが、まずは崩壊の時期です。

原作では次の日には崩壊してしまうのですが、この話では少しの猶予があったこととしています。時間にして約一週間ですね。

なのでウエスペルティア王国から遠く離れたアリアドネーで記念式典を行う事にしました。

理由としては、このお話を書きたかったのがおもな理由でして、残りは想像です。

いくら大規模封印術をおこなったといっても、その場の魔力は消えるかもしれないが、近くに魔力を含んだ大気があったら、それが流れ込んできてもおかしくは無いと感じたからです。水が入った器から一箇所水がなくなっても、そこに周りからの水が入ってくる。

…そんな感じですよ。

もともとこれはあくまで私の想像なだけで、それは無いと思われる方もいらっしゃると思います。

そのあたりはこの話の中だけと言うことで、すみませんが納得してください。

さて、超展開と言われてもおかしくない終わり方だったと思います
が、いかがだったでしょうか？

タケルと龍ちゃんは何をしたのか？

それは次回にまた書きます。

感想・ご意見お待ちしております。

では次回またお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3392v/>

我拳は銃なりて

2011年12月11日07時47分発行